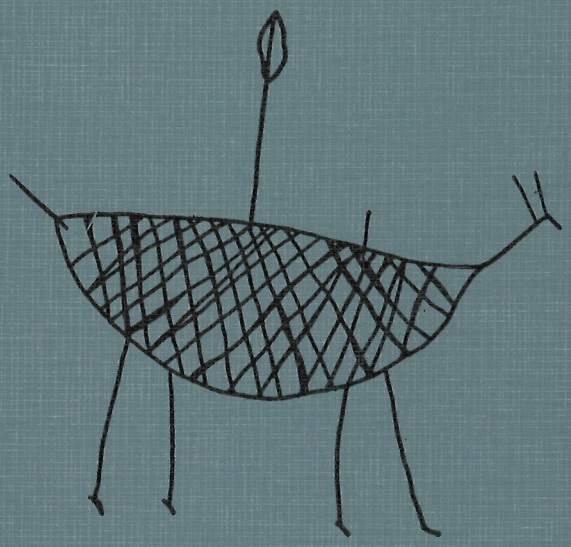


瓜生堂遺跡

資料編

1972

瓜生堂遺跡調査会

はしがき

瓜生堂遺跡調査会
理事長　益　倉　辰次郎

東大阪市瓜生堂1～2丁目，および若江西新町1～2丁目にかけて拡がる瓜生堂遺跡における発掘調査は，昭和46年5月より大阪府によって着工された中央南幹線下水管渠築造工事に伴って開始され，昭和46年度，47年度には東大阪市建設局下水道部による中部第2排水区若江分区下水管渠築造工事に関連して継続的に行なっております。

すでに公表したように中央南幹線下水管渠予定地区内からは，全国的にもまれな盛土のある方形周溝墓が検出され，また土坑墓も数多く発見されました。また弥生時代人の生活を物語る多くの土器，石器，木器など尨大な量の遺物が出土しており，瓜生堂遺跡の重要性が増々明らかになってまいりました。

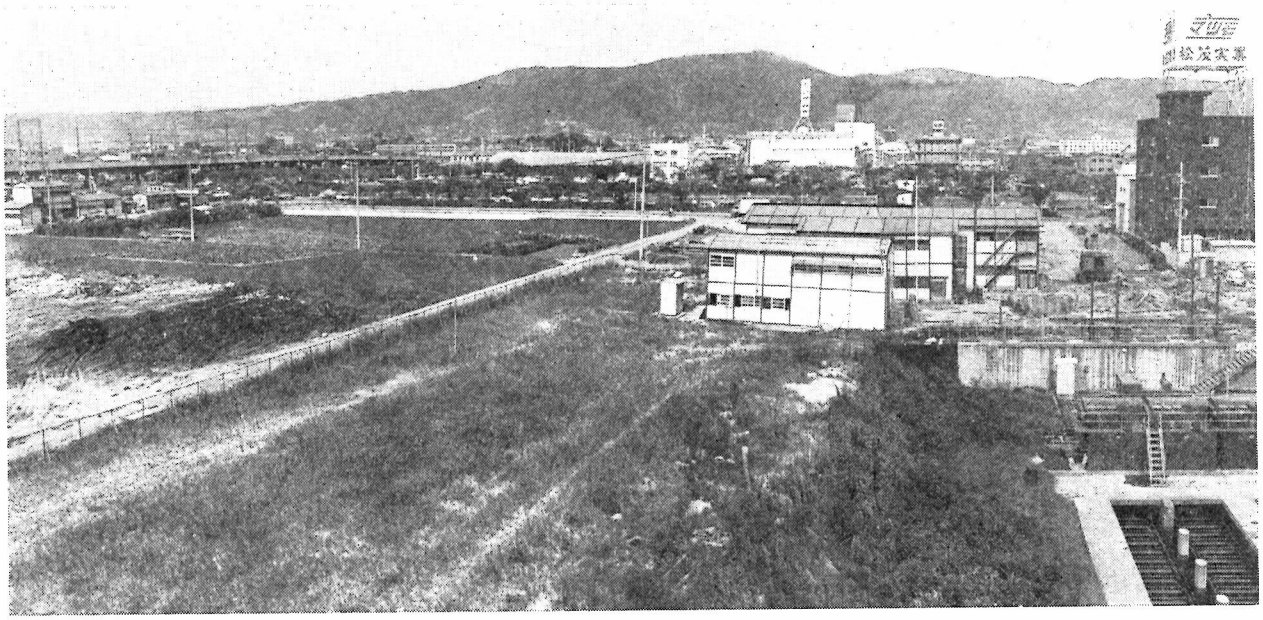
瓜生堂遺跡調査会としましては，これら尨大な遺物の整理作業を発掘調査と平行して行なっておりますが，今回主だった遺物についての整理作業の一部が一応まとまりました。遺物の整理は大変長い時間と多くの人員を必要としますため，学術報告書の作製まで資料の公表が遅れる場合が多く，貴重な資料が陽の目をみないままねむってしまっている場合が多々あると思われます。しかしながら，こういった貴重な資料はより迅速に公表するのが調査関係者の義務であると考えて，ここに『瓜生堂遺跡』（資料編）として公表すると共に，今後の整理作業の技術的，学問的向上のためにも，各方面の方々より，多くの御教示，御批判をいただければ幸いであります。

最後に短期間に集中的な仕事をして下さった調査関係者，および多くの御教示をいただいた関係各位に深甚の謝意を捧げる次第です。

例　言

1. この冊子は昭和46年度および昭和47年度の間に中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会（昭和47年5月1日付，瓜生堂遺跡調査会と名称変更）が，大阪府および東大阪市の委託を受けて実施した瓜生堂遺跡の調査により出土した遺物について，その整理結果の中間報告である。
2. 遺物の整理は，土器を今村道雄，曽我恭子，中西靖人，松下　彰，石器を四手井晴子，木器を大西真由美が中心となって行ない，阿部幸一，岡本信夫，国乗和雄，田川朝子，寺田千津子，中本百合子，福本孝弘，藤沢真依，宮前貴美子がこれを補助した。

   また，阪上昌代，藤本艶子，中川美代子の協力があったことを付記する。
3. 遺物の写真撮影はすべて藤原和子が行なった。
4. 全体の監修は，調査部長田代克己，事務部長藤井直正，調査主任中西靖人の3名がこれに当った。
5. 本冊子製作にあたっては，石器の材質について大阪市立大学教授笠間太郎氏に多くの御教示を受け，また土器については奈良国立文化財研究所技官佐原　真氏，同沢田正昭氏に多くの御教示を受けた。



第１図　瓜生堂遺跡全景

瓜生堂遺跡　資料編　目次

はしがき……理事長 益倉辰次郎

例　　言……

Ⅰ　土　　器 …… 5

1.　弥生式土器（中期）……曽我　恭子…… 5

2.　弥生式土器（後期）……今村道雄，松下　彰…… 11

3.　土　師　器……今村道雄，松下　彰…… 12

4.　須　恵　器……中西　靖人…… 13

Ⅱ　石　器　類 …… 59

1.　打製石器……四手井晴子…… 59

2.　磨製石器……四手井晴子…… 61

Ⅲ　木　　器 …… 67

1.　弥生時代前期の木器……大西真由美…… 67

2.　弥生時代中期の木器……大西真由美…… 68

Ⅳ　あとがき …… 72

図 版 目 次

図 版 1. 弥 生 式 土 器（C地点出土甕棺）
2. 〃 （第2号方形周溝墓，第2号甕棺）
3. 〃 （第2号方形周溝墓，第3号甕棺）
4. 〃 （壷 棺）
5. 〃 （壷）
6. 〃 （〃）
7. 〃 （〃）
8. 〃 （〃）
9. 〃 （壷，水差）
10. 〃 （鉢）
11. 〃 （高杯蓋）
12. 〃 （高杯）
13. 〃 （甕）
14. 土 師 器
15. 土 師 器
16. 須 恵 器
17. 打 製 石 器
18. 剥 片
19. 磨 製 石 器（石庖丁）
20. 磨 製 石 器
21. 木 器（農耕具，その他）
22. 〃 （杵，弓，その他）
23. 〃 （容器類）
24. 弥生式土器実測図（壷）
25. 〃 （〃）
26. 〃 （〃）
27. 〃 （水差型土器，壷棺，壷）
28. 〃 （壷）
29. 〃 （第2号方形周溝墓，第3号甕棺）
30. 〃 （第2号方形周溝墓，第2号甕棺）
31. 〃 （鉢，無頸壷）
32. 〃 （高杯）
33. 〃 （鉢）
34. 〃 （甕）
35. 〃 （〃）
36. 〃 （甕，蓋）
37. 弥生式土器・土師器実測図
38. 土師器実測図
39. 須恵器実測図
40. 石 器 実 測 図（石鏃，石槍，石錘）
41. 〃 （不定形石器）
42. 〃 （剥片）

43.　　〃　　（磨製石器）
44.　　〃　　（石庖丁）
45.　木 器 実 測 図
46.　　〃

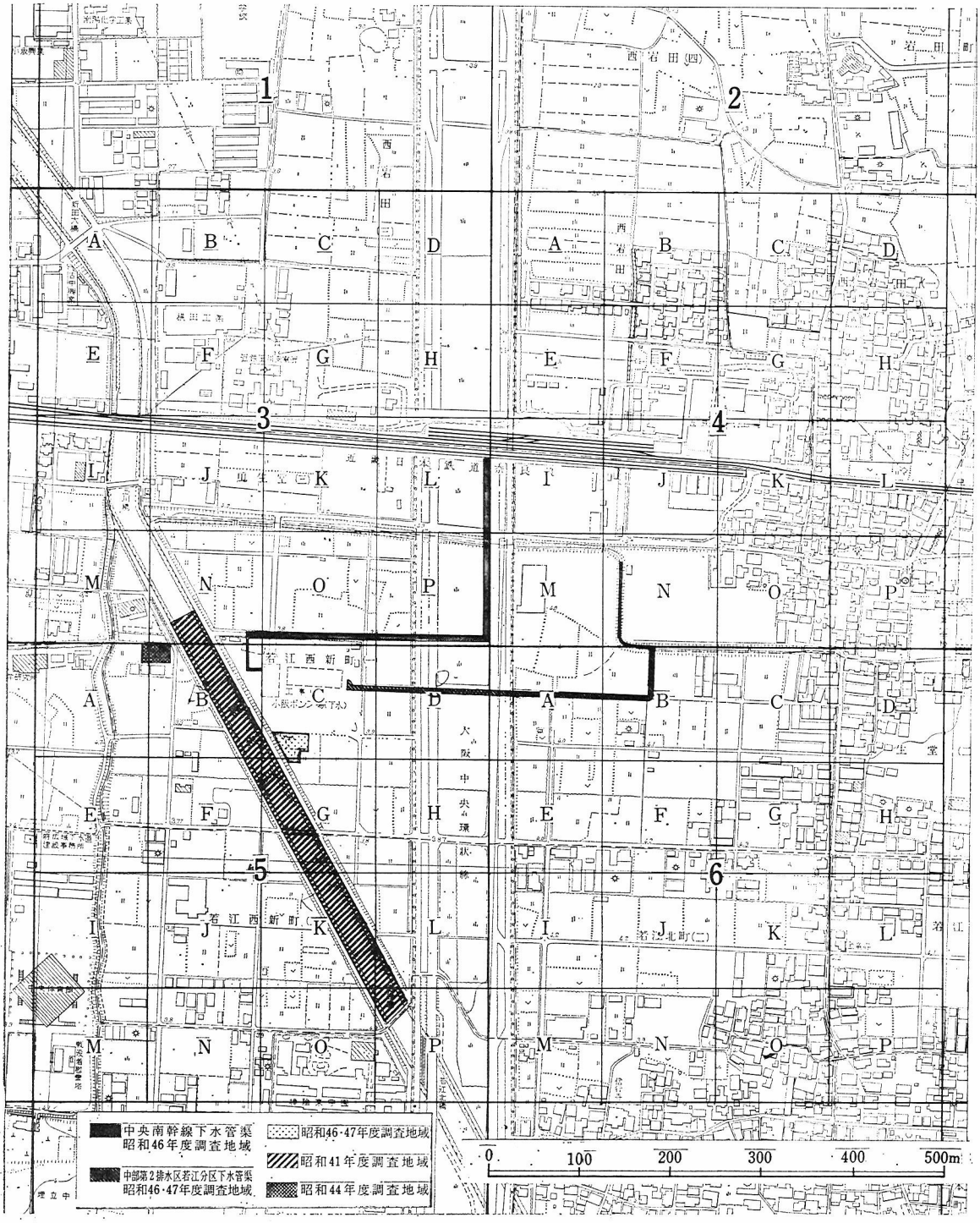
挿 図 目 次

第1図　瓜生堂遺跡全景
2　遺跡調査風景
3　瓜生堂遺跡地区割及び調査地域図
4　弥生式土器出土状態
5　第5様式土器出土状態
6　古墳時代井戸遺構
7　須恵器出土状態
8　第6号方形周溝墓木棺内石鏃出土状態
9　サヌカイトとサヌキトイド
10　砥石実測図
11　杵の木取模式図
12　蓋の文様
13　杵出土状態

表 目 次

表1　3OC24溝上層下層出土土器器種別表
2　3OC24C溝上層下層出土土器の3段階の分類表
3　3OC24溝上層下層出土壺の文様
4　3OC24溝上層出土の文様別土器片
5　3OC24溝上層出土直口の鉢の文様
6　3OC24溝上層出土段上口縁部の鉢の文様
7　3OC24溝上層下層出土甕の肩部の整形
土器観察結果一覧表……⑮～㊾
石器観察結果一覧表……㊹～㊻

第2図　遺跡調査風景



第3図　瓜生堂遺跡地区割及び調査地域図

Ⅰ 土　　器

1. 弥生式土器（中期）

今回は，主に整理の終った５ＢＷ１～５，３ＯＣ24地区出土の土器と，その他の地区出土の完形に近い土器をとりあげた。これらの土器は，第Ⅲ様式から第Ⅳ様式まで同一包合層から出土している。第Ⅲ様式から第Ⅳ様式の変遷過程をみるため，３ＯＣ24 地区の溝内上層，下層の土器を分類した。しかし，上層，下層とも第Ⅲ様式の特徴をもつ土器と，凹線をもつ土器が一緒に出土している。これらの土器を様式別に分けるのは困難であるが，土器の特徴別に３つの段階に分けることを試みた。

また他地区からこの３段階に入らない第Ⅱ様式に近い土器が出土しており，全体的には４段階に大別し，それぞれを仮に第Ⅲ様式最古，第Ⅲ様式古，第Ⅲ様式新，第Ⅳ様式と想定している。

第１段階　第Ⅱ様式の形態を受けつぐ土器。

第２段階　第Ⅲ様式の特徴（櫛描文の盛用，ヘラ磨きなど）をもつ土器。

第３段階　口縁端面に凹線文をもつ土器，凹線文を身にもちいているが，その存在が土器の形態に変化をあたえておらず形態は第Ⅱ段階のものと同様の土器。（以後凹線$_1$と呼ぶ）。

第４段階　巾の広い部分（口縁部，頸部，脚部など）に凹線文をもつ土器（凹線$_2$と呼ぶ）と，凹線$_1$と凹線$_2$を組み合わせてもつ土器。

表１　３ＯＣ24溝上層下層出土土器器種別表

器種／層	壷口縁部	壷底部	無頸壷	水差	鉢	高杯	甕口縁部	甕底部	蓋	文様のある胴部	不明底部	計
上層	18	15	4	1	32	17	36	11	1	76	7	204
下層	3	2	0	1	5	2	12	3	0	8	0	36

表２　３ＯＣ24溝上層下層出土土器の３段階分類表

器種／段階	壷口縁		無頸壷		水差		鉢		高杯		カメ口縁	
	上層	下層	上層	下層	上層	下層	上層	下層	上層	下層	上層	下層
2	17	2	3				24	3	16	1	35	11
3	1	1					4	2			1	1
4			1			1	4		1	1		

第１段階の土器　壺　口頸部が漏斗状に開く壺(1,3,4)，頸部は短くて太い壺(2,12)，がある。また簾状文を頸部下に一帯しか施さない土器がある(1,12)が，第Ⅲ様式の最古の段階に属するものにこの種の土器があること

が，奈良県橿原市藤原宮跡下層の調査で報告されており（註1），これと比較することができる。この壺（1）は第Ⅱ様式に近い形態で，内外共に荒い刷毛目を残している。形態の上で和泉に多い頸部の長い壺との関連が考えられ，乳褐色を呈する胎土も瓜生堂に一般的なものではない。しかし，簾状文を数帯重ねたものにも形態上，第1段階に属するとみられるものがある(5)。器体が算盤玉状のもの(4)は大津市南滋賀遺跡出土の第Ⅱ様式末の壺（註2）によく似ている。

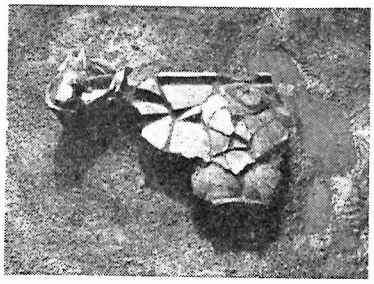
水差　櫛描直線文帯に，簾状文を1帯加えているが，仕上げも施文も粗雑である（23)。口縁部は把手側にやや傾斜しており，くりこみはない。

甕　腹径が口径より小さい甕（81)，底部が非常に厚く，口縁端面の調整が不十分な甕がある（88)。形態の上で第Ⅱ様式の甕と酷似しているため先の概報で第Ⅱ様式と考えていた甕は，その後検討した結果，この段階に入れる。

第2段階の土器

この段階に入ると櫛描の簾状文，列点文の施文が盛んになる。またヘラ磨き調整がすべての器種に共通な特徴としてあげられる。

壺　漏斗状に開く口頸部をもつ壺A（弥生式土器集成による）のうち，口縁端が下に折れ曲るものが多い（6〜9，14，15，17〜19）。口縁端面と口縁部直下から胴部まで簾状文を数帯施し，最下帯は扇形文か列点文で終る（10)。この壺は器壁がうすくバラバラに割れて出土するため完形になるものが少ないが，やや形状の異るもの（26)，漏斗状に開く口頸部をもちながら頸の太いもの（13)，小型のもの(16)もある。なお，壺Aのうち口縁部端面を上下に拡張した形態のもの（註3）は，今回あつかう資料中にはほとんどない。これが偶然か意味をもつものかは検討を要する。口縁が水平に折れ曲り，頸部が短く立つ壺には文様のないものが多い。しかし，胴部に直線文，波状文を交互に施す例（11)，直線文を数帯施し，最下端に波状文をめぐらした例（25）がある。後者は壺棺の身として用いている。この種の壺のなかには瓜生堂で作ったとみられるものもあるが，ここでとりあげた2個の壺は，第1段階の壺（2,12）と共に他地方からの搬入が考えられる。水差の1例（21）もこの段階に属するものと考えられる。口縁部内端に刻目文を加えている。なお卵形の器体をもつ超大型の壺がある（20)。いま欠損してはいるが、大きな口頸部をそなえるものとみられる。いちおうこの段階にあつかっておく。



第4図　弥生式土器出土状態

細頸壺　大型の1例（27）は原体の幅の広い櫛（3.7cm）で簾状文

をぎっしり施し，その上に円形浮文を貼り付けている。特に肩部の円形浮文は段ごとに3個，4個，5個1組と数を意識して貼りわけている。小型の細頸壺には列点文と簾状文の組み合わせが多い。壺の文様下，腰部から底部はヘラ磨きで調整している。

表3 3OC 24溝上層出土壺の文様

口縁端面の文様	簾状文	簾状文	簾状文	無　文	不　明
頸部の文様	〃	直線文	—		
壺Aの口頸部	8	1	3	1	1

無頸壺　全体に出土数は少ない。口縁端を折り曲げたもの（44，45）から，段状口縁部になるもの（46，47）まで、いずれも簾状文を施す。また無文の無頸壺で，口縁端面の上端は平らで，外方内方にそれぞれ肥厚するもの（42，43）がある。ただし、この2例は第3段階にさがるかもしれない。いずれも胎土は白っぽく他からの搬入品と考えられる。

鉢・台付鉢　直口の鉢(40,41,50,52～55)，無頸壺と同じく口縁端を折り曲げた大型の鉢（24，56，57），段状口縁部をもつ鉢（38）がある。これらは壺棺，甕棺の蓋としてもちいることが多い（24，38)。台付鉢は段状口縁部をもち（58，59，61，62），鉢と同じく文様は簾状文，列点文が多い。直線文を施した台付鉢（62）は第1段階かもしれない。鉢（54）の櫛の原体は径 2mm の管状のものをたばねて使用している。他にも管状の原体を使ったものがある，調整はヘラ磨きによる。鉢（56）は横位の簾状文の下に縦に簾状文を施しているのが珍しい。壺棺（25）の蓋（24）は体部に直線文と波状文を交

表4　3OC24溝上層出土の文様別土器片

簾状文	41
直線文	12
直線文と波状文	11
直接文と円形浮文	3
直線文と列点文・列点文	3. 2
波状文	2
刻み目文	1
簾状文と円形浮文と斜格子文	1

表5　3OC24溝上層出土の直口の鉢の文様

無文	9
列点文	2
刻み目文	2
列点文、簾状文、扇形文	1
波状文	1
不明、簾状文、刻み目文	1
凹線文1	2
凹線文2	4

表6　3OC24溝上層出土段状口縁部の鉢の文様

口縁端面文様	器体の文様	
列点文	簾状文	2
簾状文	簾状文	1
列点文	簾状文、刻み目文	1
無文	波状文、簾状文扇形文	1
簾状文、刺突文	簾状文	1
刻み目文		1
無文		1
凹線文		2

互に配し，胎土も壺棺の身と同じ赤褐色を呈し，瓜生堂のものではない。台付鉢（58）は棒状浮文の間に流水文を施している。棒状浮文を脚台にまでおろす実例は，奈良県天理市平等坊遺跡にある（註4）。また瓜生堂では，ヘラ磨きだけでていねいに仕上げた無文の鉢が多い。他に，上半部を欠いてはいるが脚台に綾杉文と三角形の孔（不貫孔）をほどこした台付把手付鉢がある（49）。

高杯　口縁が水平にひろがる高杯（63～66）で全面をヘラ磨きしている。高杯（65）は口縁外端面，上端面にヘラによる斜格子の暗文を施している，高杯の脚部の内面に煤付着のものが多いことは，今まで指摘されていない用途を考えさせ注意をひく。

甕　3形態に分ける事ができる。

a形態　口縁部の外反する内外面が円みをもち，端面は丸く終る（82～87，92～95）。数は少ないが平らなものもある（90）。

b形態　口縁部は「く」の字形に外反し，口縁端は上方に立ち上りをもつ（39，99～108）。

c形態　大型甕に多いが，わずかに斜めに外反する口縁部をもち，口縁端は下方に折れ曲る（37，96～98）。口縁端面に刺突文を施すのが多い。河内に特有の土器であるが，まだ本処はわかっていない，この口縁の作り方は壺A，大型鉢の口縁の形態に共通する。

甕にもやはり刷毛目調整で仕上げているものにくらべて，ヘラ磨き調整で仕上げたものが多い。肩部内面を横方向にヘラ磨きしているのは必ず甕のa形態になる。c形態の大型甕は底部まで内外ともヘラ磨きし，甕棺に使用される。甕（105）は胴部に鹿の背に矢がつきささった絵画をヘラでえがいており，珍しい実例である。

表7　3OC 24溝上層下層出土カメ
肩部の整形

外　面	内　面	上層	下層
ヘラ磨き	ヘラ磨き	12	4
刷毛目	刷毛目	5	3
ヘラ磨き	刷毛目	4	3
	刷毛目	3	1
ヘラ磨き		1	
ヘラ削り	刷毛目	1	
刷毛目			1

第3段階の土器　この段階に入る土器は第2段階のものに比べて少ない。口縁部端

面に凹線をもつ壺A（28），壺D（29），頸部に指頭圧痕文突帯をめぐらした壺F（34），台付鉢（60），水差（22）がこれにあたり，櫛描文の施文が少なくなる。また大型の鉢（36）は櫛描文様帯の下に凹線文をもち，甕棺の蓋にもちいられている。第2・3・4段階の甕を峻別することはできない。しかしさきにあげたa形態は第3・4段階にはのこらないだろう。また，口縁端面に凹線文をもつ甕（109～118）は，第3段階あるいは第4段階に属する。甕（109，112）は口縁端面の凹線文の上にそれぞれ，5個，6個の刻み目文を入れている。

第4段階の土器

壺A（30）の頸部，高杯（70）の脚部，水差（71）の口縁部，鉢（75～79）の口縁部に凹線を数条もつ。直口の台付鉢（72）は1帯の波状文を上，下の凹線文で囲んでいる。段状口縁部をもつ台付鉢は無文である（68）。高杯（80）は口縁端面を肥厚させた上端に凹線文をもち，杯部内面は煤付着物が非常に厚く残っている。調整はいずれもヘラ磨きが多いが，鉢（75）の外面はヘラ削りのままである。他に脚部に円窓をもった台付鉢（74），ヘラによる直線文をもつ脚部（67）がある。また壺F（35）は口縁部の受口状のところに凹線文をもち，頸部下は貼り付突帯の上にヘラによる刻み目文を入れている。第3段階の壺F（34）の変化したものとして第4段階に入れる。頸部の突帯を欠く1例（33）は第4段階に属するだろう。把手付壺（31）は口縁に穿孔があり，胴部に刻み目文をもつ。さきに第3段階に入れた甕（111）も胴部に刻み目文をもち，第4段階に入るかもしれない。

なお所属段階は明らかでないが，壺用の蓋（119，121）と甕用の蓋（120）がある。壺用の蓋の1例（121）はわれ目にそって，補修孔をつけている。畿内弥生式土器には補修孔は珍しいものである。

以上，瓜生堂の中期の弥生式土器を4段階に分けて考えてきた。瓜生堂に多い第2段階に属する土器の特徴をやや明確にできた。しかし，第3から第4段階への変遷過程はまだ今後の検討を要する。

方形周溝墓の土器

甕棺および供献土器は第1から第4段階にわたっている。第2マウンドの土器は第1から第3段階まである。これは当然だが方形周溝墓がこの期間にわたって営まれた事を示している。しかし，第1段階でみた供献土器の壺（2）はただ型式学的に古いと考えられるだけで，その他の土器においても先に述べたように層位的な裏づけがない。したがって今後さらに綿密な検討を必要とする。

なお本遺跡出土の土器片8個体について，奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部文部技官沢田正昭氏をわずらわして，科学的研究を行なっている。現状では，比重，有孔度（porosity）および主な岩石組成についての成果が出ている。このうち注意をひくのは，瓜生堂産の土器と想定しているものには，角閃石の含有が多い事実が明らかにされていることである（表8）。いっぽう瓜生堂で出土した土器のうち，肉眼的に瓜生堂産の土器と区別できる胎土の土器にはこれを含んでいない（表8のUU-3）。さきに，大阪府和泉市池上遺跡で出土した生駒西麓産と推定される土器についての観察において，やはり角閃石を多量に含むことが明らかにされている。従来，生駒西麓の土器には黒色または金色雲母を含むことが重要視されてきたが，角閃石の含有は，この地方の土器を特色づける性質として新に認識されるにいたったわけである。今後，河内の各地の土器との検討をすすめることによって，いっそう土器の小地域差，集落差についての問題を明確にしたいものである。

表8　胎土分析結果一覧表　　（沢田正昭氏提供）

Sample		Quartz（石英）	Hornblend（角閃石）	Na（ナトリウム）	K.feldspar（長石）
池上遺跡	IKB−3	100	150	44	—
	IKB−4	100	135	31	—
	IKB−6	100	246	67	—
瓜生堂遺跡	UU−1	100	131	32	—
	UU−2	100	80	31	—
	UU−3	100	—	—	79
	UU−4	100	133	41	—
	UU−5	100	184	54	—
	UU−6	100	361	167	—
	UU−7	100	100	119	—
	UU−8	100	82	34	—

註(1)　西村康・西弘海・宮本敬一「平城宮跡、藤原宮跡の発掘調査」第3次調査出土弥生式土器（『奈良国立文化財研究所年報1972』，1972）

(2)　田辺昭三「滋賀県大津市南滋賀遺跡の土器」（『弥生式土器集成』資料編2，1961）PL. 44−7

(3)　『瓜生堂遺跡』（1971，12）図版28

(4)　帝塚山大学郷土研究会『岩室』P 20 第3図（1967）

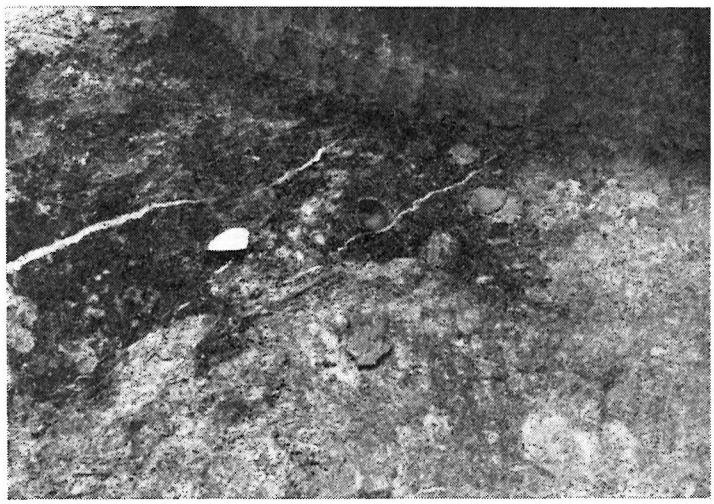
付記　奈良国立文化財研究所技官佐原　真氏には，ご多忙中にもかかわらず，多くの時間，ご指導，ご教示をしていたゞきました。

<曽我恭子>

2. 弥生式土器（後期）

今回，報告しうる土器は，前回の調査以後の整理過程および新しく出土した土器の一部で，中期の土器に比べればその量は非常に少なく，よって各器型，器種のすべてを見ることはできない（図版37）これらの中で最も目につくのは甕である。それらは口縁径より腹部最大径が大きいもの（127），大体同じもの（123，124），口縁径の方が腹部最大径をはるかにしのぐもの（122）などがあり，（127，123）は焼成・胎土などが堅緻，良好で全般に精良な土器が多い。これらの土器の内面にはほとんど刷毛目があり，口縁部，くびれ部にはなでた痕跡がみられる。内面の器壁にはヘラ削りのなされた形跡はあまりない。鉢には大小2種類があり，（126）には外面に叩目が，そして内面にも叩目が残っているが，（128）は外面をヘラ削りし，その上をなで，ヘラミガキを施し，内面を粗い刷毛目で整形している。高杯（129)は小さな杯部におそらく短い脚部とやや広がる裾部のつくもので，内面をていねいにヘラ削りし，外面には横方向に刷毛目が残っている。(128，129）の口縁端部はいずれも丸くおさめられている。(122,125）は粗砂層中より出土したもので，表面の磨滅はいずれもはなはだしく，甕の外面にはかろうじて叩目が，壺の表面はヘラミガキが看取れる程度である。内面はこれに比して保存度の点では良好である。内面にはつなぎ目が残っているものもある。以上述べた土器は，畿内第5様式の中でも後半に属すると考えられるものが多く，遺跡の東部地域より多く出土している。

＜松下彰，今村道雄＞



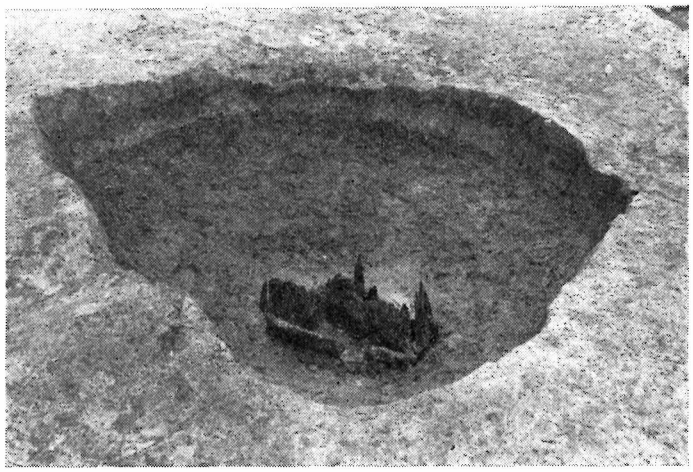
第5図　第5様式土器出土状態

3. 土　師　器

遺跡の東部地域より出土したものが多く，それらは庄内式土器をはじめとして，多くの土師器が出土し，中でも６ＡＸ10よりは２点の墨書土器をはじめ各器種の土器を得ることができた。その中のごく一部の図化しかできなかったが，須恵器とともに簡単に報告しておきたい（図版37．38）。

庄内式土器には（1〜3），高杯，甕が主にみられ，(1)は杯底部とわずかに外反する体部とを区分するのに外側に段を作るなど，庄内式に通有な高杯であり，甕は体部の器壁が削られ薄くなった痕跡が明瞭な土器で，くびれ部内面に非常にするどい稜をつくっていることなどからみて庄内式に属するものであろう。庄内式につづく土器として，瓜生堂遺跡においては（4〜10）があり，これだけでは必らずしも編年するのに十分な量の資料とはいいがたいが，後日これらの間隙を新しい資料の出土によって少しでも埋めたい。奈良・平安時代の土器は（11〜17），６ＡＸ10から得られた。これらの土器の観察結果は一覧表に示したように精良な土器が多く，また墨書土器の出土によって，当地域の南方に若江郡衙の存在が考えられ，６ＡＸ10はその周囲の北側の一地区に相当するのであろう。

＜今村道雄，松下　彰＞



第６図　古墳時代井戸遺構

4. 須　恵　器

瓜生堂遺跡における須恵器の出土量は，弥生式土器，土師器と比較して極めて少ない。須恵器の出土している層は，そのほとんどが整地層，あるいは後世の撹乱層であって，遺構に伴なって出土した例は，先の概報でふれた3ＯＩ24地区の井戸に伴なうものと，新たに発見された６ＢＨ10地区の井戸に伴なうものしかない。

瓜生堂遺跡の須恵器を時期的にみると第Ⅰ期中頃以降に属するものが比較的多く認められ，第Ⅱ期も末期をのぞいて第Ⅰ期と同量程度認められる。しかしながら，第Ⅱ期末から第Ⅲ期全般にわたってはまったくといってよいほど認められず，須恵器のみにおいて大きな空白時間を示している。そして第Ⅳ期の須恵器は再び遺跡全域に認められる状態である。

一方，胎土の肉眼による観察と，成形技術の優劣などから，陶邑古窯址群で作られたものと，それ以外の地で作られたものとの比較もある程度可能であると思われる。これによると古い時期（第Ⅰ期）に属する瓜生堂遺跡の須恵器は，極めて精製された粘土が使用されており，また大変ていねいな成形を施していて，そのすべてが陶邑製であろうと思われる。ところが，第Ⅱ期に属する当遺跡の須恵器になると，胎土に３～５mm程度の砂粒を比較的多く含む須恵器が目立ってくる。これら一連の須恵器は，成形技術の未熟さからか，非常に器壁が厚く，ヘラ削りも荒く，上述の陶邑製の須恵器との間に大きな差を感じさせる。このような須恵器が陶邑以外の地で製作されたものであるか否か，早急な結論を出すことは危険であるが，もし地方窯で焼かれた物だとするなら，豊中市桜井谷古窯址群や，吹田市釈迦池古窯址群，原古窯址群などが考えられ，これら地方窯の成立の時期の問題や，その政治的，経済的背景を考える上での一つの資料としての価値は大きなものであろう。

第Ⅳ期の本遺跡の須恵器は，第Ⅱ期のそれと比較して，胎土，技術両面ともそれほど貧弱なものはなく，また遺跡全域からまんべんなく検出される。

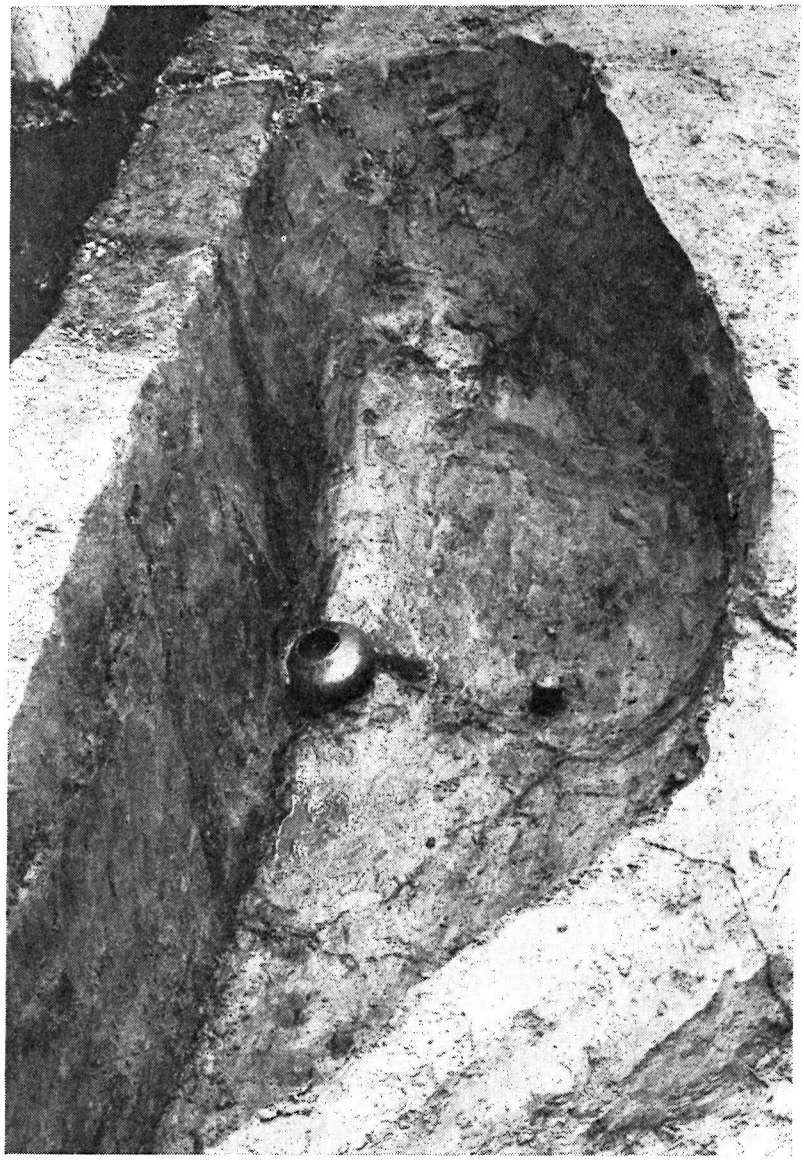
さらに，各時期における須恵器のセット関係をみると，全時期を通じてほとんどのセットがそろっており，これといって欠落するものはないが，中でも甕が一番多い。

以上，瓜生堂遺跡出土の須恵器の概略を述べてきたが，この中で最大の問題はやはり第Ⅲ期の須恵器の欠落であろう。これは瓜生堂における第Ⅲ期の集落の位置，構造などが，第Ⅰ期，第Ⅱ期の集落

のあり方から大きく変化したものと思われる。

この点に関しては，瓜生堂遺跡のみでなく，他の遺跡でも同じことが云えるのではないだろうか。特に瓜生堂遺跡の場合は，若江郡衙跡がすぐ南に臨接して存在することからも，当時の中河内地方の政治，経済の中心地として大きな地位を占めていたと考えられ，また第Ⅲ期の時期が，我国の歴史においても大きな変化をみせる直前に当たることとも，何らかの関連があると考えられる。

＜中西靖人＞



第7図　6AH9地区，須恵器出土状態

土器番号		1	2	3	4
種類／摘要		壷	壷	壷	壷
法量(cm)	口縁径	22.7	26.1	17.4	17.2
	器高	28.4（現存値）	40.65	16.7（現存値）	29.5
	腹径	23.2	32.95	欠損のため不明	19.3
	底径	欠損のため不明	9.85		5.2
出土地区		3ＰＴ25	2号方形周溝基	3ＬＹ19	5ＤＢ8
口頸部	形態	○斜めに拡がった長い頸部に水平に折れ曲る口縁部	○漏斗状に開く口頸部、口縁端部は上下に肥厚、下端が外へはりだす。	○筒状の頸部から斜め上にひろがり、口縁が水平に折れ曲がる。口縁端部は上下に少し肥厚。	○頸部下は、細くしまり口縁に向って、なだらかに斜めにひろがり、口縁端部は下端が外へはり出す。
	文様	○口縁端面に波状文 ○口縁内面に扇形文 ○頸部に6帯の直線文 ○頸部下端に1帯の扇形文	○口縁端面、内面に波状文。	○口縁端面、内面に刻み。	○口縁下端に刻み目。
	整形 外	○荒い刷毛目	○部分的にある刷毛目以はナデ	○縦方向に刷毛目	○横ナデ
	内	○斜め横に荒い刷毛目	○横ナデ		○横方向にヘラ磨き
肩胴部	形態	○いちじく形の胴部になると考えられる。	○胴が中ごろで強くはりだす。	○いちじく形の胴部になると考えられる。	○そろばん玉形をなす。
	文様	○頸部からつづいて肩胴部に7帯の直線文	○頸部下端から胴部にかけて直線文9帯 最下端に波状文1帯	○頸部からの直線文がつづく。	○頸部から肩にかけて直線文、最初と最後がくいちがっている。
	整形 外	○荒い刷毛目	○胴下半部の上は横方向にヘラ磨き ○底部は縦方向にヘラ磨き。	○縦方向に刷毛目（斜格するところあり）	○横方向にヘラ磨き
	内		○斜め、縦に荒い刷毛目。	○横方向に刷毛目。	○横方向に刷毛目。
底部		不明	底はヘラ磨き 一部ヘラ削りあり	不明	外側はヘラ削り。
色調		乳褐色	上半部黄褐色 下半部こげ茶色	乳灰色	外　茶褐色 中核　茶褐色と黒色 内　茶褐色
胎土		0.1cmの砂粒、雲母含む	0.1～0.3cmの砂粒含む。	0.1cmの砂粒、雲母含む	0.2～0.3cmの砂粒含む
質		硬	硬	硬	硬
備考		頸部に黒斑（5×10cm）	西側溝内における供献土器		肩から底にかけて黒斑

註、高杯、台付鉢の場合は口頸部が杯部に、肩胴部が脚部になる。

土器番号		5	6	7	8
種類／摘要		壷	壷	壷	壷
法量(cm)	口縁径	19.4	18.3	21	19.6
	器高	28.5（現存値）	11.2（現存値）	9.1（現存値）	7.3（現存値）
	腹径	19.5	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
	底径	欠損のため不明			
出土地区		3ＰＹ14	5ＢＷ5	5ＢＷ5	3OA 23溝内
口頸部	形態	○頸部下は細くしまり、口縁に向って長く斜めにひろがり口縁端は外側下方に折れ曲っている。	○斜めにひろがる口縁部口縁端は外側下方に肥厚する。	○(6)に同じ	○(6)に同じ
	文様	○口縁端面に簾状文 ○口縁下端に刻み ○口縁内面に円形浮文	○口縁端面に簾状文 ○頸部に簾状文	(6)に同じ ○頸部の簾状文の原体の幅は他に比べると広い。	○(6)に同じ
	整形 外				
	整形 内	○口縁付近は横ナデ ○頸部下はしぼり目あり。		○頸部の部にヘラ痕あり。	
肩胴部	形態	○腰が低くはる。	不明	不明	不明
	文様	○頸部から胴部にかけてて計7帯の簾状文と4帯の直線文			
	整形 外	○文様下は横方向にヘラ磨き			
	整形 内				
底部		不明	不明	不明	不明
色調		口縁～頸部・淡灰褐色 頸部～胴部・乳灰色 ヘラ磨きの部分は黒色	茶褐色	外　暗灰青色 内　赤褐色	外　赤灰色 内　赤褐色
胎土		微砂粒，雲母	0.1～0.3cmの砂粒、雲母含む	0.1～0.2cmの砂粒、雲母を含む	0.1～0.2cmの砂粒、雲母含む
質		硬	硬	硬	硬
備考		○胴部に黒班		煤付着一部	

土器番号		9	10	11	12
種類／摘要		壺	壺	壺	壺
法量(cm)	口縁径	23.3	欠損のため不明	欠損のため不明	21.4
	器高	6.3（現存値）	28.9（現存値）	32.2（現存値）	28.2（現存値）
	腹径	欠損のため不明	25.4	29.7	32.2
	底径		7.0	7.8	欠損のため不明
出土地区		5BW5	第3号方形周溝基	3LY19	3PA24
口頸部	形態	○(6)に同じ		○頸部は直立	○短い頸部に水平に曲る口縁部、口縁端は上方に肥厚する。
	文様	○(6)に同じ	○頸部に簾状文	○頸部には文様がないと考えられる。	○口縁下端に刻み目 ○頸部下に簾状文
	整形 外				○頸部、横方向に刷毛目
	内	○刷毛目	○指頭圧痕		○横ナデ
肩胴部	形態	不明	○だ円形に近い	○腰部が中ごろで強くはり出す。	○腰が丸くはりだし、腹径が器高より大きい。 ○直線文6帯 最後は波状文1帯。
	文様		○簾状文、列点文、扇形文	○頸部下端から腰まで直線文波状文を交互にくり返す。	
	整形 外		○横、斜めにヘラ磨き	○腰部は横方向にヘラ磨き、下半は縦方向にヘラ削り。	○文様の下・上部は横方向にヘラ磨き、下部は縦方向にヘラ磨き。
	内		○指頭圧痕	○腰部に指頭圧痕あり。	○斜めに細かい刷毛目。
底部		不明	ヘラ磨き	○部分的に指頭圧痕	不明
色調		茶褐色	茶褐色	淡灰色	淡灰褐色
胎土質		0.1cmの砂粒、雲母含む 硬	微砂粒、雲母含む 硬	0.1cmの砂粒、雲母含む 硬	微砂粒含む 硬
備考			○第3号方形周溝墓の供献上器 ○胴部に巾の広い黒斑	○肩胴部に黒斑(12×14)cm下半部全面に煤付着	胴部上半に煤付着

土器番号		13	14	15	16
種類／摘要		壷	壷	壷	壷
法量(cm)	口縁径	22	20.8	22.8	11.4
	器高	31.9（現存値）	6.8（現存値）	5.55（現存値）	3.9（現存値）
	腹径	31.05	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
	底径	欠損のため不明			
出土地区		3ＬＹ21	5ＢＷ5	3ＮＷ24	5ＢＷ4
口頸部	形態	○太く短い頸部に口縁が少しひろがり端面は丸く下方に折れ曲っている。	○(6)と同じ	○(6)と同じ	○短く立つ頸部に斜めに外反する口縁部、外側下方に肥厚する。
	文様	○口縁端面に列点文 ○頸部下に直線文	○簾状文	○簾状文	○口縁内面に扇形文
	整形 外	○横ナデ	○斜めに刷毛目		横ナデ
	整形 内		○横方向に刷毛目		
肩胴部	形態	○太い頸部のまゝ、胴部もひろがり腰は低くはり出す。	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
	文様	○頸部につづき、簾状文2帯、列点文、扇形文直線文1帯ずつ			
	整形 外	○横方向にヘラ磨き			
	整形 内				
底部		不明	欠損のため不明	欠損のため不明	不明
色調		赤茶色	茶褐色	茶褐色	淡灰青色
胎土質		微砂粒含む 硬	0.2cmの砂粒少量、雲母含む 硬	0.1～0.3cmの砂粒含む、雲母含む 硬	0.3～0.7cmの砂粒、雲母含む 硬
備考		○胴中ごろに黒斑あり	○口縁部に煤付着		

土器番号		17	18	19	20
種類／摘要		壷	壺	壷	壷
法量(cm)	口縁径	18.2	22.2	21.6	欠損のため不明
	器高	5.7（現存値）	3.5（現存値）	5.8（現存値）	63.0（現存値）
	腹径	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	54.5
	底径				8.0
出土地区		3 OC 24	5 BW 5	3 OA 23	3 LY 13
口頸部	形態	○(6)に同じ	○(6)に同じ	○(6)に同じ	○長い頸部をもつものと考えられる。
	文様	○(6)に同じ ○簾状文	○(6)に同じ ○簾状文	○(6)に同じ ○簾状文	不明
	整形 外			○文様帯間ヘラ磨き	
	整形 内	○横ナデ		○横ナデ	
肩胴部	形態	不明	不明	不明	○大型の卵形に近い胴部。
	文様				○頸部下に直線文あり
	整形 外				○直線文の下に刷毛目 ○胴上半分は横にヘラ磨き下半分は縦にヘラ磨き。
	整形 内				○肩部は横に、胴～底部は縦にヘラ磨き
底部		不明	不明	不明	底は厚い
色調		外　茶褐色 内　黄土色	茶褐色	黒色	黒色（光択あり）
胎土		微砂粒、雲母含む	0.1～0.3cmの砂粒、雲母含む	0.1～0.2cmの砂粒、雲母含む	微砂粒、雲母含む
質		硬	硬	硬	硬
備考					

土器番号		21	22	23	24
種類／摘要		水　差	水　差	水　差	壺棺の蓋
法量(cm)	口縁径	10.5	7.7	7.5	24.4
	器高	24.6（現存値）	16.9（現存値）	17.85	16.4
	腹径	20.7	18.7	14.5	25.3
	底径	欠損	欠損のため不明	4.3	6.7
出土地区		5OZ	3OC24大溝内	3PT25溝内	5DY9
口頸部	形態	○口縁は内弯しながらひろがり、把手側が低い、端面内側が削られている。	○少し広がりをもつ筒状の口頸部に把手側をえぐりとっている。	○口縁は直口で、やや把手側の反対側はひろがり、把手側は下っている。	○口縁端は外側下方に折り曲がる。
	文様	○口縁端面に刻み目		○頸部に横位の把手 ○口縁内外端面に刻目文 ○頸部に直線文3帯	
	整形 外	○腰から下、指押え	○横ナデ	○ヘラ磨き ○把手はヘラ削り	横ナデ
	整形 内		○頸部に指頭圧痕	○ヘラ磨き	
肩胴部	形態	○腰は低くはり出している肩に横位の把手	○腰は低くはり肩部に横位の把手をもつ。	○胴部は中頃ではりだし円味をもつ。	○腰に稜をもち、内方に傾斜して立つ
	文様	○頸部につづいて簾状文計10帯		○直線文3帯、間に簾状文1帯	○波状文と直線文
	整形 外	○把手はヘラ削り		○文様間ヘラ磨き ○細かくヘラ磨き ○腰部の上に継き目痕あり、その上に指頭圧痕	○胴中央は横方向にヘラ磨き、下半部は縦方向にヘラ磨き。
	整形 内	○指押え			○斜めにヘラ磨き
底部		不明	不明	ヘラ	
色調		灰褐色	赤茶褐色	黒～茶褐色	赤褐色
胎土		0.2～0.4cmの砂粒、雲母含む	微砂粒含む	0.1～0.3cmの砂粒、雲母含む	0.1cmの砂粒含む
質		硬	硬	硬	硬
備考		○胴部に黒斑（5×3）cm腰部の下に粗い引っかき痕		○胴部に黒斑（4×4）cm口縁から肩にかけて煤付着	○口縁から胴部にかけて黒斑（15×7.5）cm

土器番号		25	26	27	28
種類／摘要		壷棺の身	壷	細頸壷	壷
法量(cm)	口縁径	21.3	16.0	26.4	18.0
	器高	36.8	26.0（現存値）	33.6（現存値）	8.5（現存値）
	腹径	28.1	21.6	欠損のため不明	欠損のため不明
	底径	6.8	欠損のため不明		
出土地区		5ＤＹ９	第５号方形周溝墓	3ＯＹ24	3ＬＹ13
口頸部	形態	○短く立つ頸部に水平に折れ曲がる口縁部をもつ、口縁端は上下に肥厚する。	○短く斜めにひろがる頸部。	○頸部が細くしまり、斜めに広がる。口縁近くは内弯する。口縁端は内側に少し肥厚する。	○短い頸部に水平に折れ曲る口縁部をもつ。端部は上下に肥厚、特に下に長く肥厚
	文様	○口縁端面に櫛による刻み目文	○口縁端面に波状文 ○頸部に簾状文と直線文	○口縁上端に刺突文 ○口縁から胴部にかけて簾状文 ○口縁に円形浮文４段	○口縁内面に列点文 ○口縁端面に凹線文 ○頸部に断面三角形の貼り付け凸帯 ○頸部下に直線文
	整形 外	○口縁はナデ	○頸部に刷毛目	○円形浮文を押しつけたための凹凸あり	横ナデ
	整形 内	○頸部は横方向にヘラ磨き	○横ナデ	○刷毛目	
肩胴部	形態	○縦長のだ円形	○ほぼ円形をなす。	○腰が低くはり出す形になると考えられる	不明
	文様	○直線文６帯に最後に波状文。	○肩部に簾状文と扇形文	○口縁からつづけて簾状文 ○肩部に円形浮文、３個１組、４個１組、５個１組	
	整形 外	○腰部は横方向にヘラ磨き。 ○下半部は縦方向にヘラ磨き。	○文様下は刷毛目 ○胴部はヘラ磨き		
	整形 内	○縦方向に刷毛目	○指頭圧痕	○指頭圧痕	
底部			不明	不明	不明
色調		赤褐色	淡茶褐色	暗褐色	灰褐色
胎土質		0.1cmの砂粒含む 硬	0.1～0.5cmの砂粒少量、含む 硬	0.1～0.3cmの砂粒、雲母含む 硬	0.1cmの砂粒含む 硬
備考		○下半部に煤付着、腹部に黒斑（8×18）cm	○外面全体に煤付着 ○溝内における供献土器		○口縁から頸部にかけて煤付着

土器番号		29	30	31	32
種類／摘要		壷	壷	把手付壷	壷
法量(cm)	口縁径 器高 腹径 底径	22.5 15.3（現存値） 欠損のため不明	21.8 10.7（現存値） 欠損のため不明	11.2 13.3（現存値） 欠損のため不明	21.65 4.1（現存値） 欠損のため不明
出土地区		3ＰＰ24　溝内	3OC 24	3OG 24	3OA 23溝内
口頸部	形態	○太く直立する頸部に水平に折れ曲る口縁部、口縁端は上方に肥厚する。	○漏斗状に開く頸部に水平に折れ曲がる口縁端部は上下に肥厚する。	○わずかに外方に傾斜して立ち、斜めに折れ曲る。口縁端は上下に肥厚	○口縁部は外反し上下に肥厚する。
	文様	○口縁端面に凹線文あり。 ○頸部下に指頭圧痕文の貼りつけ突帯あり。	○口縁外端に凹線文を施し、その上に刻み目文と円形浮文。 ○口縁内面はくの字形の列点文。 ○頸部に巾広く凹線文	○口縁部に2孔1対（2組）	○口縁端面に凹線文
	整形 外	○横ナデ	○縦方向の荒い刷毛目 ○口縁は横ナデをつくる時生じた凹凸あり。	○頸部から胴部にかけて刷毛目	横ナデ
	整形 内	○指頭圧痕	○頸部は凹線文あり。		
肩胴部	形態		不明	○肩部に横位の把手付 ○胴部に刻み目文あり。	不明
	文様				
	整形 外				
	整形 内	○肩部に継ぎ目の痕あり		○刷毛目	
底部		不明	不明	不明	不明
色調		淡褐灰色	茶色	灰茶色	赤乳灰色
胎土質		0.1～0.3cmの砂粒含む 硬	微砂粒、雲母含む 硬	0.1～0.2cmの砂粒、雲母極少量含む 硬	0.1～0.2cmの砂粒、雲母含む 硬
備考				○口縁～頸部内外共に煤付着	○ 黒斑あり

土器番号		33	34	35	36
種類／摘要		壷	壷	壷	甕棺の蓋
法量(cm)	口縁径	19.0	25.5	22.5	40.4
	器高	14.3(現存値)	19.1(現存値)	31.9(現存値)	10.8(現存値)
	腹径	欠損のため不明	欠損のため不明	29.4	40.7
	底径			欠損のため不明	欠損のため不明
出土地区		3LY13	3OG24	3OY24	第2号方形周溝墓 3号甕棺の蓋
口頸部	形態	○長く立つ頸部に受口状の口縁部をもつ	○頸部は漏斗状に開き口縁部は上方に立ち上る受口状のもの。	○(34)と同じ	○口縁端は水平に折れ曲る。
	文様		○口縁受口状の部分に凹線文 ○口縁部と頸部のつぎ目に凹線文 ○頸部下端に貼り付けた突帯と指頭圧痕文	○口縁受口状の部分に凹線文。 ○頸部下端に貼り付け突帯とヘラによる刻目文	○口縁端面に刻目文
	整形 外	○口縁部は横ナデ ○頸部は荒い刷毛目	○頸部は縦方向に刷毛目 ○口縁は横ナデ	横ナデ	
	内	○口縁部は横ナデ ○頸部はヘラ痕あり	○頸部は縦方向に刷毛目		○横ナデ
肩胴部	形態	不明			○腰に稜をもちまっすぐ立つ。
	文様				○簾状文3帯と波状文 ○腰部に凹線文。
	整形 外		○刷毛目	○上半部細い刷毛目 ○下部はヘラ磨き	
	内		○荒い刷毛目	○ヘラ磨き	○横方向にヘラ磨き。
底部		不明	不明	不明	不明
色調		黒褐色	淡褐色	黄褐色	灰褐色
胎土		微砂粒、雲母含む	0.1～0.3cmの砂粒、含む	0.1～0.3cmの砂粒、雲母含む	0.1cmの砂粒、雲母含む
質		硬	硬	硬	硬
備考		○内面に煤付着	○口縁に黒斑		○胴部から底部にかけて黒斑(12×3)cm

土器番号		37	38	39	40
種類／摘要		甕棺の身	甕棺の蓋	甕棺の身	鉢
法量(cm)	口縁径	32.5（復元値）	43.6	28.9	17.8
	器高	59.8（復元値）	27.8	43.0（現存値）	3.6（現存値）
	腹径	39.7	45.2	32.1	欠損のため不明
	底径	8.9	10.8	欠損のため不明	
出土地区		第2号方形周溝墓 3号甕棺	第2号方形周溝墓 2号甕棺の蓋	第2号方形周溝墓 2号甕棺	3OC24
口頸部	形態	○短く外反する口縁部で口縁端は外側下方に折り曲げている。	○段状口縁部をもつ	○わずかに立つ頸部に斜め上に外反する口縁部	○内方に傾斜して立つ
	文様	○口縁端面に刺突文	○口縁端面に刻み目文（間隔をあけて）		○波状文2帯直線文
	整形 外	横ナデ	○横ナデ	○横ナデ、刷毛目調整	横ナデ
	整形 内		○ヘラ磨き	○横ナデ	
肩胴部	形態	○いくぶん上の方で胴ががはり出し、なだらかなカーブを持って、そのまま底部につづく。	○腰に稜をもち、やや内方に傾斜して立つ	○なだらかなカーブをえがき、胴部はあまりはり出さない。	不明
	文様		○直線文		
	整形 外	○縦方向にヘラ磨き。	○腰の下横方向にヘラ磨き、下半部、縦にヘラ磨き。	○　下→上→下へと山形のヘラ磨き。下部は斜めにヘラ磨き	
	整形 内	○横方向にヘラ磨き。	○上半部横にヘラ磨き ○下半部縦にヘラ磨き	○刷毛目、上部は刷毛目の上に間隔を大きくとってヘラ磨き。	
底部		底はヘラ削り		不明	不明
色調		茶褐色	黄褐色	暗褐色	黒褐色
胎土質		0.2～0.3cmの砂粒、雲母含む 硬	0.1～0.2cmの砂粒、雲母少し含む 硬	0.1～0.2cmの砂粒、雲母含む 硬	微砂粒、雲母含む 硬
備考		○胴部に黒斑	○胴部から底部にかけて大きな黒斑	○外面に煤付着、内面、底面、胴部下半に黒斑	

土器番号		41	42	43	44
種類／摘要		鉢	無頸壷	無頸壷	無頸壷
法量(cm)	口縁径	23.4	12.5	17.8	13.7
	器高	2.65(現存値)	5.8(現存値)	5.5(現存値)	10.9(現存値)
	腹径	欠損のため不明	17.05	欠損のため不明	20.9
	底径		欠損のため不明		欠損のため不明
出土地区		5BW1～3	5BW5	5BW3	3OC24
口頸部	形態	○腰に稜をもち内弯して立つ口縁部。	○口縁の上端は平らで外端は外方横に肥厚する。	○口縁の上端は平らで、内方に肥厚する。	○口縁端はわずか下に折れ曲っている。
	文様	○櫛による刻み目文	○無文	○無文	○口縁下に2孔1対2組
	整形 外		横ナデ	横ナデ	横ナデ
	内	○横ナデ			
肩胴部	形態	不明	○球形に近い胴部になると考えられる。	○(42)と同じ	○腰は低くはりだす。
	文様				○口縁下から簾状文（表面剝離のため鮮明ではない。）
	整形 外				○横方向にヘラ磨き。
	内				
底部		不明	不明	不明	不明
色調		赤褐色	乳褐色	乳褐色	暗灰青色
胎土質		0.1～0.2cmの砂粒、雲母含む 硬	0.1～0.3cmの砂粒、雲母含む 硬	微砂粒を多量に、含む(表面はザラザラ)雲母少量含む。　硬	0.1の砂粒、雲母含む 硬
備考					

土器番号		45	46	47	48
種類／摘要		無頸壷	無頸壷	無頸壷	台付鉢
法量(cm)	口縁径	16.0	12.6	12.3	6.35
	器高	5.85(現存値)	10.9(現存値)	4.9(現存値)	5.5
	腹径	欠損のため不明	22.0	欠損のため不明	(脚部)
	底径		欠損のため不明		4.1(裾径)
出土地区		5BW1～3	3PE24	3NW24	3PP24
口頸部(杯部)	形態	○口縁端を外側下方に折り曲げており、内面は「く」の字型である。	○丸みのある段状口縁部をもつ。	○口縁端部を外側へ折り返した段状口縁部をもつ。 ○口縁部下に円孔	○縦長にひろがる直口の口縁部、端面は丸い。
	文様	○口縁端面に簾状文			
	整形 外	横ナデ		横ナデ	手づくね
	整形 内				
肩胴部(脚部)	形態	○腰は低くはり出すものと考えられる。	○胴が低くはり器体は斜めに立つ。	○(45)と同じ	○短い裾広がりの中実の脚部。
	文様	○簾状文2帯と列点文	○簾状文	○口縁下から簾状文	
	整形 外		○簾状文の間と、腰部横方向にヘラ磨き。	剝離のため不明	手づくね
	整形 内		○剝離のため不明		
底部		不明	不明	不明	
色調		暗灰青色	赤褐色 (中核)暗灰色	赤褐色 部分的にこげ茶色	茶褐色 (下半部は黒色)
胎土質		0.1cmの砂粒、雲母含む 硬	0.1～0.3cmの砂粒含む 硬	0.1～0.3cmの砂粒多く、雲母含む 軟	0.2cmの砂粒含む 粗雑 硬
備考					

土器番号		49	50	51	52
種類／摘要		台付把手付鉢	鉢	無頸壺	鉢
法量(cm)	口縁径	欠損のため不明	11.25	8.6	18.8
	器高	6.6（現存値）	4.3	2.2（現存値）	9.75(現存値)
	腹径	（脚部）		欠損のため不明	
	底径	7.05(裾径)	5.8		欠損のため不明
出土地区		3LY15	3NW24	5BW4	3LY14
口頸部（杯部）	形態	○縦長の直口の鉢になると考えられる。	○口縁端面は丸い。	○「く」の字形に曲る口縁部	○斜めにまっすぐ立つ口縁部上端面は平たん。
	文様				
	整形 外		横ナデ	横ナデ	
	整形 内				横ナデ
肩胴部（脚部）	形態	○短い脚部ですそまでなだらかにひろがる。端面は少し稜をもつが円く終っている。	○浅い椀状の器体		
	文様	○ヘラによる沈線と斜線 ○すそに三角形の孔（不貫孔）		○簾状文	○口縁から簾状文3帯と扇形文
	整形 外		○横方向に刷毛目		○縦方向にヘラ磨き
	整形 内	○しぼり目あり、すそに指頭圧痕あり。	○横ナデ		
底部			底に近い部分はヘラ痕あり	不明	不明
色調		淡褐色	茶褐色～黒色	暗灰青色 中核は黒色	灰褐色～黄褐色
胎土質		0.1～0.3cmの砂粒含む 粗雑 硬	0.2cmの砂粒少量、雲母含む 硬	0.1cmの砂粒含む、雲母含む 硬	0.1～0.3cmの砂粒、雲母含む 硬
備考		○円板充填法			胴部に巾のはっきりしない黒斑

土器番号		53	54	55	56
種類／摘要		鉢	鉢	鉢	鉢
法量(cm)	口縁径	18	24.9	26.7	35.15
	器高	12.6	11.3（現存値）	14.2	6.15(現存値)
	腹径	19.4			
	底径	5.2	欠損のため不明	6.25	欠損のため不明
出土地区		3OC 24溝内	3OC 24	5CI 20	5BW 5
口頸部	形態	○椀状形の直口の口縁をもち、端面は丸い（口縁はきれいに整形されていない）	○斜めに広がる直口の鉢	○なだらかなカーブをえがく直口の鉢。	○口縁端を外側下方に折り曲げ、内端は少し下がる。
	文様		○口縁からすぐ列点文2帯(原体は管状のもの)	○口縁内端面に刻み、口縁部に列点文	
	整形 外	○横ナデ			○横ナデ
	整形 内	○刷毛目	○横ナデ	○横ナデ	○斜め方向にヘラ磨き
肩胴部	形態				
	文様				○簾状文、その下、間隔(2.5) cmをおいて縦向に簾状文、その間に列点文。
	整形 外	○上部は横方向にヘラ磨き。 ○下部は縦方向にヘラ磨き。	○文様の下は横方向にヘラ磨き、その下は縦方向にヘラ磨き。	○縦方向にヘラ磨き。	
	整形 内		○斜めに刷毛目調整をした上にヘラ磨き。	○斜め方向にヘラ磨き。	○横方向にヘラ磨き
底部		底は指頭圧痕、中央部が少しくぼむ。	不明	底の外—ヘラ削り 内—ヘラ磨き	
色調		茶～黒褐色	外　褐色 内　灰黒色	淡茶褐色	茶褐色
胎土質		0.3～0.5cmの砂粒少量、雲母含む 硬	微砂粒含む 硬	0.1～0.5cmの砂粒少量、雲母含む 硬	0.1cmの砂粒、雲母含む 硬
備考		○底部に黒斑（7×5）cm	○巾のはっきりしない黒斑		

土器番号		57	58	59	60
種類／摘要		鉢	台付鉢	台付鉢	台付鉢
法量(cm)	口縁径	39.8	19.1	21.6	24.8
	器高	10.45(現存値)	7.0(現存値)	8.0(現存値)	13.1(現存値)
	腹径		(脚部)	(脚部)	(脚部)
	底径	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
出土地区		5BW5	3OH～S	3PD24A溝内	3PO 24
口頸部(杯部)	形態	○口縁端を外側下方に折り曲げ、内端は少し下がる。	○腰に稜をもち、内方にやや傾斜して立つ段状口縁部をもつ内端は下方に傾斜	○腰に稜をもち、内方にやや傾斜して立つ段状口縁部をもつ。	○腰に稜をもち、直立する段状口縁部をもつ
	文様	○口縁端面に簾状文	○棒状浮文に細かい刻み ○棒状浮文の間に縦の流水文	○口縁端面に簾状文 ○口縁下は原体の巾の広い簾状文と巾がせまく荒い簾状文1帯	○浅い櫛描きによる直線文、波状文
	整形 外		○文様の下刷毛目	○文様間をヘラ磨き	○口縁は横ナデ ○ヘラ削りの上にヘラ磨き
	内	○横方向にヘラ磨き			○口縁部は横ナデ ○下半部は細かく刷毛目
肩胴部(脚部)	形態		不明	不明	不明
	文様	○簾状文			
	整形 外	○文様帯間をヘラ磨き			
	内	○横方向にヘラ磨き			○わずかにしぼり目の痕あり。
底部		不明			
色調		茶褐色	暗褐色	灰褐色	上半部　淡褐色 下半部　黒褐色
胎土質		0.1～0.3cmの砂粒多量、雲母含む 硬	0.1～0.2cmの砂粒、雲母含む 硬	0.1～0.3cmの砂粒、雲母少量含む 硬	0.1～0.3cmの砂粒、含む 硬
備考					○円板充塡法 ○口縁から胴部まで黒斑

土器番号		61	62	63	64
種類／摘要		台付鉢	台付鉢	高　杯	高　杯
法量(cm)	口縁径 器高 腹径 底径	24.8 6.2（現存値） （脚部） 欠損のため不明	30.9 26.1 （脚部） 17.0（裾径）	22.6 8.6（現存値） （脚部） 欠損のため不明	27.5 8.3（現存値） （脚部） 欠損のため不明
出土地区		3NW23	3LY13	5CH20	3PB24
口頸部（杯部）	形態	○腰に稜をもち、内方に傾斜して段状口縁部をもつ。	○腰に稜をもち、まっすぐ立つ段状口縁部	○水平にひろげた口縁部で、内端は1条の凸帯をもち、外端は下に折れ曲る。	○(63)と同じ形態で外端は下に長く折れ曲っている。
	文様	○口縁端面列点文 胴部は簾状文と列点文	○直線文		
	整形 外	○横方向にヘラ磨き	○腰部は横方向にヘラ磨き ○腰部の下から脚部にかけて縦方向にヘラ磨き	○口縁は横にヘラ磨き、体部はヘラ削りの上にヘラ磨き	○口縁は横方向、体部は縦にヘラ磨き
	整形 内	○部分的に指頭圧痕あり。	○横方向にヘラ磨き	○口縁は横ナデ、体部は細かくヘラ磨き	
肩胴部（脚部）	形態	不明	○裾までなだらかにひろがり端部は上下に肥厚する。	不明	不明
	文様				
	整形 外		○ヘラ磨き		
	整形 内		○上半部しぼり目 ○下半部横にヘラ削り		
底部		不明		不明	不明
色調		濃茶褐色	赤褐色	外　黒褐色 内　暗褐色	褐色
胎土質		0.1～0.3㎝ の砂粒 雲母含む 硬	微砂粒少量 硬	0.1～0.3㎝ の砂粒 雲母含む 硬	0.1～0.2㎝ の砂粒少量 雲母含む 硬
備考			脚部外 杯部内 に黒斑	○杯部内面に植物性付着物 ○口縁に煤付着 ○円板充塡法	○口縁に黒斑 （3×12㎝）

土器番号		65	66	67	68
種類／摘要		高　杯	高　杯	高　杯	台付鉢
法量(cm)	口縁径 器高 腹径 底径	25.1 20（現存値） （脚部） 欠損のため不明	28.8 12.0（現存値） （脚部） 欠損のため不明	欠損のため不明 21.9（現存値） （脚部） 17.1（裾径）	13.2 10.3（現存値） （脚部） 欠損のため不明
出土地区		3OL 24土坑No.1	3PT25	3PY20	3OF24
口頸部（杯部）	形態	○(63)と同じ形態で外端は少し内方に向く	○(63)と同じ形態で内端の凸帯は「く」の字形を呈す。	○(63)と同じ形態のものか下半部は斜めまっすぐ立つ	○腰部ではっきりした稜をもち内弯して立つ口縁部で端面は　2本の稜をもつ
	文様	○口縁の上端面と外端面に細かい刷毛目の上を斜格子の暗文	○口縁部のかえりの内面は不整形でザラザラ ○口縁端面は横方向にヘラ磨き		
	整形 外	○縦にヘラ磨き	○体部は縦方向にヘラ磨き	○縦方向にヘラ磨き	○上半部は横方向ヘラ磨きの上に縦にヘラ磨き ○下半部は縦にヘラ磨き
	整形 内	○刷毛目の上にヘラ磨き	○横方向に短く切ってヘラ磨き		○横方向にヘラ磨き
肩胴部（脚部）	形態	○長い柱状部は中空で器壁はうすい。		○長い柱状部をもち裾部はなだらかにひろがり端部は上下に肥厚する。	不明
	文様			○柱状部下にヘラによる直線文	
	整形 外	○ヘラ磨き	○縦方向にヘラ磨き	○縦方向にヘラ磨き ○裾は横ナデ	
	整形 内		○横にヘラ削り	○しぼり目あり ○裾は横ナデ	
底部					
色調		赤褐色	杯部は黒褐色 脚部は灰色	淡褐色	淡褐色
胎土質		0.1～0.2cmの砂粒少し雲母含む 硬	0.2～0.3cmの砂粒 硬	0.1～0.3cmの砂粒 硬	0.1～0.2cmの砂粒多い 硬
備考		○円板充塡法	○杯部にうすく煤付着 ○円板充塡法	○円板充塡法	○杯下半部に黒斑 ○円板充塡法

土器番号		69	70	71	72
種類／摘要		高　杯	高　杯	水　差	台付鉢
法量(cm)	口縁径 器高 腹径 底径	欠損のため不明 13.5(現存値) (脚部) 11.5	欠損のため不明 11.1(現存値) (脚部) 14.2(裾径)	9.2 14.7(現存値) 欠損のため不明	21.1 16.3(現存値) (脚部) 欠損のため不明
出土地区		3PT25	3OC24溝内	3PY1	5CH20
口頸部(杯部)	形態	不明	不明	○頸部は少し内弯して立つ、端面は丸い。	○腰に稜をもち、やや外方に直立する口縁部
	文様			○頸部に凹線文	○凹線文の間に波状文
	整形 外	○下半部は横にヘラ磨き	○縦方向にヘラ磨き	横ナデ	○下半部は細かい縦方向のヘラ磨き ○横ナデ
	整形 内		○横方向にヘラ磨き		○下半部は刷毛目の上をヘラ磨き
肩胴部(脚部)	形態	○柱状部から裾まで、なだらかにひろがり、端面に凹線文	○柱状部は短く裾までなだらかにひろがり端部は上下に肥厚する。	○球形に近い形態になると考えられる。	○短い柱状部
	文様		○柱状部に凹線文	○直線文と波状文を交互にくり返す。	○有孔
	整形 外	○縦にヘラ磨き	○縦にヘラ磨き ○上半部しぼり目		○縦にヘラ磨き
	整形 内	○上半部しぼり目 ○下半部はヘラ削り	○指頭圧痕、裾部ヘラ削り	○短い刷毛目	○上半部はしぼり目 ○下半部は横にヘラ削り
底部				不明	
色調		乳灰色	褐色	外　褐色 内　赤褐色	淡灰色
胎土質		微砂粒多い 硬	微砂粒多い 硬	微砂粒多い 軟	0.1～0.5cmの荒い砂粒多量含む 硬
備考		○円板充塡法	○裾部に黒斑有 ○円板充塡法	○外に煤付着	○円板充塡法 ○杯部に黒斑(7×16)

土器番号		73	74	75	76
種類／摘要		台付鉢	台付鉢	鉢	台付鉢
法量(cm)	口縁径 器高 腹径 底径	欠損のため不明 6.8（現存値） （脚部） 7.5（裾径）	11.5 9.05 （脚部） 6.95（裾径）	20.9 12.4 21.5 6.9	20.2 5.2（現存値） （脚部） 欠損のため不明
出土地区		3NW23	3PF24	3OQ 9南pit	5BW1～3
口頸部	形態	不明	○浅い椀形の器体で、口縁端部は内方に丸く肥厚する。	○直口の鉢で、口縁部は内弯する。	○腰に稜をもつ直口の鉢
	文様			○口縁部に凹線文	○口縁部に凹線文
	整形 外		○口縁部は横ナデ ○下半部はヘラ磨き	横ナデ	○ヘラ削り
	整形 内		○横ナデ		○ナデ
肩胴部（脚部）	形態	○短い脚部で裾はやや内弯する端面は丸い。	○裾は内方にちぢまる脚部で端面は丸い。		不明
	文様	○脚部裾に凹線文	○6ヶ所に穿孔		
	整形 外	○ヘラ磨き裾は横ナデ	○穿孔の部分は縦に、その下は斜めにヘラ磨き	○ヘラ削り	
	整形 内	○横方向にヘラ削り	○横方向にヘラ削り	○斜めに刷毛目、その上をヘラ磨き	
底部				○底はヘラ削り	
色調		外　乳灰色 内　灰茶	外　黒褐色～褐色 内　茶色	乳黒褐色	灰褐色
胎土質		0.1cmの砂粒 雲母含む 硬	0.1cmの砂粒極少量 硬	0.1～0.5cmの砂粒含む 雲母含む 硬	0.1cmの砂粒 硬
備考		○脚部裾に黒斑 ○円板充塡法	○円板充塡法 ○口縁から脚部にかけて黒斑	○内面に植物性付着物 ○口縁部に黒斑（14×3）	

土器番号		77	78	79	80
種類／摘要		鉢	鉢	鉢	高　杯
法量(cm)	口縁径	27.8	23.8	24.3	30.4
	器高	5.35(現存値)	6.2（現存値）	16.0	13.1（現存値）
	腹径				
	底径	欠損のため不明	欠損のため不明	6.5	（脚部） 欠損のため不明
出土地区		5BW4	3PY17	3LY23東西自然溝	5CI20
口頸部（杯部）	形態	○腰に稜をもち、少し内弯する口縁部	○直口の口縁部	○椀形の器体で、口縁内端が少し下っている。	○直口の杯部で、端面は内方が低く傾斜、肥厚し、上端に凹線文をもつ
	文様	○凹線文が間隔をあけて2本	○口縁部に凹線文	○口縁端面に細かく刻み ○口縁部に凹線文	○口縁部に凹線文
	整形 外	横ナデ	○口縁部は横ナデ	横ナデ	○上半部は横方向にヘラ磨き ○下半部は縦方向にヘラ削り
	整形 内				○口縁部は横ナデ
肩胴部（脚部）	形態	不明			○脚部の器壁は相当厚い
	文様				
	整形 外		○凹線文の下からヘラ磨き。	○上半部刷毛目 ○下半部ヘラ削り	○ヘラ削り
	整形 内			○刷毛目	○しぼり目の痕あり。
底部			不明		
色調		外　赤褐色 内　褐色	淡茶褐色	外　淡褐色 内　淡灰色	外　乳白色 内　全面にわたって煤付着のため不明
胎土質		0.2cmの砂粒 0.3　の雲母含む 硬	0.1～0.2cmの砂粒 雲母少量含む 硬	0.1～0.2cmの砂粒 雲母含む 硬	0.1～0.2cmの砂粒、 雲母含む 硬
備考					○内面全体に厚く煤付着 ○杯の上半部に黒斑

土器番号		81	82	83	84
種類／摘要		カ　メ	カ　メ	カ　メ	カ　メ
法量(cm)	口縁径	9.9	11.75	12.4	14.6
	器高	4.3（現存値）	8.65（現存値）	4.2（現存値）	3.75（現存値）
	腹径	9.0	12.8	欠損のため不明	欠損のため不明
	底径	欠損のため不明	欠損のため不明		
出土地区		5BW5	5BW4～5	5BW1	5BW1～3
口頸部	形態	○口縁部は外反するが、内外とも円味をもち端面は丸い。	○口縁部は斜めに外反するが、内外とも円味をもち端面は丸い	○(82)に同じ	○(82)に同じ
	文様		○口縁端面に刻み目文		
	整形 外	横ナデ		横ナデ	横ナデ
	整形 内		○口縁内端に横方向に荒い刷毛目		
肩胴部	形態	○腹径は口径よりも小さい。	○胴部はあまりはり出さずなだらかなカーブをもつ。	○(82)と同じ形態と考えられる。	
	文様				
	整形 外			○交差する刷毛目	○ヘラ磨き
	整形 内	○ヘラ削り		○荒い刷毛目	○横ナデ
底部		不明	不明	不明	不明
色調		灰褐色	外　灰褐色 内　口縁　灰褐色 　　胴　茶褐色	乳黄色	茶褐色
胎土質		0.1～0.2cmの砂粒 雲母含む 硬	0.1～0.2cmの砂粒 雲母含む 硬	0.1～0.2cmの砂粒 雲母含む 硬	0.1～0.2cmの砂粒 雲母含む 硬
備考					○肩部に断ぎ目痕あり

土器番号		85	86		
種類／摘要		カ　メ	カ　メ		
法量(cm)	口縁径	13.0	14.5		
	器高	7.0（現存値）	8.4（現存値）		
	腹径 底径	欠損のため不明	欠損のため不明		
出土地区		5ＢＷ１～３	5ＢＷ５		
口頸部	形態	○(82)に同じ	○(82)に同じ		
	文様				
	整形 外 内	横ナデ	横ナデ		
肩胴部	形態	○(82)と同じ			
	文様				
	整形 外	○縦方向の細かい刷毛目の上にヘラ磨き	○縦方向に荒い刷毛目		
	内	○横ナデ			
底部		不明	不明		
色調		黄褐色	濃茶色		
胎土質		0.1～0.2cmの砂粒 雲母含む 硬	0.1～0.2cmの砂粒 雲母含む 硬		
備考			外全面に煤付着		

土器番号		87	88	89	90
種類／摘要		カメ	カメ	カメ	甑
法量(cm)	口縁径	15.9	11.2	11.1	14.7
	器高	4.7(現存値)	15.7	8.9(現存値)	23.3
	腹径	欠損のため不明	12.1	12.6	16.1
	底径		4.65	欠損のため不明	5.1
出土地区		5BW5	5BX～BY7	3OC24溝内下層	3OA23溝内
口頸部	形態	○(82)に比べるとほぼ水平に外反する	○口縁は短く水平に折れ曲る	○口縁は水平近く折れ曲り、内面に稜をもつ。端部は矩形をなす	○わずかに直立する頸部をもち、口縁は水平に折れ曲る。端面は矩形
	文様			○口縁端面に刻み目文	
	整形(外)	横ナデ	○口縁端面の整形不充分 ○横ナデの上に細かい刷毛目	○横ナデ	○横ナデ
	整形(内)		○刷毛目	○横方向に刷毛目	○頸部～胸部にかけて横方向にヘラ磨き
肩胴部	形態	○(82)と同じ形態になると考えられる	○口径とあまり変らない腹径で器壁も他のカメに比べると厚い。器面の凹凸が激しい	○腰部は丸くはり出す	○腰高でなだらかなカーブをえがいて底部につづく
	文様				
	整形(外)	○煤付着のため不明	○上半部はヘラ磨き ○下半部はヘラ削りのまま	○全面に刷毛目	○ヘラ削りの上に細かいヘラ磨き
	整形(内)	○横方向にヘラ磨き	○ヘラの痕あり	○細かい刷毛目	○縦に間隔をあけてヘラ磨き
底部		不明	(外) 指頭圧痕 底は厚い		焼成後に穿孔
色調		(外) 濃茶色 (内) 茶褐色	(外) 茶褐色 (内) 黄褐色	灰褐色	茶～黒褐色
胎土質		0.2cmの砂粒 雲母含む 硬	0.1～0.3cmの砂粒 雲母含む 硬	砂粒多い 雲母含む 硬	微砂粒 雲母含む 硬
備考		○外面に煤付着	○胴上半部に煤付着 ○腰の部分に黒斑	○ほとんど全面に煤付着	○頸部と胴部の一部分に煤付着

土器番号		91	92	93	94
種類／摘要		甑	カメ	カメ	カメ
法量(cm)	口縁径	欠損のため不明	15.5	17.2	21.4
	器高		23.7	24.6(現存値)	8.95(現存値)
	腹径		17.45	20.1	欠損のため不明
	底径	4.8	5.8	欠損のため不明	
出土地区		3OA23溝内	3LY18	3ZZ	5BW1～3
口頸部	形態	不明	○(82)に同じ	○(82)に同じ	○(82)に比べると少し上向きに外反する
	文様				
	整形(外)		横ナデ	横ナデ	横ナデ
	(内)				
肩胴部	形態		○左右の腰の高さがちがい、形もいびつであるが、だ円形に近い。	○だ円形をなす	
	文様				
	整形(外)	○ヘラ削り	○縦方向にヘラ磨き	○縦方向にヘラ磨き	○縦方向にヘラ磨き
	(内)		○上半部は横方向、下半部は縦にヘラ磨き	○部分的にヘラ磨き	○横方向にヘラ磨き
底部		焼成後に穿孔	内外ともヘラ削り	不明	不明
色調		黒褐色	暗茶褐色	黒褐色	茶褐色
胎土質		0.1～0.3cmの砂粒 雲母含む 硬	微粒 雲母含む 硬	0.1～0.25cmの砂粒 雲母含む 硬	0.2～0.5cmの荒い砂粒 雲母 硬
備考		○内面に煤付着	○外面、厚く煤付着	○全面に煤付着	○口縁に部分的に煤付着

土器番号		85	96	97	98
種類／摘要		カメ	カメ	カメ	カメ
法量(cm)	口縁径	21.4	28.9	37.2	38.8
	器高	21.3(現存値)	6.9(現存値)	4.35(現存値)	7.8(現存値)
	腹径	23.7	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
	底径	欠損のため不明			
出土地区		3PY16	3OC24溝内	5BW3	5BW1～3
口頸部	形態	○(82)に同じだが内面は稜をもつ	○わずかに立つ頸部に斜めに外反する口縁部で端部は下に少し肥厚	○口縁部は少し斜めに立ち、端部は下に折れ曲る	○口縁上端は平らで外端は下に折れ曲っている
	文様			○口縁端面に刺突文	○口縁端面に刺突文
	整形(外)	横ナデ	横ナデ	○横ナデ	
	整形(内)			○横ナデとヘラ磨き	○横方向にヘラ磨き
肩胴部	形態	○腹径は口径とあまり変らないでなだらかなカーブをもつ			
	文様				
	整形(外)	○縦方向のヘラ磨き ○胴部上に輪づみの痕あり	○横ナデ		○縦方向にヘラ磨き
	整形(内)	○刷毛目	○斜めに刷毛目		○横方向にヘラ磨き
底部		不明	不明	不明	不明
色調		黒褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色
胎土質		0.1～0.2cm砂粒含む 硬	0.1～0.2cmの砂粒 雲母含む 硬	0.2cmの砂粒含む 硬	0.1～0.2cmの砂粒を含む 硬
備考		○外全面に煤付着	○口縁部に煤付着		

土器番号		99	100	101	102
種類／摘要		カメ	カメ	カメ	カメ
法量(cm)	口縁径	16.1	13.5	16.9	22.3
	器高	4.9(現存値)	9.5(現存値)	9.3(現存値)	3.45(現存値)
	腹高	欠損のため不明	15.4	欠損のため不明	欠損のため不明
	底径		欠損のため不明		
出土地区		5BW5	5BW4	5BW5	5BW5
口頸部	形態	○口縁部は「く」の字形に外反し端部は上方に少し立上りをもつ	○(99)に同じ形で立ち上りをもつ	○(99)に同じ	○口縁部は水平に折れ曲り端部は上方に少し立ち上りをもつ
	文様				
	整形(外)	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ
	(内)				
肩胴部	形態	○胴部ははり出すと考えられる	○(95)と同じ形態になると考えられる	○(99)と同じになると考えられる	○口径より胴部は内方に入る
	文様				
	整形(外)	○煤付着のため不明	○刷毛目		○交差する刷毛目
	(内)	○交差する刷毛目	○刷毛目の上に部分的に斜めにヘラ磨き	○部分的に縦に荒い刷毛目	○斜め、横方向に刷毛目
底部		不明	不明	不明	不明
色調		濃茶色	(外) 赤褐色 (中核) 黒色 (内) 乳黄色	茶褐色	乳灰色
胎土質		微砂粒 雲母含む 硬	0.1～0.3cmの砂粒含む 雲母含む 硬	0.1cmの砂粒 雲母含む 硬	微砂粒 雲母含む 硬
備考		○全面に煤付着	○胴部に煤付着	○口縁から胴部にかけて一部煤付着	○全面にうすく煤付着

土器番号		103	104	105	106
種類／摘要		カメ	カメ	カメ	カメ
法量(cm)	口縁径	12.8	25.6	30.0	34.6
	器高	22.1	9.35(現存値)	20.0(現存値)	6.3(現存値)
	腹径	14.8	欠損のため不明	34.5	欠損のため不明
	底径	5.3		欠損のため不明	
出土地区		3LY19	5BW5	5CU8pit6	5BW1
口頸部	形態	○口縁部は「く」の字形に外反し、端部は少し立ち上りをもち、矩形をなす	○(99)に同じで端面はナデによる凹みをもつ	○円みを帯びた「く」の字形に外反する口縁部で、端部は少し立ち上りをもつ	○(99)に同じ 頸部も(104)に同じ
	文様				
	整形(外)	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ
	(内)				
肩胴部	形態	○腰はあまりはり出さずなだらかなカーブをえがいて底部につづく	○胴部はあまりはり出さない	○肩部から丸くはり出す	
	文様			○背に矢がささった鹿の絵	
	整形(外)	○上半分は刷毛目 口縁下部はその上から横ナデ ○下半分はヘラ磨き	○縦方向に刷毛目	○荒い刷毛目	○ヘラ磨き
	(内)	○細かく縦方向に刷毛目	○斜めに荒い刷毛目	○斜めに細かく刷毛目	○ナデ
底部			不明	不明	不明
色調		(外) 茶～黒褐色 (内) 褐色～黒色	茶褐色		茶褐色
胎土質		微砂粒 金雲母含む 硬	0.2cmの砂粒含む 硬	0.1～0.2cmの砂粒含む 雲母含む 硬	0.1～0.15cmの砂粒極少量含む 硬
備考		○全面に煤付着	○口縁から胴部にかけて一部煤付着	○胴部に煤付着	○口縁端面にわずかに煤付着

土器番号		107	108	109	110
種類／摘要		カメ	カメ	カメ	カメ
法量(cm)	口縁径	36.0	28.9	16.8	15.8
	器高	8.45(現存値)	43.35	26.6	25.15
	腹径	欠損のため不明	35.85	20.7(現存値)	19.0
	底径		9.55	欠損のため不明	5.8
出土地区		5BW5	第2号方形周溝墓	3PD24A溝内	3LY17
口頸部	形態	○(99)よりも水平に折れ曲る	○(99)に同じ	○斜めに外反する口縁部で端部は少し立ち上りをもつ	○(109)に同じ
	文様	○頸部は(104)に同じ	○(104)に同じ	○口縁端面は凹線文の上に刻み目文(一部のみ)	○口縁端面に凹線文
	整形(外)	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ
	整形(内)				
肩胴部	形態		○腰は丸くはり出しなだらかなカーブをもつ	○なだらかなカーブをもつ。腰はあまりはり出さず	○(109)に同じ
	文様				
	整形(外)	○刷毛目	○上半部荒い刷毛目 ○下半部はヘラ削り	○口縁下から刷毛目 ○胴部中ごろはヘラ削り	○表面剝離のため不明
	整形(内)	○ナデ	○荒い刷毛目	○荒い刷毛目	○細かく刷毛目
底部		不明	底は指頭圧痕	不明	
色調		乳灰色	茶～黒褐色	暗褐色	(外) 赤褐色 (内) 黄白色
胎土質		0.1cmの砂粒含む 雲母含む 硬	0.1～0.2cm砂粒 雲母含む 硬	微砂粒 硬	0.1～0.3cmの砂粒多い 硬
備考		○一部煤付着	○肩部に煤付着 ○4号甕棺(蓋がない)	○全面に煤付着	

土器番号		111	112	113	114
種類／摘要		カメ	カメ	カメ	カメ
法量(cm)	口縁径	15.1	20.1	24.7	15.2
	器高	10.5(現存値)	8.7(現存値)	37.2	4.65(現存値)
	腹径	19.1	欠損のため不明	30.9	欠損のため不明
	底径	欠損のため不明		8.9	
出土地区		5BW4	3OC24	3OY24	5BW5
口頸部	形態	○「く」の字形に外反し端部は上に立ち上りをもつ	○(109)と同じで、内面は少し円みをもつ ○頸部に少し凹みをもつ	○斜めに外反する口縁で内面は丸く、端部は上方内側に向って立ち上りをもつ	○(109)に同じ
	文様	○口縁端面に凹線文	○口縁端面に刻み目(5個のみ)	○口縁下は凹みをもつ ○口縁端面はナデによる凹線文	○(110)に同じ
	整形(外)(内)	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ
肩胴部	形態	○(109)と同じ形態になると考えられる	○(112)と同じ	○肩からひろがり、胴部で丸くはり出し底部につづく	
	文様	○胴部中ごろに櫛による刻み目文			
	整形(外)	○荒い刷毛目	○細かい刷毛目	○上半部荒い刷毛目 ○下半部はヘラ削りのまま	
	整形(内)	○細かい刷毛目	○交差する細かい刷毛目		
底部		不明	不明	外面に指頭圧痕	不明
色調		(外) 乳灰色 (内)茶褐色	(外) 黒褐色 (内) 茶褐色	茶褐色	濃茶色
胎土質		0.1～0.2cm の砂粒 雲母含む 硬	微砂粒 雲母含む 硬	0.1～0.3cm の砂粒 黒雲母含む 硬	0.1～0.2cmの砂粒 雲母含む 硬
備考		○口縁下に一部煤付着		○内面の胴下半部に煤付着 ○胴部に黒斑(14×11) ○底部に黒斑(5×12)	

土器番号		115	116	117	118
種類／摘要		カメ	カメ	カメ	カメ
法量(cm)	口縁径	15	37.6	27.4	27.4
	器高	8.8(現存値)	22.1(現存値)	4.1(現存値)	4.5(現存値)
	腹径	17.1	41.3	欠損のため不明	欠損のため不明
	底径	欠損のため不明	欠損のため不明		
出土地区		3 OC24溝(下)	3 OC24溝(下)	5 BW4	5 BW4
口頸部	形態	○(109)に同じ	○(113)に同じ ○頸部が少し凹む	○ほぼ水平に外反し、口縁端部は立ち上りをもつ ○頸部は凹みをもつ(110)に同じ	○(109)に同じ ○わずかに立つ頸部をもつ
	文様	○(110)に同じ	○(110)に同じ		
	整形(外)	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ
	整形(内)				
肩胴部	形態		○腰高で丸くはり出す	不明	
	文様				
	整形(外)	○口縁下は横ナデ ○荒い刷毛目	刷毛目		○荒く斜めにヘラ磨き
	整形(内)				
底部		不明	不明	不明	不明
色調		(外)黒褐色 (内)濃茶色	黒褐色	(外)(内)乳黄色 (中核)灰色	淡赤褐色
胎土質		0.1～0.2cmの砂粒 雲母含む 硬	微砂粒 雲母極少量含む 硬	0.2cmの砂粒含む 雲母極少量含む 硬	0.1cmの砂粒 雲母含む 硬
備考		○全面に煤付着			

土器番号		119	120	121	
種類／摘要		蓋	蓋	蓋	
法量(cm)	口縁径 器高 腹径 底径	7.8 2.3	15.7 7.7 12.8 4.8	16.2 5.2	
出土地区		3NW24溝状遺構	3OA23	3OA23	
口頸部	形態	○広いつまみをもち、笠形をなす。口縁端部は上方に肥厚する	○つまみの部分は上げ底で、なだらかな器体に凹みのある頸部から斜めにひろがる口縁部	○つまみをもち笠形をなす。口縁端面は丸い	
	文様	○2孔1対 2組	○口縁端面に刻み目文	○2孔1対 2組と焼成後の穿孔がある(3孔)(割れた部分をつなぐためと思われる)	
	整形(外)	指成形	○口頸部はナデ 器体はヘラ削り	○刷毛目	
	整形(内)		○指おさえ	○横ナデ	
肩胴部	形態	不明	不明	不明	
	文様				
	整形(外)				
	整形(内)				
底部		不明	不明	不明	
色調		灰褐色	黄茶褐色	茶色	
胎土質		0.1～0.3cmの砂粒 雲母含む 硬	0.1～0.3cmの砂粒含む 硬	微砂粒含む 硬	
備考			○器体部に黒斑(8×9) 内面に煤付着		

土器番号		122	124	125	126
種類／摘要		壺形土器	壺形土器	小型壺形土器	鉢形土器
法量(cm)	口縁径 器高 腹径 底径	13.0 不明 10.2 不明	15.4 不明	不明 14.0 3.6	18.4 8.2 不明
出土地区		6 A V10	6 A W10	6 B B10	6 A V10
口頸部	形態	○最大径が口縁部にあり、急に頸部より屈折して外反する。	○縊れた頸部からわずかに外反する口縁部に続く。	不明	○上端部をそいで外面にわずかな稜をつくり出している。
	文様				○外端部が内端部よりやや低位にある傾斜した端面である。
	整形(外)	○内・外ともに横ナデがなされている。	○外面、内面ともに横ナデがなされている		○内外面ともに丁寧な横ナデがある。
	(内)				
肩胴部	形態	○肩部は殆んど張っていない。 又胴はわずかにふくらんで底部へすぼまると思われる。	○肩部が張り胴部中央部の張りのみられない面長な体部、底部へすぼまっていくのであろう。	○胴下部が張り出し頸部はほとんどすぼまらない。 ○叩き目、刷毛目が上半部にあり、中央部はヘラナデ、ヘラミガキが施こされている。 ○内面胴上部に継ぎ目が残り、それに沿って刷毛目もある。	○内・外面とも叩き目が横位に施こされている。 ○ヘラ削りが斜め上の方向(右下→左上)に行なわれている。
	文様				
	整形(外)	○外面は叩き目あり。	○外面は斜行した叩き目、内面はゆるやかな斜行の刷毛目がある。		
	(内)	○内面は刷毛目の痕跡がある。			
底部		不明	不明	叩きによって角のある底部となっている。ヘラ磨きがなされている。	とがり気味の丸底。叩き目が四方向にありヘラ削りが下から上方向にある。
色調		外面は赤褐色で煤の付着がある。 内面は赤褐色	外面は赤褐色で煤の付着がある。 内器面は茶褐色	外面は褐色 内面は淡黄褐色	褐色
胎土質		砂粒を多く含みザラザラしている 軟弱	砂粒を多く含みザラザラしている 軟弱	砂粒を含む 堅緻	砂粒を含む 堅緻
備考		○胴下半を欠く	○胴下半を欠く	○口頸部を欠損する	○最大径が口縁部にありやや張りをもって底部へすぼまる。 ○底部はヘラ削りによってつつくられている。

土器番号		123	127	128
種類／摘要		壺形土器	壺形土器	甕形土器
法量(cm)	口縁径 器高 腹径 底径	15.0 15.6	14.4 不明	12.5 10.5 10.9 4.7
出土地区		5DX9	6AW10	6BI10
口頸部	形態	○頸部は緩やかに外反しており、口縁端部に到っても肉厚の変化はない。内外器面共に横ナデをなされている。 ○胴部から続く頸部の叩き目は横ナデによって消されている。 ○胴部と口頸部との継ぎ目跡が残っており、継ぎ目跡の整形されている所は明確な稜を成している。 ○底部まで器壁はそうとう厚い。	○口縁端部は立ちあがりつまみあげによる口唇部を形成している。 ○口唇部の外面に一条の沈線がめぐっている。 ○更に口唇端部下にも一条乃至二条の沈線がある。	○口縁端部から底部まで非常に磨滅が激しく叩き目のほとんどが消滅している。 ○口縁の端部は（外上方へのび）面をなす。
	文様			○くびれ部には指痕がみられる。
	整形（外）	○内外器壁共に横ナデがある。	○内外器面ともに横ナデがある。	○不明
	（内）			
肩胴部	形態	○肩はほとんど張らず、口縁径と殆んど同径の腹径をもつ。肩部の叩き目は右上→左下の方向をもち胴部はその斜傾の叩き目の上を横方向に加えている。	○肩部外面は叩き目があり、頸部に近い部分は横にナデている。	○表面の剝離、磨滅とも激しい。 胴部最大径が器高の⅔近くにあり、あまり肩のはらない形である。（叩き目が消失しているのであろう）
	文様	○肩部にある叩き目は、強く一度だけのものと、弱く二度、三度程度加えている叩き目がある。		
	整形（外）	○内面器壁は横方向に(左→右)刷毛目があり底部からの刷毛目の上に重っている。	○肩部内面は斜め（左上→右下）に刷毛目がある。	○約2㎜幅のあらい刷毛目が下から上へ不均等についている。
	（内）			
底部		○上げ底風であり刷毛目が縦方向(下→上)にある ○輪状の底部の中央は窪んでいる。	不明	○輪状の底部を押圧した形をとり、非常に粗雑なものである。
色調		外面は黒色乃至黒褐色である。 内面は淡黒色である。	暗褐色 煤の付着がある	外　淡黄褐色 内　黒色
胎土		砂粒を含む	砂粒を含む	普通（小石4㎜、砂粒を多く含む）
質		堅緻である	堅緻	軟弱
備考		○口頸部と胴部の継ぎ合せ部分は胴部より、口頸部に粘土を引き上げ、合せ部分よりやや上部まで粘土を引き上げているので稜は継ぎ目部分よりやや上にめぐる。 ○中央下半を欠損している。	○胴中央部以下を欠損する。	○内面にスス付着（外面は消失したものか）

土器番号		129	130	131	132
種類／摘要		甕形土器	高杯形土器	鉢形土器	小型甕形土器
法量(cm)	口縁径	10.9	11.9	12.5	13.1
	器高	9.7	4.4(杯高)	10.5	4.9(高)
	腹径	9.9	2.4(脚径)	10.9	なし
	底径	3.8	他は不明	4.7	なし
出土地区		6BE10	6BL6	6BL6	6AH10
口頸部	形態	○外上部へ立ち上がりその端部はうすく丸く仕上げられている。	○端部は丸くおさめられている。	○形態で端部は丸く収められている。	○丸味の口縁端部である ○頚部がやや肉厚になって外反する口縁に続く
	文様	○外面は(一部)横方向に叩き目がつき内面は横になでられている。	○なし	○なし	○なし
	整形(外)			○外面はヘラ削りの後その上を横になで平滑にしている。 内面は体部から端部近くまで外面の叩き目と同じ原体を用いたと思われる叩き目がついている。	
	(内)		○外面は横方向に粗い刷毛目をつけ、端部は内外とも横になでている。内面で横ナデの見られない個所には粗い刷毛目がみられる。		○外側は横ナデ ○内面は斜め縦方向にヘラ削りの後横ナデを施こしている。
肩胴部	形態	○肩が張り、胴部最大径は器高の⅔位の個所にある。	○小さな椀状の杯部である。	○ (130)と同様の形態をとる。	
	文様				
	整形(外)	○外面は磨滅しているが叩き目がある	○外面には粗い刷毛目が横方向にあり、内面にはヘラ削りの痕跡がかすかに残りその上をなでて平滑に仕上げている。	○ヘラ削りが施されたままの荒い器面で底部から体部へと斜め方向の砂粒の動きがみられる	○外面はヘラ磨きが斜行(左上→右下)してある
	(内)	○内面はなでられている			○内面は斜方向あるいは縦方向のヘラ磨きがある
底部		○平底をなして128より数段うすくつくられている ○削られたものか。	外面には刷毛目はみられず、内面にヘラ削りの痕跡を明瞭に見ることが出来る。	丸い底の外面は、ヘラ削りなされたままで内面には指痕がついている。	平底 内、外面ともにヘラ磨きがある。
色調		外 黄褐色 内 黄褐色	外面 黒褐色 内面 黄褐色	外面 黄褐色 内面 黒褐色	内外面とも黄褐色
胎土質		普通(小石2～4㎜、砂粒を含む) やや軟弱	良好(砂粒を少し含む) 堅緻	良好(砂粒を少し含む) 堅緻	砂粒を含む やや堅緻
備考		○口縁の外側の一部にスス付着	○内外面ともに平滑な仕上がり。 ○外面のほとんどならびに口縁の内面の半周にスス付着	○外面、内面のススの付着範囲広し。 ○130. 131は黒色灰層中より出土。	○土師器か

土器番号		2	3	4	5
種類／摘要		甕形土器	甕形土器	甕形土器	甕形土器
法量(cm)	口縁径	14.8	15.8	13.8	18.2
	器高	不明	不明	不明	不明
	腹径				27.4
	底径				不明
出土地区		6BE10	6AW10	6BA10	3PY20
口頸部	形態	○上向きのはね上りの口縁部であり、その立ちあがり部分は稜をなしている。	○わずかに屈曲しつつ伸びる口縁部の端部は、小さく上方につまみあげられ端面を形成する	○口縁部は胴部からの屈折が少ない。	○頚部に対し、内反しつつ、鈍いふくらみを有して立ち上っている。
	文様	○外面は横ナデがあり、くびれた部分は斜め方向に（右上→左下）刷毛目があり、くびれ直下には横方向に叩き目が重なる。		○外面には横方向に刷毛目があり、内面は横ナデの後に刷毛目が斜め(左上→右下)につけられている部分もある。	○口縁端部上面には横ナデによる凹線帯がある。
	整形（外）			○頚部は縦方向・横方向に刷毛目がある。	○内面端部は内方にふくれる。
	（内）	○内面は横ナデである	○内外面は横ナデ ○頚部くびれ直下に横ナデがある。		○内外器面共に横ナデである。
肩胴部	形態	○口径よりわずかに広い腹径をもつ。	○外面は(右上→左下)叩き目があり、刷毛目が右上→左下の方向にある。	○肩部より胴中央部にかけて刷毛目がみられる ○頚部には継ぎ目が残っている。 ○継ぎ目の断面は斜行し口縁部の粘土帯の内面下端が内面に残っている継ぎ目跡であり、頚部からの粘土帯の上部が外面に出る。	○外面は不定方向の刷毛目がある。 ○内面は粗雑なヘラ削り痕がある。
	文様	○胴部内面はヘラ削りによって平滑に薄く仕上げられている。			
	整形（外）	○外面は叩き目が斜め(右上→左下)にあり、肩部には横位の叩き目が入っている。			
	（内）		○内面はヘラ削りで平滑にされ器壁は非常に薄い		
底部		不明	不明	不明	不明
色調		暗褐色 煤の付着がある	黒褐色 煤の付着がある	暗褐色 煤の付着がある	褐色
胎土質		砂粒を含む 堅緻	砂粒を含む 精緻である	砂粒を含む 堅緻	砂粒を含む 堅緻
備考		○胴中央部以下を欠損する。	○胴中央部以下を欠損する。	○胴中央部以下を欠く。	○胴中央部以下を欠損する。 ○布留式

土器番号		1	8	9	10
種類／摘要		高杯形土器	高杯形土器	器台形土器	高杯形土器
法量(cm)	口縁径	24.4	17.6	不明	14.0
	器高	不明	15.2		不明
	腹径				
	底径		10.6cm	10.9	
出土地区		6ＡＴ10	6ＢＥ10	6ＢＥ10	6ＡＴ10
口頸部	形態	○口縁部は外反しその端部は丸味をもってうすくおさめられており、横ナデされている。	○口縁端面は丸くおさめられている。口縁部外面にはにぶい凹線文が走りそれは内面の段に照応するものである	○杯底部に貫通孔がある	○内器面は緩やかな斜行をなしている。杯下部からの肉厚は、中央部の立ちあがりより薄くなり、杯部は外反している。
	文様	○杯下部にヘラみがきの痕がある。	○口縁部は内、外面ともに横ナデがある。		
	整形（外）	○外面低位に稜を有している。稜は横ナデされ接合部より稜まで縦方向にヘラ磨きがある。	○内外面ともに指頭圧痕が顕著であり、器面の凹凸が目立つ。		○内、外面ともに横ナデがなされている。
	（内）	○底部内面はヘラ削りされ底部から上の方向にヘラ磨きを施こしている。			
肩胴部	形態		○脚部は中空で中央はふくらんでいる。内面の整形はなされておらず強い絞り目がある。 ○杯部と脚部の接合部は肉厚化され、指痕がある。又、脚部と裾部との接合部にも指痕がある。	○ややふくらみをもって斜行し、三個の円孔がみられる。円孔は外面より内面が広い。 ○外面は器受部と脚台部の接合部より斜め右下方向にヘラ磨きがある ○内面は横ナデがなされている。	不明
	文様	○中空円筒、わずかに中ふくらみである。 ○外面、丁寧にヘラでナデられている。			
	整形（外）	○脚部の中空は棒状のものによって作られたのであろう。			
	（内）				
底部		不明	不明		不明
色調		赤味のさした黄褐色	黄褐色	下部に黒斑を有し、黄褐色である。	赤褐色
胎土		砂粒をやや含む	砂粒含まず	砂粒含まず	砂粒を含む
質		良好である	良好	良好	
備考		○裾部を欠損している。		○器受部を欠損する。	○杯部片だけが残されている。

土器番号		6	7	11	17
種類／摘要		壺形土器	壺形土器	壺形土器	甕形土器
法量(cm)	口縁径	9.0	不明	16.2	14.3
	器高	15.0		13.3	不明
	腹径	12	13.2	15.6	
	底径		5.0		
出土地区		6BE10	6BE10	6AU10	6AW10
口頸部	形態	○外上方にやや開き比較的長い頸部、端部断面はするどい丸味をおびる。	○口縁部が外上方にやや開くと思われる頸部を有するのであろう。(6)より頸部はややすぼまる。	○外面のくびれの緩漫な割に内面は肉厚化によって明確な稜を有して外反する。	○く字形に外折する口縁は外反ぎみにつくられ端部は上方へ丸くおさめられている。
	文様				
	整形(外)	○外面は一部に緻密な刷毛目があり大部分に横ナデがある。	○内外面ともにヘラ磨きである。	○内外面はともに剝落が激しく観察は出来ない。	○内外面は左回りの横ナデによってつくられ砂粒の動きがみられる。
	(内)	○内面は緻密に丁寧な刷毛目がある。			○かなりていねいなつくりである。
肩胴部	形態	○胴部は扁平な球形である。 ○肩部はほとんど張らずヘラみがきで仕上げている	○肩部はほとんど張らずなだらかに胴部に続く扁平な球形の体部である。	○くびれ部より緩らかにふくらみつつ底部に到る。	○やや下ぶくれの袋状の形態をとるのであろう。
	文様	○外はヘラ削りされた後、ヘラ磨きされている。		○外面は縦方向に刷毛目がある。	
	整形(外)	○内面はヘラ削りの後横ナデをしている。	○外面肩部はヘラ磨きされ、胴部はヘラ削りの後、横ナデされている。 ○内面は荒いヘラ削りである。	○外面の剝落が激しい。 ○内面はヘラ削りである。	○外面は上から下へ粗い刷毛目がみられ内面も上から下へヘラ削りされている。
	(内)	平底、外面はヘラ削りしている。			
底部		内面は輪状の継ぎ目の痕跡がある。	丸底、外面はヘラ削りなされている。	○丸底で外面は刷毛目があり、内面は指圧痕がある	不明
色調		淡褐色	淡黄褐色	褐色	赤褐色
胎土		砂粒を少々含む	砂粒含む	砂粒を含む	良好(砂粒少し)
質		堅緻	堅緻	やや堅緻	堅緻
備考		ヘラ削りは主として外面に行なっている。	○口縁部を欠損する。 ○(6)と同形態 ○(6)より胎土が悪い。		

土器番号		12	13	14	15
種類／摘要		杯形土器	杯形土器	杯形土器	甑
法量(cm)	口縁径 器高 腹径 底径	14.2 2.7	15.6 3.5	14.2 不明	26.0 不明
出土地区		6AX10	6AX10	6AV10	3PY22
口頸部	形態 文様 整形(外) (内)	○やや外反する口縁端部は丸みをもち内にすこしふくらむ。 ○外面はヘラ削りの後横ナデが施こされている。 ○内面は横ナデされ、一条の暗文がある。	○上部端面は内方へふくれている。 ○内外面ともにヘラ磨きがなされている。 ○内面に暗文が入る。	○口縁部は内弯し、端面はやや丸くおさめられている。 ○口縁部直下には製作時に生じたと思われる横方向の不連続な沈線状の線がある。 ○指痕の凹凸をかなり有する体部と底部体部下端面には横方向のナデが施こされている。 ○なお、黒色の内面には不連続な横方向の刷毛によるナデが均一にみられ、その上にゆるい螺線文がつけられている。	○口頸部はゆるやかに外反している。 ○内面端部及び外面端部の稜は非常に明確である。 ○外面は横ナデ ○内面は荒い刷毛目の後横ナデが施こされている。
肩胴部	形態 文様 整形(外) (内)	○内面はヘラ削りの後、一部ヘラ磨きが施こされている。	○内面は上・下2段のヘラ磨き斜行文がある。 上段は右上→左下 下段はほぼ縦方向の右上→左下 ○外面は横ナデの後、ヘラ磨きが施こされている。		○庭部から外上方へ、ややまっすぐのび、底より13cm位の位置に角形の把手を左右に付している。外面は細い刷毛目で非常に丁寧に器面を調整し下部は二段のヘラ削りで仕上げている。 ○内面には大きく、しかし丁寧なヘラ削りがみられる。
底部			○外面はナデられており、貼り付け高台がつけられている。	なめらかにナデて仕上げられている。	底部には長円形の孔が3個所穿たれている。
色調		外面　赤褐色 内面　淡褐色	外面　赤褐色 内面　淡褐色	内面は黒色 付面は褐色	内外面とも淡灰褐色
胎土 質		砂粒を少々含むが精良な粘土。 軟弱	精良な粘土 軟弱	精良な粘土 軟弱	良好(砂粒少し) 堅緻
備考		○底部外面に墨書してあるが、墨がうすくなっており、判読できない。 ○(13)と同様の意味か。	○底部外面に墨書してある墨がうすくなっている。これは文字として判読できないためある種の記号と思われる。		○底部には3孔(2孔)か。

土器番号		1	2	3	4
種類／摘要		林身	林身	細頸壺	小型壺
法量(cm)	口縁径 文様 腹径 底径	11.15 不明	10.1 5.4	9.4 不明	8.6 5.8(?)
出土地区		6AW10	6BC10	6BI10	6AI9
口縁部	形態 文様 整形	○タチアガリは高くほぼ垂直に立つ。 ○端部はひきあげた後に横ナデ ○上面に段状の内傾斜面を形成する。 この内傾斜面とタチアガリ内面との間には明瞭な稜線が認められる。従って端部外面は外へはり出す。	○タチアガリは高くNo.1よりやや内傾するが、するどく立つ。 他はNo.1に同じ。	○端部はまる味をもっている。端部より下へ2cmと2.3cmのところにシャープな稜線をもつ凸帯が2条施されている。 ○凸帯は水引きによるものである。 ○この2条の凸帯の下には波長の短い波状紋が施されている。(7本)	○外反りする口縁部を有し、端面は丁寧に横ナデで仕上げられている。
体胴部	形態 文様 整形	○蓋受部は水平にはり出す。器厚は約3～4mm程度と比較的薄い。 ○内面は水引き痕がよく残っている。 外面は蓋受部以下へラ削り仕上げ。	○No.1と同じ。	不明	○口縁部と体部との間には杯の蓋受部と同様の形態の外延部がある。この外延部は厚くシャープに外へはり出す。 ○外延部の下8mmには波長の短かい波状紋が1条施されている。(6本) ○波状紋の下は、底部まで荒いヘラ削り仕上げ
底部		欠損の為不明	器厚5～6mm程度 外面は全体がヘラ削り仕上げ	不明	中心部は欠損 ヘラ削りが認められる
色調		内外面とも暗青灰色	内外面とも灰色～青灰色	内　青灰色 外　黒灰色	外　青灰色 内　灰白灰
胎土		良質(1mm程の砂含) 堅緻	良質(0.5～1mm砂含) 堅緻	精良な粘土を使用 堅緻	良好(3～5mm砂含) 堅緻
備考		○陶邑製か?	○陶邑製か? ○蓋受部に自然釉 従って焼成時は正位にあった。	○陶邑製か? ○口縁部の一部に灰褐色の自然釉がかかっている。	○陶邑製か?

土器番号	5	6	7	8
種類／摘要	小形壺	甕	壺	小形壺
法量(cm) 口縁径 器高 腹径 底径	10.7 不明	10.3 不明	14.3 不明	不明 不明 18.25 丸底
出土地区	6BK10	6BH10	6BK10	6AH9
口頸部 形態文様整形	○漏斗状に開く口縁部を持ち、端部は水引きの後、横ナデ成形上面に段状の内傾斜面を有し内面との間に、明瞭な稜線が認められる。頸部から端部までは、2本のシャープな凸帯で3段に区割りされ、下の2段には波状紋（6本と5本）が施されている。	○漏斗状に開く口縁部を持つ、端部は外反し、意識的に外へ引き出している。したがって内部には凹みが形成されていて、内部の線との間に明瞭な稜線が認められる。頸部の胎壁は厚く、頸部迄の間に一帯の作出されたシャープな断面三角形の凸帯を施し、上下2段に区割されている。2段には、それぞれ一条の波状紋が施されている。	○漏斗状に開く口縁部、口縁端部はひきあげの後、横ナデ仕上げ、端面は丸く、やや内側へ立上がる。口縁部から頸部にかけては、2本の凸帯があり、端部直下の凸帯は断面三角を示す。シャープなもの他の一本はやや丸味をもったものであり、この凸帯で頸部は2段に区割されている。上段は波長の短い波状紋2条で全域がおおわれ、下段は中心部に一条の波長の長い波状紋が施されている。	不明
肩胴部 形態文様整形	不明	不明	不明	○肩部が横に強く貼り出し、なだらかに底に向って細くなり、腹部最大径の部分に2本の沈線があり、その沈線の内に整った波状紋が一条施されている。胴下部は指で、粘土をおさえた後こまかなタタキ目で仕上げられている。又、肩部から胴上部は、ヘラ削り仕上げ。
底部	不明	不明	不明	不明
色調	表　黒灰色 裏　灰白色、灰色	表　黒灰色 裏　灰色	表　青灰色 裏　灰白色	内外とも黒灰色
胎土質	精良な粘土を使用 堅緻	精良な粘土を使用 堅緻	精良な粘土を使用 堅緻	精良な粘土使用 堅緻
備考	陶邑製か？ 口縁内部一面に灰白色の自然釉付着	陶邑製か？ 口縁部内部は一面に自然釉がかかっている。	陶邑製か？ 口縁内面は一面に灰白色の自然釉付着	陶邑製か？ 胴部上段に灰白色の自然釉

土器番号		9	10	11	12
種類／摘要		甕	甕	小形甕	小形甕
法量(cm)	口縁径	24.0	25.6	20.6	17.4
	器高	不明	不明	不明	不明
	腹径	不明	不明	不明	不明
	底径	不明	不明	不明	不明
出土地区		6AX10	5DF8	5CT8	5DY20
口頸部	形態 文様 整形	○強く外反する口縁で端部は若干立上がる。端面は断面四角形を呈し、中央部がやや沈んでいる。端部直下に断面三角形のシャープな凸帯がある。	○強く外反する口縁で、端部はやや立上がりかけている。端面は、内面に向いた方は丸く仕上げられているが、外面はにぶい断面四角形を呈す。端部直下に丸みをもった断面三角形の凸帯を持ち、凸帯の下には、波長が短かく、比較的荒い波状紋が施されている。内外面とも水引きの痕が明瞭に残っている。	○外反する口縁部は端部で上下にふくれて終る。したがって、端面は仕上げの際に指による巾の広い沈線が出来ている。 断面は四角形に近く角はシャープである。 仕上げはすべて水引きによるものであり、痕が明確に残る。	○強く外反する口縁部端部は上端が立上がり、下端は少し下へ下る。したがって端面は中央部がやや凹を呈す。 端部直下に断面三角形のシャープな凸帯を持つ。仕上げは水引きのみ。水引き痕は明瞭。
肩胴部	形態 文様 整形	不明	不明	不明	不明
底部		不明	不明	不明	不明
色調		外　暗灰緑色 内　灰紫緑色	内外とも暗灰色	外　黒灰色 内　暗灰色	内外面とも淡青灰色
胎土質		精良な粘土を使用 堅緻	精良な粘土を使用 堅緻	精良な粘土を使用 (若干の砂粘を含む) 堅緻	精良な粘土を使用 やや軟質
備考		陶邑製か？ 内面の全部と外面端部及び凸帯上面に自然釉	陶邑製か？	口縁端面及び内部上部に灰白色の自然釉	陶邑製か？

土器番号		13	14	15	16
種類 / 摘要		器　台	杯　蓋	杯　身	杯　蓋
法量(cm)	口縁径 器高 腹径 底径	35.0 (器高)不明 (脚高)不明 (脚径)不明	14.6 4.4（？）	13.0 4.9	14.5 4.5（？）
出土地区		5DE8	6BE10	6BE10	6BE10
口頸部	形態 文様 整形	○口縁端部はするどく外反する。端面は丸みをもった断面四角形を呈し、中央部に凹線状の沈線がめぐる。体部は2段分を残すのみである。第1段は波状紋で飾られ、断面四角形にえぐりの残された凸帯で第2段と区切られている。第2段も波状紋を施し、第3段とは、凸帯で区切られている。	○口縁端部は比較的するどく外反する。端部内面には、内傾斜面を作り、内面との間には、比較的明瞭な稜線を示す。 端部外面は水引きの際の指頭による凹みが認められる。上部と口縁部の境いの綾線は鋭さに欠ける。上部はその⅔に荒いヘラ削りが施されている。	○口縁部タチアガリは、やや内傾する。端部は丸く仕上げられている。受部は厚く、やや上を向いて横にはり出す。体部の肉厚は厚く、水引きの痕がけん著である。体部外面のヘラ削り仕上げは底から⅔程度	○口縁部、体部の区別が明らかでない器形である。口縁部は端面丸くほぼ垂直に下る。 器厚は厚く、技術の劣弱を示す。 仕上げは体部の⅔にヘラ削りを施しているがこれも荒い、内面口縁部は水引きのみ。
肩胴部	形態 文様 整形	不明	不明	不明	不明
底部		不明	不明	不明	不明
色調		外　青灰色 内　灰紫色	外　黒灰色 内　暗灰色	外　暗青灰色 内　青灰色	外　茶褐色～黒灰色 内　暗黒灰色
胎土質		精良な粘土を使用 堅緻	精良な粘土を使用 (0.5～1.0の砂粒を含む) 堅緻	1.0～2.0砂粒を含む 精良な粘土を使用 堅緻	2～5㎜程度の砂粒多含した粗な粘土を使用 堅緻なるも気孔多し
備考		陶邑製か？ 杯部内面に自然釉		○胎土の断面は暗紫色	外面全体に暗黄褐色の自然釉

土器番号		17	18	19	20
種類／摘要		杯　身	杯　身	杯　蓋	杯　蓋
法量(cm)	口縁径 器高 腹径 底径	○　12.9 4.5（？）	9.2 4.1	27.4 1.4（？）	28.0 1.7（？）
出土地区		6BE10	5AU10	6BH10	5CT6
口頸部（体部）	形態 文様 整形	○口縁部タチアガリは薄く、内傾したもので端部は丸く仕上げられている。 ○受部はやや下り気味で横にはり出し、凹みは少ない。体部は薄く仕上げられているが、ヘラ削りは⅓程度しか施されていない。内外面とも水引き痕がけん著である。	○体部から、口縁部まではゆるやかに広がりながら直線的にタチアガル端部は丸く仕上げられている。器壁には水引き痕が明瞭に認められる。	○口縁部は一度外反し、すぐに屈折する。したがって口縁部と蓋中央部には明瞭な凹味ができている。端部は外を向く様な形の断面三角形を示し、受部の凹みは浅い。 ○蓋中央部は直線的に成形され、その大部分はヘラ削り仕上げがされている。つまみは欠損のため不明	○口縁部は短かく屈折して断面三角形を呈す。受部は19よりは深い。
肩胴部	形態 文様 整形	不明	不明	不明	不明
底部		不明	高台は貼付け高台であり底部全体は貼付けの後ナデ整形が施されている。	不明	不明
色調		外、内とも黒灰色	外　暗青灰色 内　青灰色	内外とも青灰色	内外とも灰白色
胎土質		2～5㎜砂粒を含む粗な粘土を使用 堅緻なるも気孔多し	精良な粘土を使用 堅緻	精良な粘土を使用 堅緻	良好 やや軟質
備考		残存部下端の状態から高杯（有蓋）の可能性もある。		口縁端部に灰黒色の自然釉が認められる。	

土器番号	21	22	23	
種類／摘要	杯　身	杯　身	鉢	
法量(cm) 口縁径 器高 腹高 底径	15.0 4.15	11.2 3.3	21.0 12.0 21.4 不明	
出土地区	6 B F10	6 B C10	6 A W10	
口頸部 形態 文様 整形	○口縁端部は横にナデて丸く終る。 ○体部は外傾しながらタチアガル。 ○高台は貼付け高台で仕上げは横ナデ。 ○底部は付高台より若干横にはってあがる、このため鋭い稜が認められる。	○口縁端部は横にナデて丸く終る。 ○体部は強く外傾する。 ○高台は付かず、したがって底部はヘラ起しの痕が著しい。	○短かい口縁部はやや外傾し、口縁端部は上端を平たくなでて仕上げをしている。したがって内側へ粘土がはみ出し、シャープな稜を作っている。	
肩胴部 形態 文様 整形	不明	不明	○肩部はせまく、丸みをもっている。 腹径は、口縁径とほぼ同様、やや広くなっている。	
底部	不明	不明	不明	
色調	内外とも青灰色	内外、青灰色	内外とも青灰色	
胎土 質	精良な粘土を使用 堅緻	精良な粘土を使用 堅緻	精良な粘土を使用 堅緻	
備考				

Ⅱ 石　　器

石器は量的には土器の量に比して極く少い。地区ごとの(1971年12月の瓜生堂遺跡報告を参照) 出土は表のとうりである。特に集中しているところや，特異な出土状況のものはみられない。ただ木棺内から出土した5ＣＴ８区の磨製石鏃（磨製石剣の折れを磨いたもの）のようなものはあるが，出土状況についての詳細は遺構についての報告の際にゆずりたい。前期の層からはほとんど剝片のみで，66，67年発掘のもの少量の他は，石器は全て畿内第３様式を主とする中期の層の出土である。石質は大阪市大理学部笠間太郎先生の肉眼による鑑定である。御多忙のおりに剝片にいたるまで見ていただき，御指導いただいたことを厚く感謝いたします。

1. 打　製　石　器

石鏃（図版40・１―16）

半欠していてわからないもの３個を除いて現在出土しているもの13個すべて凸基（山内清男博士・佐原真氏の用語に従う）であり，約半数の７個が鋭利な腸抉のある有茎式である。10，16も腸抉は不明瞭であるが有茎式としてよいだろう。重さは13個のうち５個が約４ｇ，３個が1.3ｇ，他は5.2ｇが２個であり，４ｇの群が目立っている。

石槍（図版40・17―24，29―31）

両側縁が並行に近く，先端が尖り，断面凸レンズ状の石槍が大・小合わせて８個ある。大は巾４cm強から小は巾約2.3cmまでであるが，破片がほとんどであり，完形品はない。小形のもの２例はややつくりが粗い。他に極く細身の小形のものと，側縁が並行せず菱形に近い形のものとがある。細身のものは巾ほぼ1.2cm，断面菱形，側縁は鋸歯状となっている。

石錐（図版40・32―34，102）

(32)は頭部と錐部が長さ２分の１ずつぐらい，断面４面体に近い錐部を細くつくり出している完形品。(33)は頭部のみであるが，錐部へ移行する部分がわずかに残っていて錐であることがわかる。あるいは欠けている他の一端も尖らせていたものかもしれない。(34)はほとんど加工痕のない剝片であるが，尖端から２分の１ほどの長さまで磨滅と縦方向の條痕が著しく，一種の錐であるとみなした。

尖頭部のある石器（図版40・25―28，図版41・40，42）

図版41，(40)は一側に礫面を残していて，また図版40，(27)は片面の調整が極めて大雑把であるなど尖頭器というには不恰好であるが，いずれも先端を尖らしており，一応尖頭部をもつものとして分類する。図版40，(28)は半欠品であるが，尖頭器の基部かと思われる。

側縁に刃のある楕円形石器（図版41・35，38，39，49）

両面を完全に剝離面で覆い，ほぼ楕円形に整えており，特に一側縁にていねいに整形した付刃がみられる。図版41，(49) は断面形が特に部厚くごろりとしているがこの類に入れた。図上半部の刃縁がひどく磨滅している。

柄部をつくり出している石器（図版41・47，48）

図版41，(47・48)は一見尖頭器風であるが先端に二次加工していない面をわずかながら残しており，おそらく側縁を刃として使用したものと思われる。ともに基部に全形に対して柄部と考えられるつくり出しをみせている。

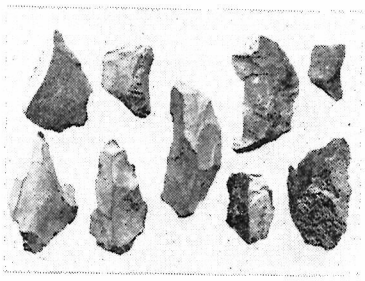
その他刃縁をもつ石器（図版41・36，37，43，44）

(43・44) はうすさ，大きさとも石鏃に近いが不整形であり，44は調整の仕方も石鏃のようでなく，縁辺を細かく整形している。37は凹みの部分が刃部になっている。

不定形石器および剝片（図版41・41，45，図版42・50—61）

不定形の剝片の側縁も調整剝離して刃としているものがある。原礫面を残している場合が多い。その他剝片は現在 274 個あるが，全く任意の不整な剝ぎ方を方をしていて，近畿地方に特徴的な横剝は特に顕著ではない。

以上に述べた打製石器および剝片はすべてサヌカイトであり，二上山春日山の産である。ただ66，67年度発掘のものの一部に春日山でなく柏ケ峯・石まくり辺のものかと思われるものがある。従来，近畿・瀬戸内で発見されるサヌカイトは四国讃岐および二上山の産であるといわれてきた。ところが近年石野博信氏によって，神戸甲山（かぶと）にも原石の産地があるといわれはじめ，新たに注目されることになった。しかし笠間太郎先生によれば甲山のものはサヌキトイドであって，サヌカイトとは明確に区別できるし，サヌキトイドは石器製作には不適当であろうとのことである。なおサヌカイトは原産地から自然力によって遠方まで運ばれることはなく，原産地がきわめて限られやすい。近畿一円のサヌカイトはそのほとんどすべてが二上山春日山産に比定できるという。顕微鏡下のプレパラートをみると素人目にもサヌキトイドとサヌカイトとは判別できるし，笠間先生は岩石学的にサヌキトイド製の石器がないことは98％確言できるとのことであるが，さらに甲山のものが石器製作に適しないことを立証するためには甲山産の疑いのある石器と二上山産サヌカイト



第5図　サヌカイトとサヌキトイド
（左の5片サヌカイト，右の4片サヌキトイド）

製の石器とを等量に資料として，岩石学的な比較を試みれば即座に結果がでるのである。この点を一つの課題としておきたい。

2. 磨製石器

石庖丁（図版44・77—94，96）

今回掲載するもの19個。すべて半月形直線刃ないし紡錘形であるが，完形品はない。ほとんど2孔のうち1孔と半分ぐらいのところで割れている。2孔を残すもの11個のうち孔間の間隔（器壁と器壁との）1.0cmから2.9cmまでで，1.3cmが4個で最も多い。7個に刃の裏側に刃の全域にわたって光沢がある。2個に刃の側に光沢がある。使用痕のはなはだしいもの4個があるが，必ずしも光沢のあるものと一致しない。しかし一致するもの2個があり，使用痕のないものは刃をとぎ直していると考えられるので，これは使用に関連する要素と思われる。使用痕もほぼ刃先から3cm，ちょうど親指で穂首を押えた辺りについていて，使用法は恐らく石毛直道氏論文（1968年）の第7図2に一致するであろう。しかし，使用痕と思われない刃に直角な條痕が，握った場合の手首よりの部分にも顕著にみられる2例があり，背部にも著しい打痕がある例もあり，これらは別な使い方をしているものと思われる。石質は77・不明。78・緑色片岩。79・黒色片岩。80・砂岩ホルンフェルス。81・緑色片岩。82・緑色片岩。83・緑色片岩。84・緑色片岩。85・緑色片岩。86・緑色片岩。87・緑色片岩。88・頁岩。89・流紋岩質凝灰岩。90・黒色片岩。91・凝灰岩質砂岩。92・凝灰岩質砂岩。93・凝灰岩質砂岩。94・緑色片岩。95・凝灰岩質砂岩。

大形石庖丁（図版44・95，97）

図版44，(97)は半月形外湾刃の半分だけ残っているもの。面の大部分が欠け去って，刃部の認められるのは端だけである。そのため詳しいことはわからない。図版44，(95)は三角形と思われるが半分を欠失している。一辺に片刃がつけられているが，あまり鋭利ではない。刃のない面の頂点近くに穿孔途中の小さな凹みがみられる。石質は，95・緑色片岩。97・緑色片岩。

蛤刃石斧（図版43・62，63）

(92)は典型的な太形蛤刃石斧であるが，刃縁と片側縁とに粗い打ち欠きが連り，一度欠損した部分を整え直そうとしたものらしい。(63)はやや小形で刃は直線をなしている。胴部に搗打痕がよく残っている。石質は62が砂岩ホルンフェルス。63がガブロ岩。（斑糲岩）

柱状片刃石斧（図版43・64）

全体の3分の2ほどを残して刃部は欠失しているが，断面の一辺をなしている扁平な面からみて片刃石斧である。頭頂部にはきちんと稜をつけている。石質は輝緑凝灰岩。

扁平片刃石斧（図版43・65，66，70・71）

(65)は極く小形のもの。刃のない側の面は半分欠け去っている。刃縁は斜めに研がれている。刃部では横に体部では斜めに研ぎ目が著しい。(66)は頭部の一部のみで詳細は不明であるが，よく磨かれている。(70)は1971年12月の報告に載せたものであるが図が不完全だったので再度実測した。(71)は半欠品であり，刃部が欠け目で覆われていて，完全に復元すればもう少し長くなるだろう。裏面も剝がれている。石質は65が砂質泥岩ホルンフェルス。66がホルンフェルス。70は砂岩ホルンフェルス。71は輝緑凝灰岩。

磨製石剣（図版43・67，68，69，72）

第4図　第6号方形周溝墓
木棺内石鏃出土状態

(67)は両面にしのぎをもつ石剣である。全周が欠けていて，さらに折れ目を研ぎかけた痕跡がある。(68)はしのぎを持つ石剣の先端部の折れであるが，折れ目を横に研いでいるので改めて石鏃として使用したものと思われる。第6号方形周溝墓の木棺内から出土した。(67)はやはりしのぎを両面に持つ石剣の茎部である。図の左側辺は断ち切ったように磨られている。(72)は完形のむしろ磨製石槍といえるような石器である。しのぎはなく扁平で，両側縁にわずかに面取りして刃としている。石質はサヌカイト，または古生層の頁岩。または黒色片岩とのことである。67は頁岩。68は未鑑定。69が泥岩。

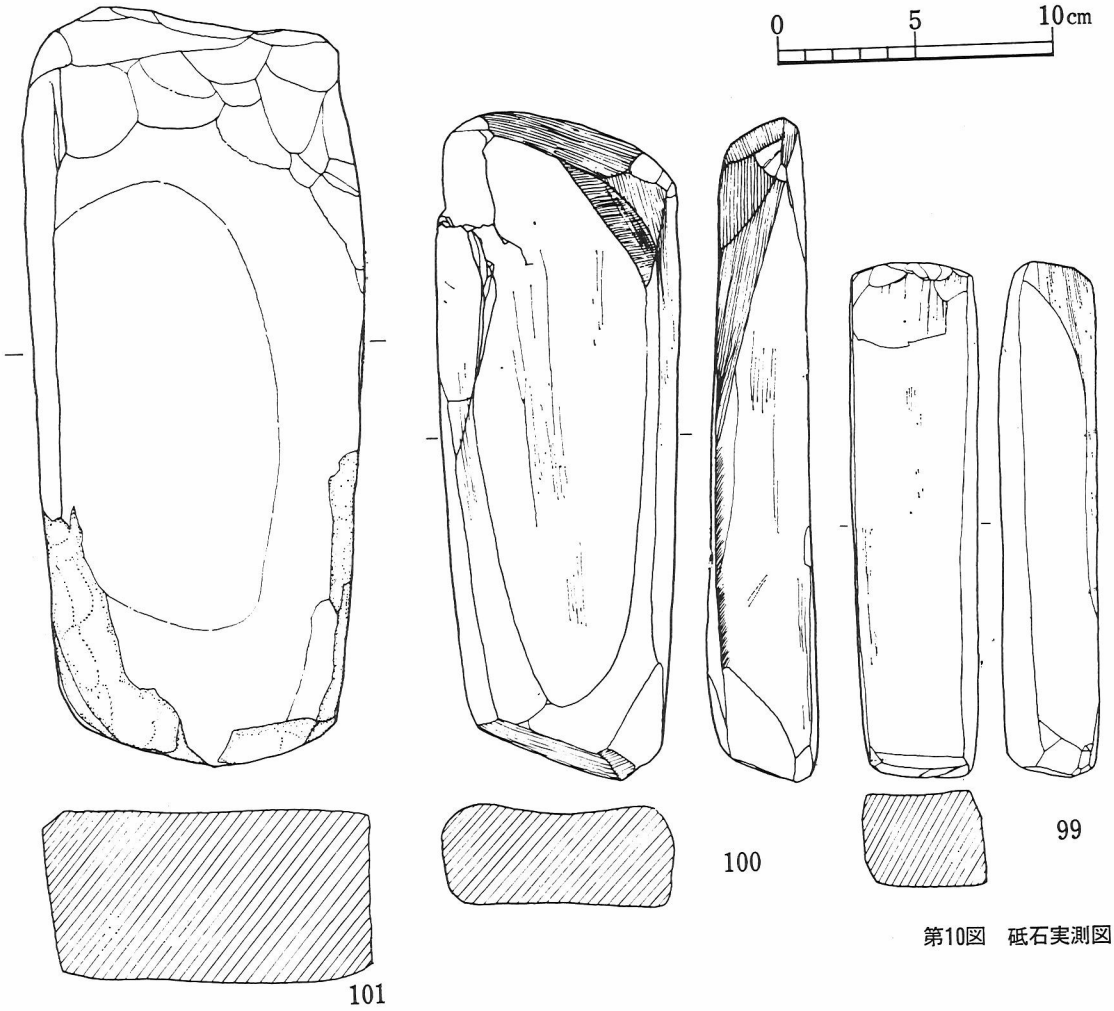
紡錘車（図版43・75，76）

そろばん形をした石製品と土製品とがある。どちらも穿孔が途中で止められているが，本来貫通するものであろう。土製品はボロボロと欠けやすく不整な形になっている。重さは石製品が128g，土製品は70g。石質は75が砂岩である。

砥石（図版43・第6図73，74，99，100，101）

非常に大きなものから小形のものまで，また石質では砂岩と泥岩とがあるが，特にどの種の石器を砥いだものかは不明である。石質は73・泥岩。74・泥岩。99・泥岩。100・泥岩。110・泥岩。

<四手井晴子>



第10図　砥石実測図

器種＼摘要	図No.	現存長 (cm)	最大幅 (cm)	厚み (cm)	重さ (g)	石質	地区
石鏃	1	3.6	2.5	0.55	4.0	サヌカイト	5DU9
	2	4.4	2.2	0.4	4.0	サヌカイト	東マンホール
	3	4.5	2.5	0.3	4.0	サヌカイト	5DY9
	4	5.5	2.2	0.4	4.1	サヌカイト	5GH1
	5	6.6	2.4	0.5	4.2	サヌカイト	5GK1
	6	3.2	1.7	0.25	1.3	サヌカイト	5CH23
	7	3.6	1.4	0.3	1.3	サヌカイト	5CH23
	8	2.0	1.7	0.35	1.5	サヌカイト	C2
	9	2.7	1.25	0.3	1.4	サヌカイト	3PP24
	10	3.1	1.2	0.3	1.3	サヌカイト？	C1
	11	3.3	1.1	0.4	2.5	サヌカイト？	表採
	12	4.0	1.3	0.45	2.8	サヌカイト	5CT8
	13	5.5	1.1	0.6	3.0	サヌカイト	東マンホール
	14	6.45	1.8	0.65	5.2	サヌカイト	5CT6
	15	5.7	2.2	0.4	5.2	サヌカイト？	C2
	16	5.7	2.1	0.75	8.9	サヌカイト	5CT8
石槍	17	1.7	2.9	1.3		サヌカイト	東マンホール
	18	3.0	4.1	1.65		サヌカイト	3OH24
	19	4.2	2.6	1.2		サヌカイト	西マンホール
	20	4.0	2.3	1.05		サヌカイト	3LY19
	21	6.4	2.4	1.0		サヌカイト	5DT9
	22	3.7	3.6	1.25		サヌカイト	3LY17
	23	6.7	2.6	1.2		サヌカイト	O4
	24	8.1	2.7	1.1		サヌカイト	3DK24
	29	7.5	2.4	1.1		サヌカイト	5DY9
	30	6.8	1.5	0.7		サヌカイト	3PI25
	31	6.9	2.8	1.2		サヌカイト？	O4
尖頭部のある石器	25	3.7	2.3	0.6		サヌカイト	C4
	26	3.6	2.5	0.4		サヌカイト	3PY15
	27	4.7	2.6	0.6		サヌカイト	5DF24
	28	3.3	3.2	0.6		サヌカイト	3LY19
	40	6.5	2.4	1.0		サヌカイト	表採
	42	5.6	4.0	1.8		サヌカイト	東マンホール
石錐	32	5.7	(錐部) 0.4	(錐部) 0.4		サヌカイト	5CH23

器種＼摘要	図No.	現存長(cm)	最大幅(cm)	厚み(cm)	重さ(g)	石質	地区
石錐	33	3.0	1.4	0.6		サヌカイト	5CT8
	34	5.0	(錐部)0.4	(錐部)0.3		サヌカイト	3LY17
	102	2.05	(錐部)0.2	(錐部)0.15		サヌカイト	3PT25
側縁に刃のある楕円形石器	35	6.9	5.1	1.5		サヌカイト	3PY17
	38	7.25	4.1	1.4		サヌカイト	3PT25
	39	8.1	5.1	1.0		サヌカイト	東マンホール
	49	5.7	2.7	1.85		サヌカイト	3PY6
刃縁をもつ石器	36	5.3	3.6	1.7		サヌカイト	3OH19
	37	4.2	3.2	0.9		サヌカイト	不明
	43	4.1	2.7	0.55		サヌカイト	表採
	44	4.4	2.4	0.6		サヌカイト	
柄部をもつ石器	47	6.8	2.4	0.9		サヌカイト	3LY17
	48	5.5	2.2	1.15		サヌカイト	3LY23
不定形石器及び剝片	41	8.85	5.6	1.6		サヌカイト	3OC24
	45	4.0	7.0	1.4		サヌカイト	3OD24
	46	4.0	5.5	0.8		サヌカイト	A4
	50	7.15	5.4	1.75		サヌカイト	5BZ
	51	6.0	6.1	1.2		サヌカイト	3LY11
	52	5.3	2.8	0.65		サヌカイト	3LY17
	53	6.8	3.1	1.4		サヌカイト	3PI24
	54	9.0	4.2	1.2		サヌカイト	5BX17
	55	8.2	4.3	2.0		サヌカイト	3LY19
	56	8.8	3.5	0.9		サヌカイト	3PY10
	57	7.8	4.8	1.1		サヌカイト	3PY18
	58	6.6	6.4	1.0		サヌカイト	3OC24
	59	7.3	5.5	1.1		サヌカイト	3PY24
	60	8.8	4.9	1.3		サヌカイト	3PY15
	61	4.0	4.1	0.7		サヌカイト	3LY19
蛤刃石斧	62	14.0	7.9	5.9		砂岩ホルンフェルス	5DP9
	63	8.2	5.0	3.4		ガブロ岩(班礪岩)	3LY17
柱状片刃石斧	64	7.1	3.8	3.6		輝緑凝灰岩	3OY24 3OV24
扁平片刃石斧	65	3.5	1.9	0.6		ホルンフェルス	3PY8
	66	3.1	2.7	0.9		ホルンフェルス	B10
	70	7.4	5.1	2.0		砂岩ホルンフェルス	5BW4

器種＼摘要	図No.	現存長 (cm)	最大幅 (cm)	厚み (cm)	重さ (g)	石質	地区
扁平片刃石斧	71	3.9	5.2	(現存部) 1.2		輝緑凝灰岩	5DX9
磨製石剣	67	5.7	3.5	1.1		ホルンフェルス	3PI24
	68	3.0	2.3	0.6		未鑑定	5CT8
	69	3.6	2.7	0.1		泥岩	3OB24
	72	16.0	3.3	0.6		サヌカイトor頁岩or黒色片岩	5DV9
紡錘車	75	5.0	5.3	3.85	128	砂岩	3LY
	76	4.7	4.6	2.9	70	(土製)	ボーリングピット
砥石	73	11.0	4.5	1.4		泥岩	5OH24
	74	9.8	3.5	2.7		泥岩	3OX24
	99	18.6	4.5	3.3		泥岩	5DY9
	100	23.5	8.6	3.3		泥岩	5DB8
	101	27.0	12.0	6.2		砂岩	5CH24
石庖丁	77	13.2	5.65	0.8		不明	東マンホール
	78	9.7	3.9	0.75		緑色片岩	3LY23
	79	7.4	4.1	0.7		黒色片岩	3PI24
	80	8.0	4.8	0.7		砂岩ホルンフェルス	東マンホール
	81	4.3	3.6	0.6		緑色片岩	3PY20—19
	82	8.7	4.1	0.75		緑色片岩	5CH20
	83	7.0	4.2	0.7		緑色片岩	5BW4
	84	4.3	3.9	0.7		緑色片岩	3PT25
	85	6.7	4.6	0.7		緑色片岩	3PI24
	86	8.1	3.9	0.7		緑色片岩	3LY17
	87	4.6	5.6	0.7		緑色片岩	3OU24
	88	7.2	5.0	0.65		頁岩	3PY11
	89	7.7	4.85	0.7		流紋岩質凝灰岩	O3
	90	5.7	2.55	0.6		黒色片岩	3PW25
	91	2.3	3.65	0.6		凝灰岩質砂岩	O3
	92	3.6	3.8	0.8		凝灰岩質砂岩	C1
	93	4.3	3.7	0.6		凝灰岩質砂岩	3OD24
	94	5.4	3.5	0.7		凝灰岩質砂岩	3PE24
	96	4.2	3.6	0.7		緑色片岩	O3
大形石庖丁	95	8.9	5.9	0.75		凝灰岩質砂岩	3PI24
	97	8.8	4.95	0.6		緑色片岩	

Ⅲ 木　　器

1. 弥生前期の木製品

昭和41年度に行なわれた第2次調査においては，弥生前期の木製品が多く出土したが，今回の調査では，ほとんどが弥生中期のものであった。ところが最近の5CI地区の調査において，前期の遺構が検出され，それに伴なって弥生前期の木製品が4点発見された。

鋤（図版45・7）全長12.6cm，一木作りの大きな踏み鋤である。鋤身は，長さ51.5cm，幅15cm前後の長方形に近い形で，上端から6cmのところが少しくびれている。鋤身の中心部には，縦に長さ39cm，幅1cm～2cm，高さ1.5cmの細長い突起を作り出し，またその突起に続けて上縁と，両側も幅約1cm，高さ0.7cmに削り出されている。中央部の突起と両縁との間，および先端部12.5cmは平らに削られている。厚さは，上部が2.5cm，先端部が1cmで，中期の鋤身の厚さ（0.5cm～1cm）に比べて厚い。裏面は滑らかである。この鋤身は，土離れを良くするためと，折れにくくするために，突起が作り出されており，使用時に，おける機能的な面までも考慮されたことがうかがわれる。柄は，長さ74.5cm，直径約3.5cmの太さで，末端部は，逆三角形を呈し，外縁を2～3cm残してくりぬき，把手を作り出している。把手部分は，使用効果を大きくするために，中央部がやや太めに作られている。

脚付鉢（図版46・13）　丸底浅鉢の体部に巾広い2本の脚がつけられている。高さ11.5cmの容器であり，一木作りである。鉢部は直径16.8cm，深さ4.3cmで厚さは，口縁付近で0.5cm，底が0.9cmである。内面は使用により，滑らかになっている。脚は鉢の体部に7.7cmの間隔で平行についており，高さ8cm，巾10.8cm，厚さ1～1.5cmである。この脚は上部の鉢に比べて，大きく，丈夫に作られているが，脚の下端が丸みを帯びているため，少し不安定である。

杓子（図版46・17）　柄が折れており，頭部のみが残存している。口縁の直径9.4cm，底部の直径4.2cm，深さ4.5cmと小形のものである。内面，外面とも，磨いたのではないかと思われるほど，滑らかで，形も丸く整っている。柄は，底から1.2cmのところより作り出されており，口縁近くで欠失している。折れ口からみると，柄の断面は，直径2cmの半月形である。

弓（図版45・6）　残存長，47cm，断面の直径2.2cmの，小型の丸木弓である。先端は蛇頭型を呈し，端から15.5cmは，一方が扁平に削られており，断面は半月形である。頭部を除いては，ほと

んど加工がなされておらず，樹皮を剝いだだけの状態である。先端部のくびれには，細い溝ができており，弦による磨滅ではないかと思われる。また先端部より，30cm 程のところに使用痕と思われる数余のくぼみが認められ，この部分が弓の把り部ではないかと思われる。

以上 4 点が弥生前期の木製品である。いづれも形がよく整っており，弥生中期の製品に比べて入念に仕上げられている。

2. 弥生中期の木製品

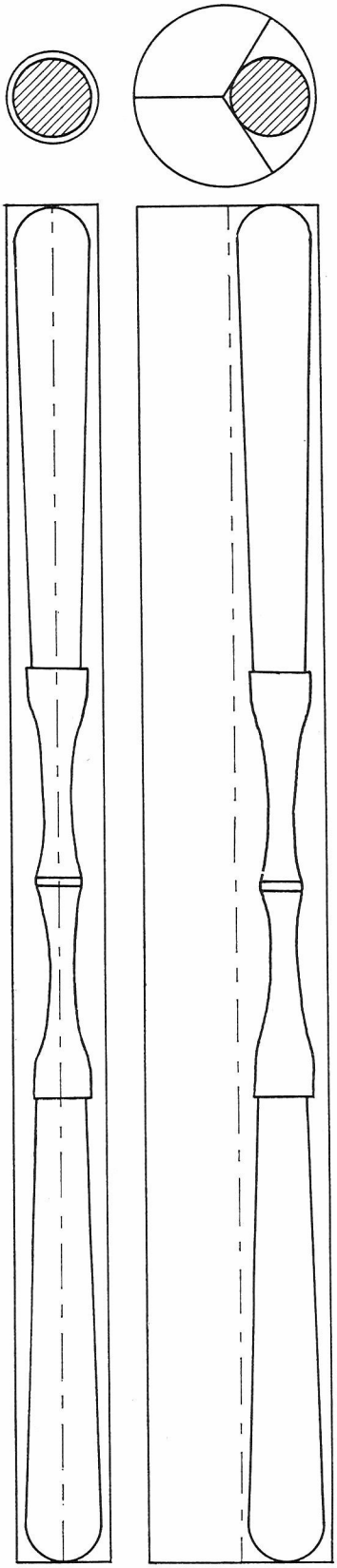
弥生中期の木製品の現存までの出土数は，鍬 9 点，鋤12点，杵 5 点，容器 5 点，柄 3 点，その他20点である。今回は鍬 2 点，鋤 1 点，杵 3 点，弓 1 点，容器 2 点，柄 1 点，その他 4 点を紹介する。

丸鍬（図版45・2） これは1971年の概報で紹介した小型丸鍬と同種のものである。長さ 16cm，巾 20.1cm と大きさもほとんど同じで，形も丸みを帯びた方形である。木取りも木目が鍬身の左右に走るものである。刃は木目に直交する両側のみにつけられている。左刃部の上方と，鍬の下端部は使用によりかなりつぶれている。孔は直径 3.4cm で，柄が，突起部を外側にした鍬身に対して 70° 前後の鋭角に挿入されるように穿たれている。

広鍬（図版45・3） この広鍬も1971年の概報で紹介した，舟形突起が上にせり出して頭部をなしているものと同種である。頭部が 16 cm 残存している。前回のものと比べて，舟形突起が，縦 11.6 cm，横 6.5cm，厚さ 2.4cm と非常に大きい。柄が舟形突起を外側にして挿入されたままの状態で出土しており，残存長 7 cmを測り，鍬身に対して，70° の鋭角である。柄の先端は舟形突起より 2 cm 突出しており，かなり磨滅している。

以上の様に，本遺跡では同種の鍬が各二点づつ出土している。木器は資料数が大変少ないので，明確なことは言えないが，これらの鍬は弥生中期の河内地方特有の形式ではないかと思われる。

鋤（図版45・4） 鋤身と柄が別々に作られたものである。柄は分離，欠失しており鋤身のみである。鋤身の残存長は 25.2cm を測り，巾 19cm，厚さは，中心部で 1.2cm，先端部で 0.5cm である。柄の挿着部は欠失しているが，鋤身の表面の中心よりやや上方に柄の先端を挿入する孔が穿たれている。裏面には，孔に続く溝が抉られている。鋤身の先端は少し焼失しているが全体から推定すると，長さ 30cm になるものと思われる。左側がひどく磨滅している。本遺跡では12点の鋤が出土している。そのうち11点は一木作りで，別



第7図　杵の木取模式図

作りは，この鋤一点のみである。

柄（図版45・5）　先端部を欠失しているので，何の柄であるか不明でるあ。残存長43.5cmで末端から10cmは断面の直径2.5cmの把部である。把り部以外は，巾4cm，厚さ3cmの断面四角であり，先端部は厚みの⅓が抉られており，平行な二又に分かれている。一方が欠失している。

杵1（図版45・12）　全長114.2cm，両端部の直径7.5cm，中央くびれ部の直径3.7cmを測る完形の杵である。両端の形は普通のものと変りないが，把りの部分は，中央部にそろばん玉状の突起を一つ有するものであり，その突起部から両端に向って約13cmの間が削られて，把り部となっている。また，この杵で注目すべきことは，木取の方法である。普通一般的な杵は，木心を杵の中心として使っているが，この杵の場合は，木心が認められない。したがって，比較的太い木をあらかじめ⅓に割ったものを原材として使用したものと思われる。このことは，先端部断面が，正円形を呈さず，平な面を有することから裏づけられる。材質は明らかではないが，木目などからみて比較的堅緻な木材を使用している。これも上述の木心を利用していないことと関係があると思われる。

杵2（図版45・10）　残存長63cm，先端の直径は7.3cm，くびれ部の直径は3.6cm。この杵にも中心と思われるところ，に削り出しがあるが，1ほど顕著ではない。形体は1と同じものと思われる。木取りは1，とは異なり一木の木心を中心とする杵である。そのために全体にひび割れができている。先端は使用により少しくぼんでいる。

杵3（図版45・11）　残存の長さ55.6cm，直径8.5cm，1，2よりは太い。くびれ部端の削り出しのところで焼失しており，把り部の形状は不明である。全側面は幅1～1.2cmで縦方向の削りがなされている。先端は使用により，直径4.5cm，深さ1.5cmに丸くくぼんでいる。木取りは2と同じく，木心が中心になっているため，ひび割れがはげしい。しかし，先端の磨滅からみると，割れにかまわず，使用されている。

以上のように杵には，木取りの方法が二通りある。①，完成品に近い太さで，断面円形の原材を用いる。②，太い丸太を，縦に3～4に分割した断面扇形の原材を用いる。

①は，木心が中心となるためひび割れがかなりひどい。②はひび

割れはできない。しかし，①は②と比して，製作が簡単であり，2，3の使用痕からみると，多少のひび割れは使用に際しては，支障がないものと思われる。そこで①の方が多くつくられたのであろう。

高杯杯部（図版46・14）　残存部から推定すると，内径9.4cm，で巾5cmで，外へ水平に広がる口縁をもっている。口縁の内側は0.7cm巾に削り出されており，外側には巾1.5cmの，たれが巡っているが外側へ反って変形している。一部分であるため，全体の様子は不明である。

高杯脚部（図版46・16）　脚の中心に，四角い孔を穿って，別木をはめこんだ，組み合わせ式の高杯である。すその周辺が少し変化しているが，ほぼ完形である。柱状部の直径4.3cm，すその直径10.5cm，高さ4.5cmである。別木は長さ5.6cm，上部の巾1cm，下部の巾2cmと，やや末広がりの方柱状である。この別木は柱状部の上端から1.5cm，突出しており。突出部に直径0.4cmの穴が穿たれ，細い棒が挿入されているが，棒はほとんど腐蝕している。元来はこの棒によって，杯部と脚部が接合されていたが，腐蝕により，杯部が分離，欠失したものと思われる。

第8図　蓋の文様

蓋（図版46・15）　厚さ0.5cmで，側面の幅が0.8cmほどになると思われる，扁平な木製品である。円の中心に直径5.1cm，厚さ0.2cmの丸い削り出しが半分残っており，その上に，長さ2.4cm，巾1.1cmの木葉型の文様が3枚刻まれている。他の半分にも対称の文様が刻まれていたのではないかと思われる。内面は黒ずんでおり，わずかな凸凹が認められる。この木製品は円型の削り出しの上に刻み文様があるので，蓋としたが皿としても使用できる。

下駄形木製品（図版45・9）（前回田下駄と称して紹介した木製品はその後の検討の結果，田下駄としては小さすぎて不適当と思い，下駄型木製品とする。）縦9.5cm，横10.6cmの長方形の板に四孔を穿っている。前回紹介した下駄形木製品と比べて，少し小さく，厚さも0.8cmとかなり薄い。また材質も異なっている。しかし孔の位置はほぼ一致するので，用途は同じと考えられる。

双孔木製品（図版45・8）　残存の長さ26cm，上部が欠損しており，上端の巾が9cmで，序々に狭くなり，先端が尖っている木製品である。先端に少し刃がつけられているが，全体的には厚さ1cmで，扁平である。欠損部に直径3cmと推定できる。2孔が残

存している。全体の形体，用途は不明であるが，木の材質からみると，農耕具ではないかと思われる。

不明品（図版45・4）　残存の長さ33cm，巾8.5cm，厚さ1.5cm，の板の上に，巾4cm，高さ5cmで断面四角の突起を作り出したものである。突起の中央部に巾2.5cm，深さ3cmの抉りがある。これは何であるか全く不明である。

（付）　前回槽と称して紹介したものは，その後の検討の結果，逆にして，椅子として使用する方が適当と思われるので，訂正いたします。

＜大西真由美＞

第13図　杵出土状態

あとがき

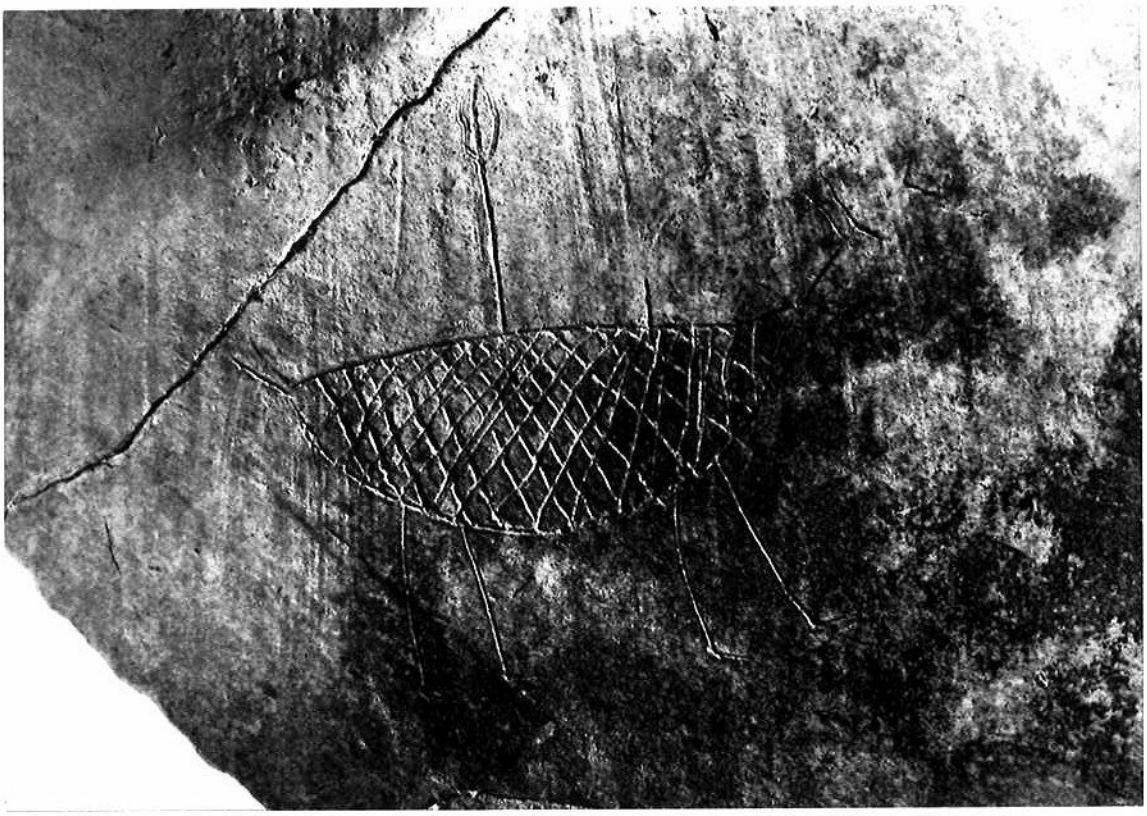
瓜生堂遺跡の存在すると思われる範囲は，東西約500m，南北1kmにおよぶが，大阪の動脈的な道路，中央環状線が，その中心部を南北に通りぬけており，また，東大阪市の下水処理施設としての小阪ポンプ場が遺跡内に存在することから，瓜生堂遺跡は，日々その姿を変えつつあり，さらに今後の開発計画も，着々と各方面より具体化の方向へ向かって，立案されているといわれる。

今回，この小冊子を出版することにしたのも，一つには，こういった状態の中で，再度瓜生堂遺跡という古代の大遺跡を，考え直してもらいたいという，調査関係者全員の希望があったからである。

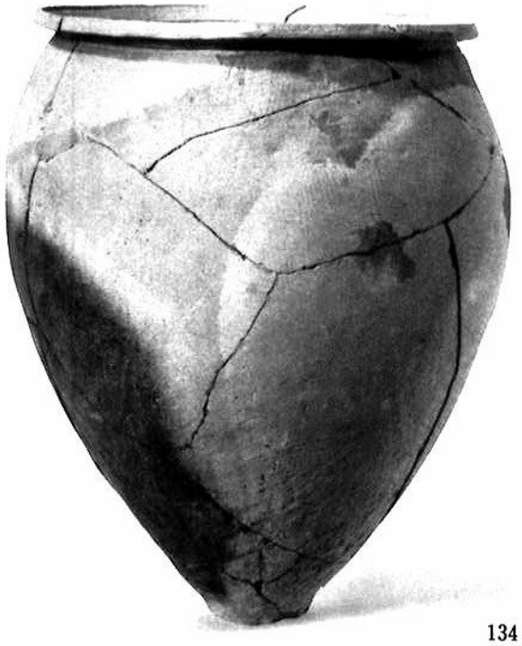
瓜生堂遺跡は，沖積平野に存在し，幾多の水害を受けながらも，強く生きた古代人の生活を，その埋没状態から知ることが出来るとともに，弥生時代の生活面が，地下数メートルという深いところに存在するため，当時の集落の姿が，より完全な状態で今日まで残っており，全国的にみても，極めて貴重な遺跡と言わねばなるまい。こういった点で，今後の瓜生堂遺跡の保存および顕彰は，より一層前向きな姿勢で行なわれねばならず，関係各方面の協力を心から願わずにはいられない。

最後に，上述のような強い願望をもって，また，一人の研究者の責務を全うすることをも目標として，調査関係者一同，完全な資料集の作製を意図したが，学問の域は無限であるため，完全の領域へは達するべくもない。したがって我々一同，より積極的な御批判，御教示を期待するとともに，今後一層努力を続けることを約して，あとがきに代えたい。

図　版



133



134

38

39

図版三　第二号方形周溝墓、第三号甕棺

36

37

図版四　5DY9地区出土壷棺

24

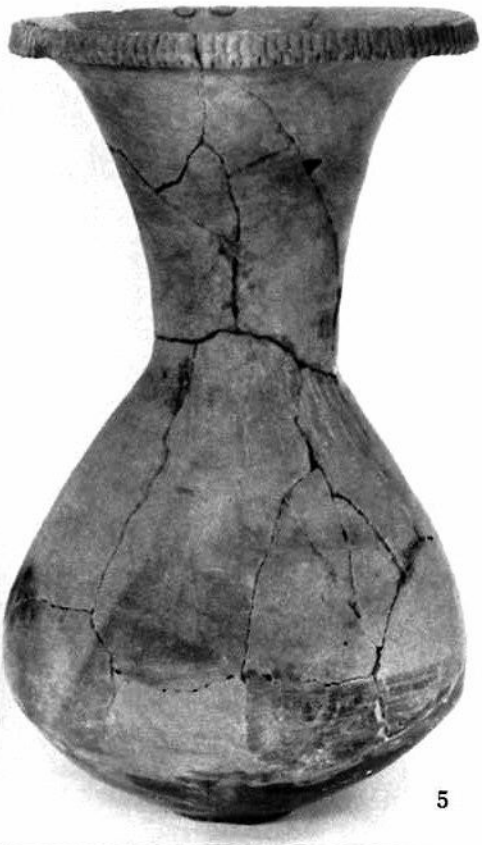
25

図版五　弥生式土器（壺）

3

4

1



5

図版六　弥生式土器（壷）

135

12

26

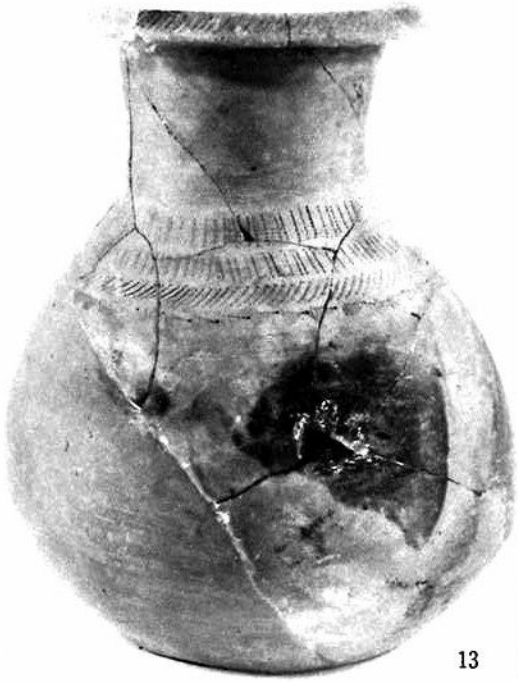
10

2

図版七　弥生式土器（壷）

27

11



13

図版八　弥生式土器（壷）

20

34

35

図版九　弥生式土器（壷、水差形土器）

28

136

33

23

22

21

図版一〇　弥生式土器（鉢）

49

55

52

79

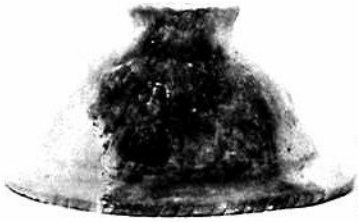
75

53

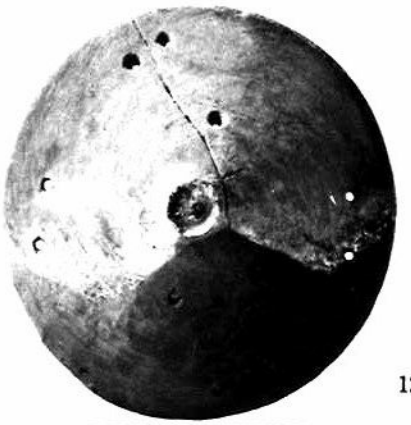
138

137

図版一一　弥生式土器（蓋、台付鉢）



120



121

68

69

58

72

139

図版一二　弥生式土器（高杯、台付鉢）

66

65

140

64

60

62

図版一三　弥生式土器（甕）

92

103

141

142

109

113

95

図版一四　弥生式土器、古式土師器

127

128

129

131

130

132

124

126

123

1

図版一五　古式土師器、土師器

6

13

8

12

3

11

図版一六　須恵器

4

2

24

8

25

19

15

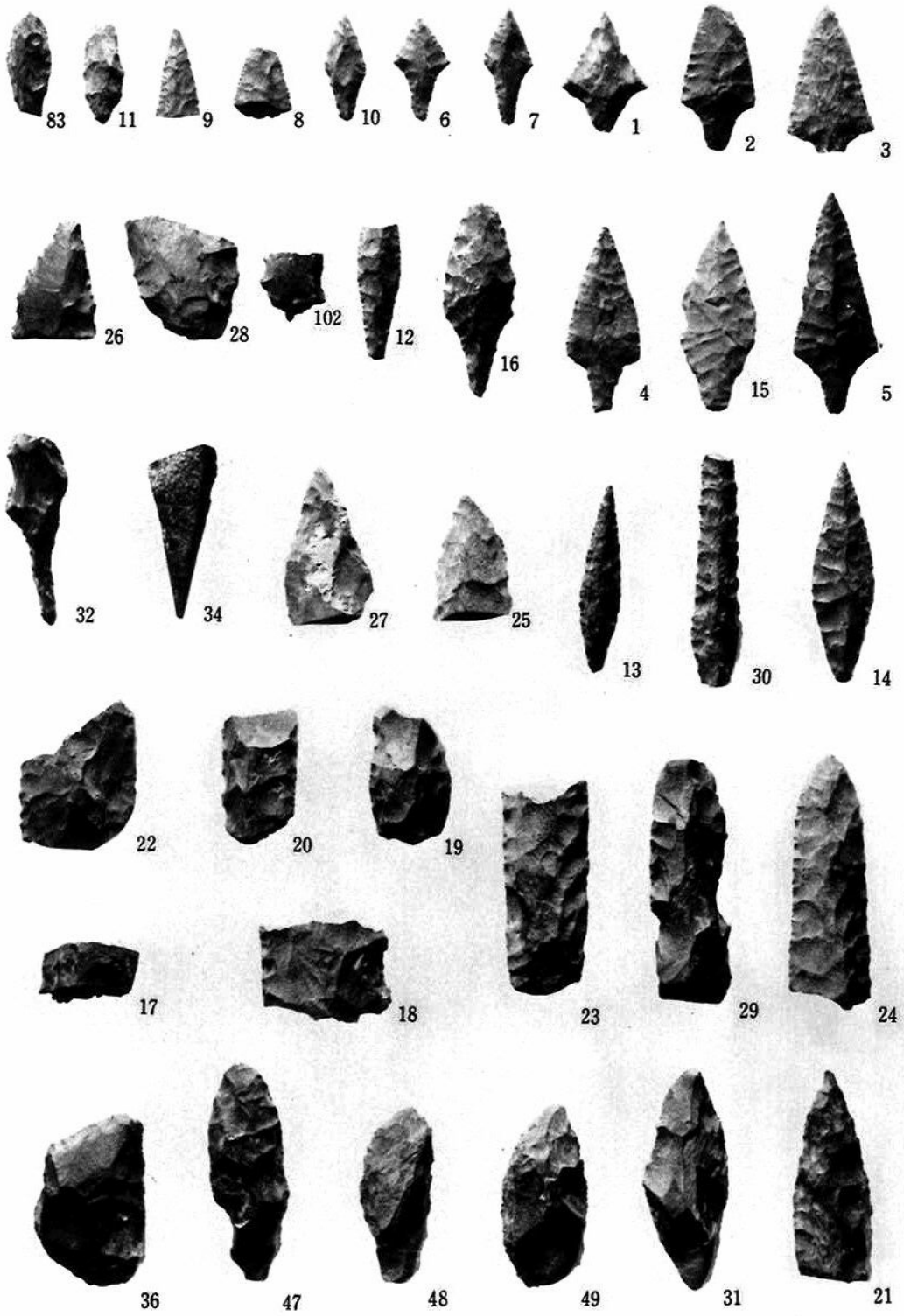
21

22

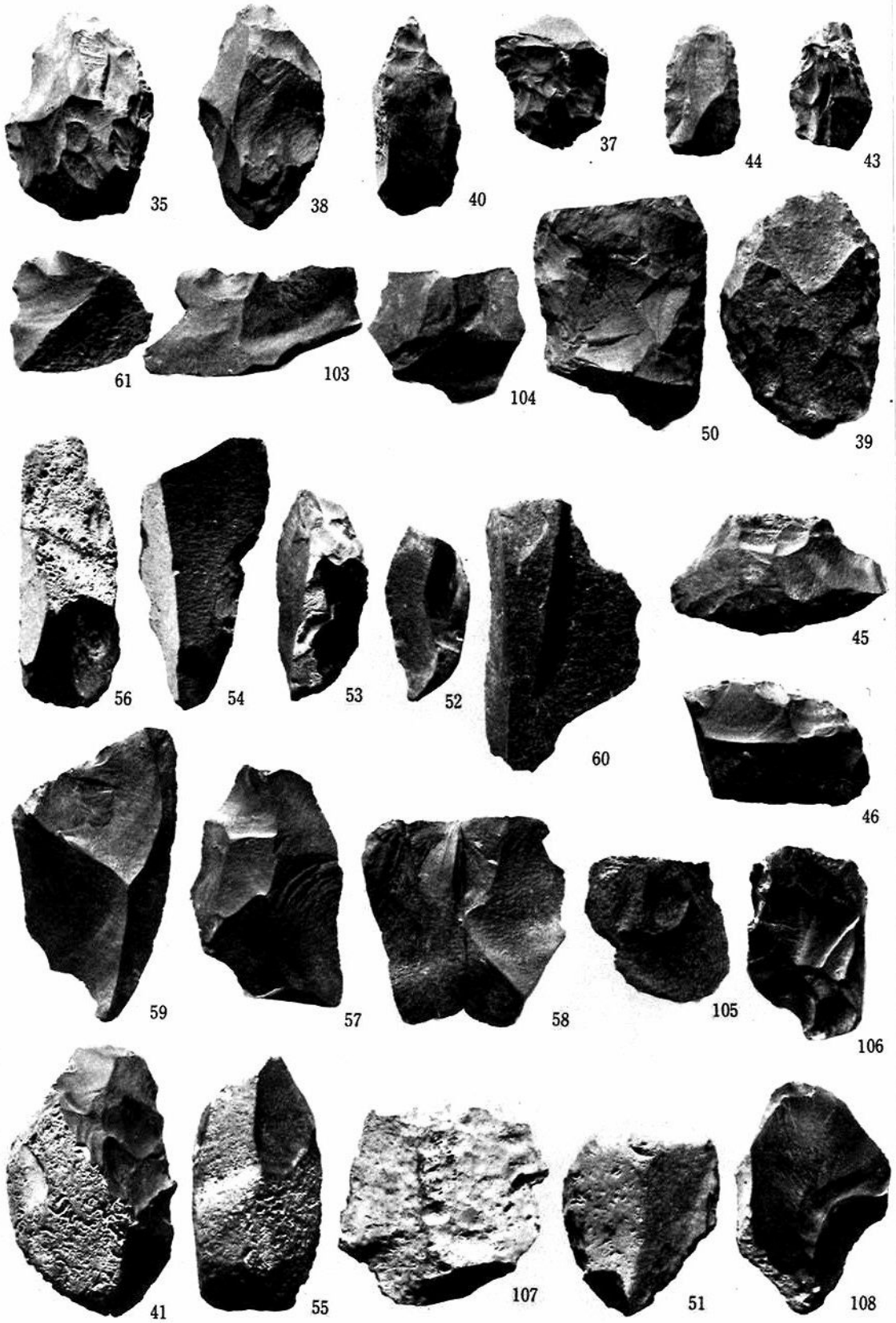
23

18

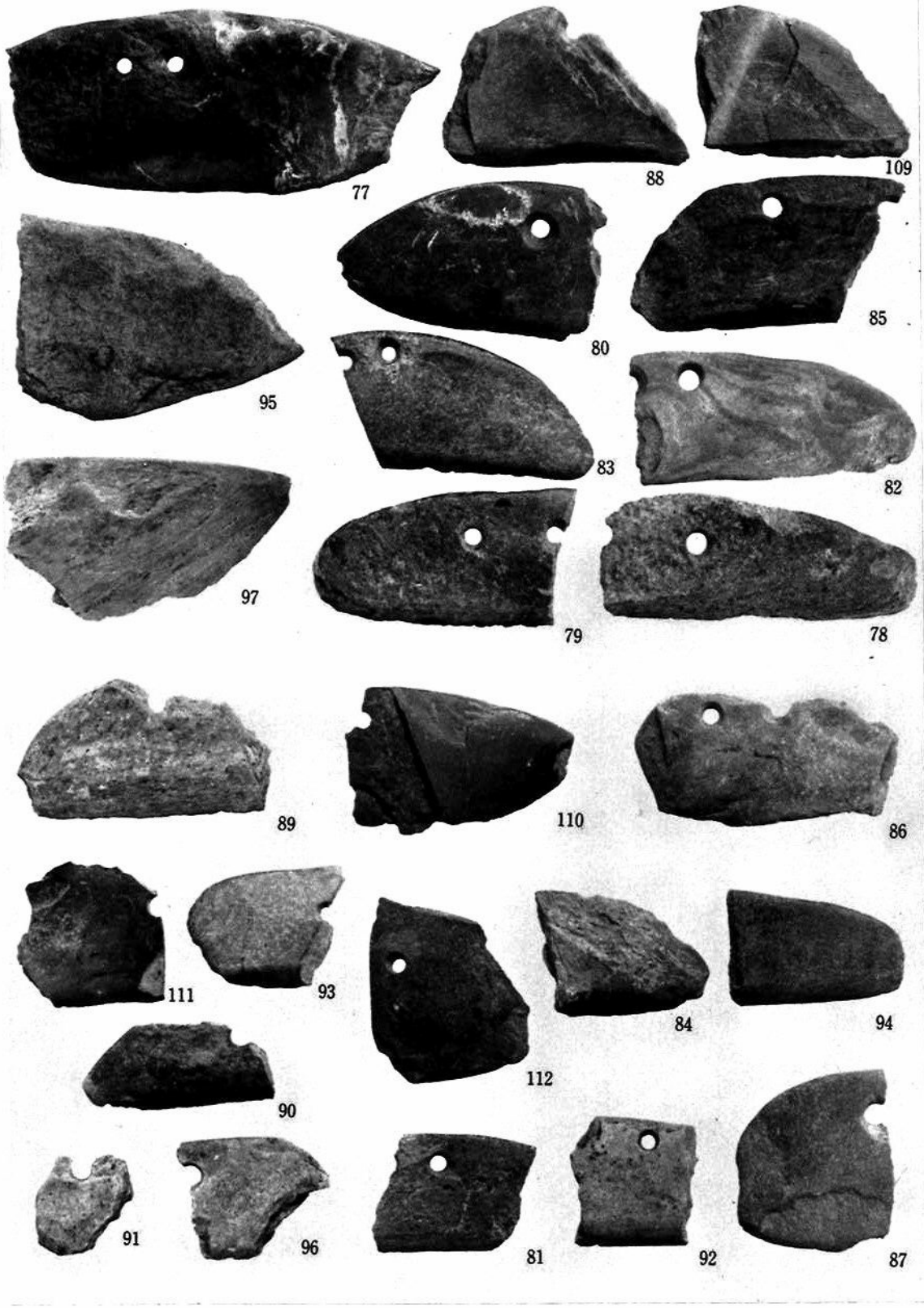
図版一七　打製石器（石鏃、石槍、不定形石器）



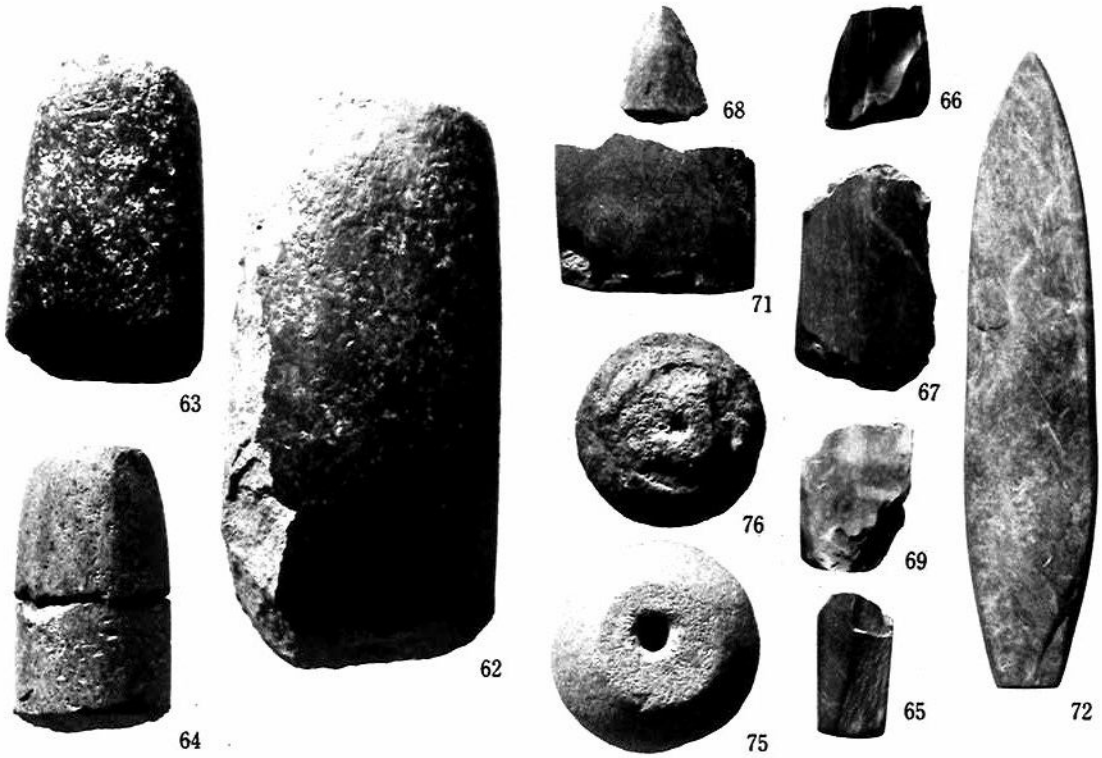
図版一八　打製石器（否定形石器、剥片）



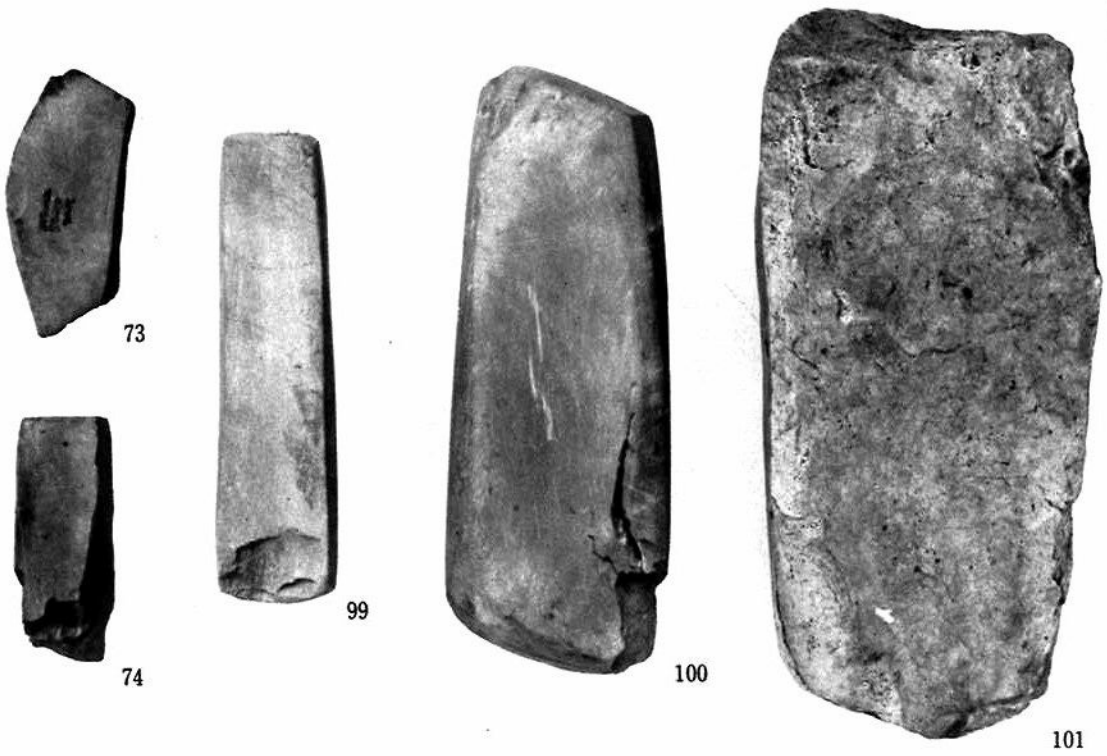
図版一九　磨製石器（石包丁）



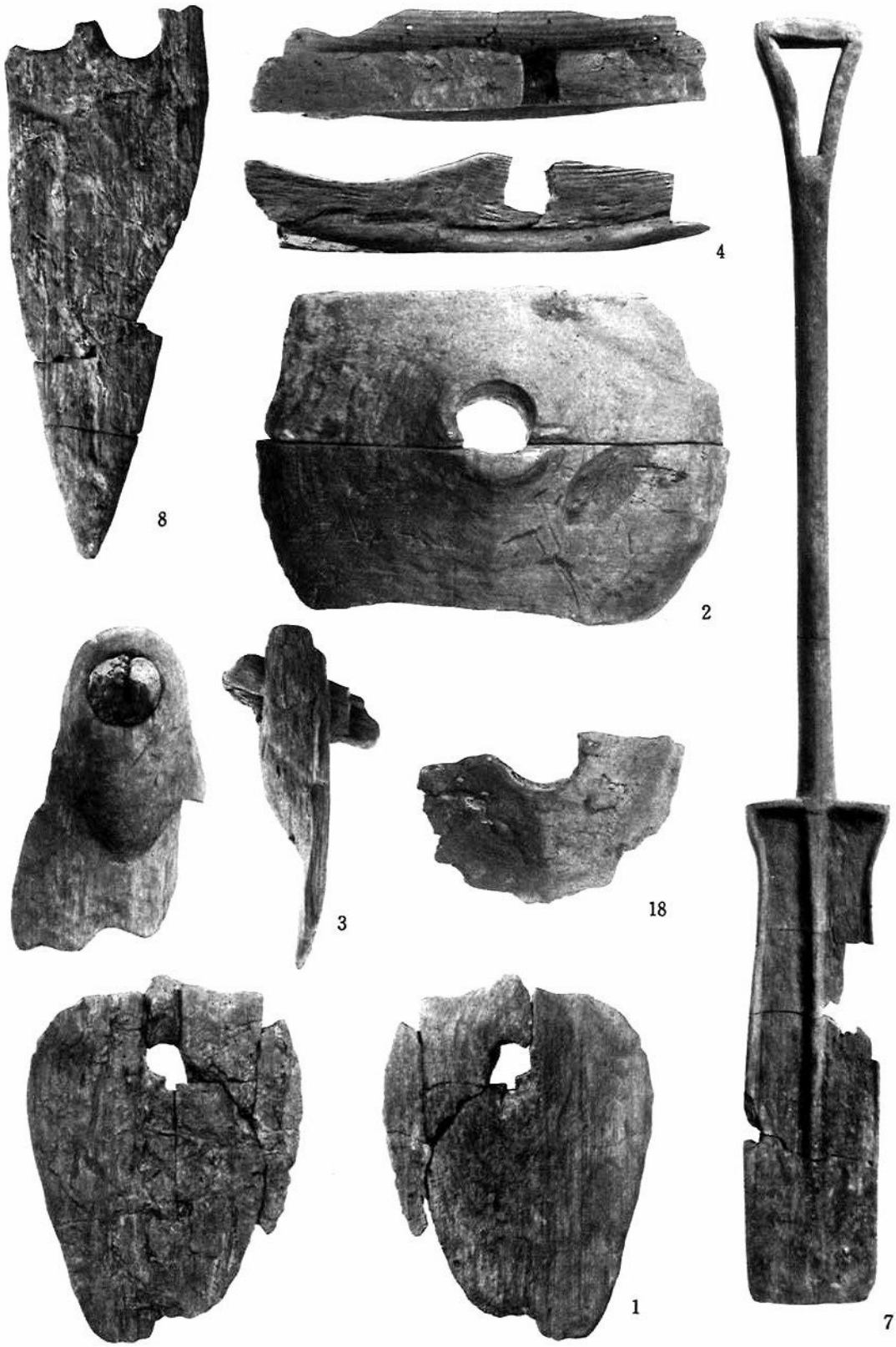
図版二〇　磨製石器（石斧、石鏃、石剣、紡錘、砥石）



砥石、



図版二一　木器（鋤、鍬、双孔木製品、用途不明品）



図版二二　木器（杵、柄、弓、下駄状木製品）

図版二三　木器（台付鉢、高杯、蓋、杓子）

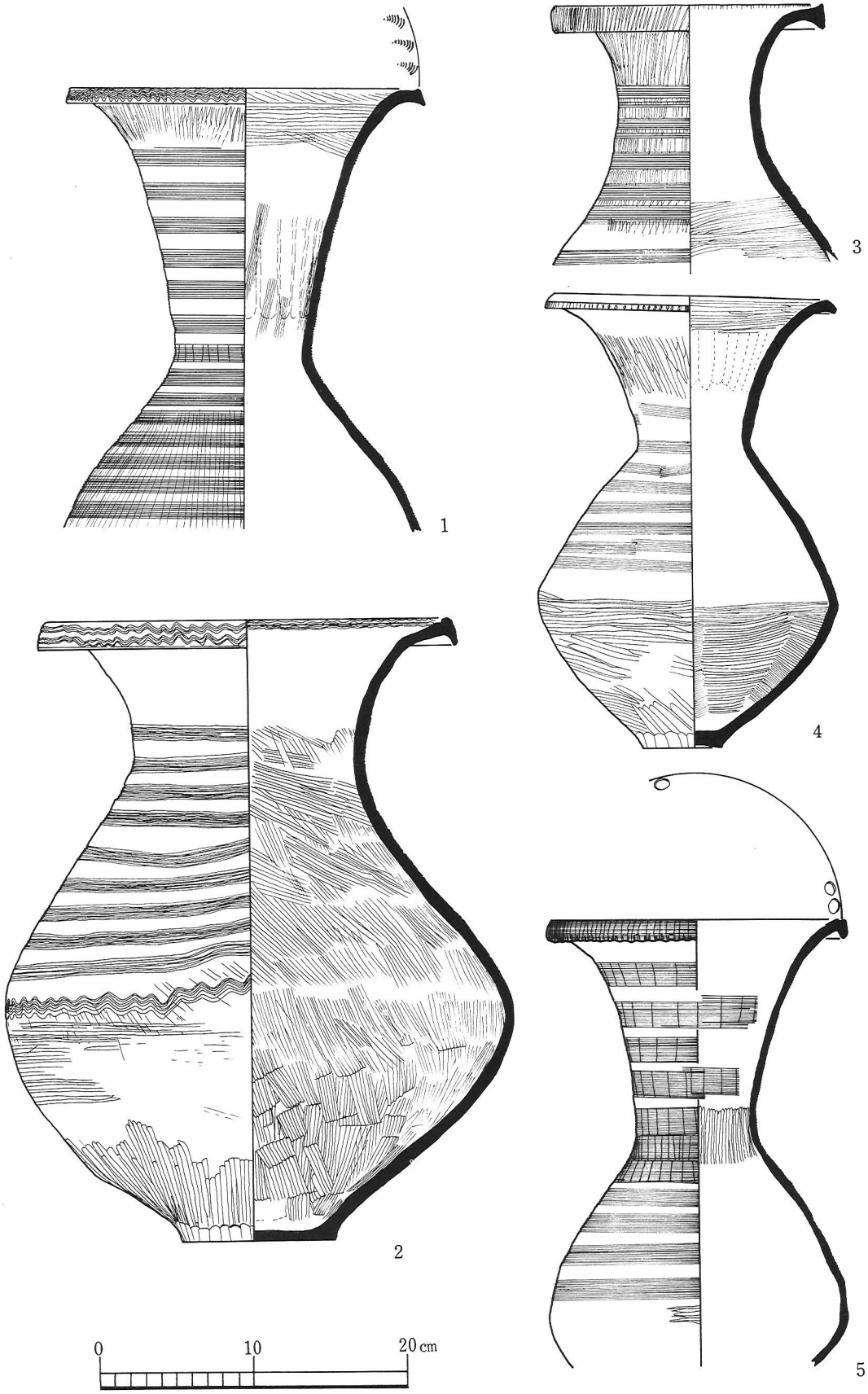
13

17

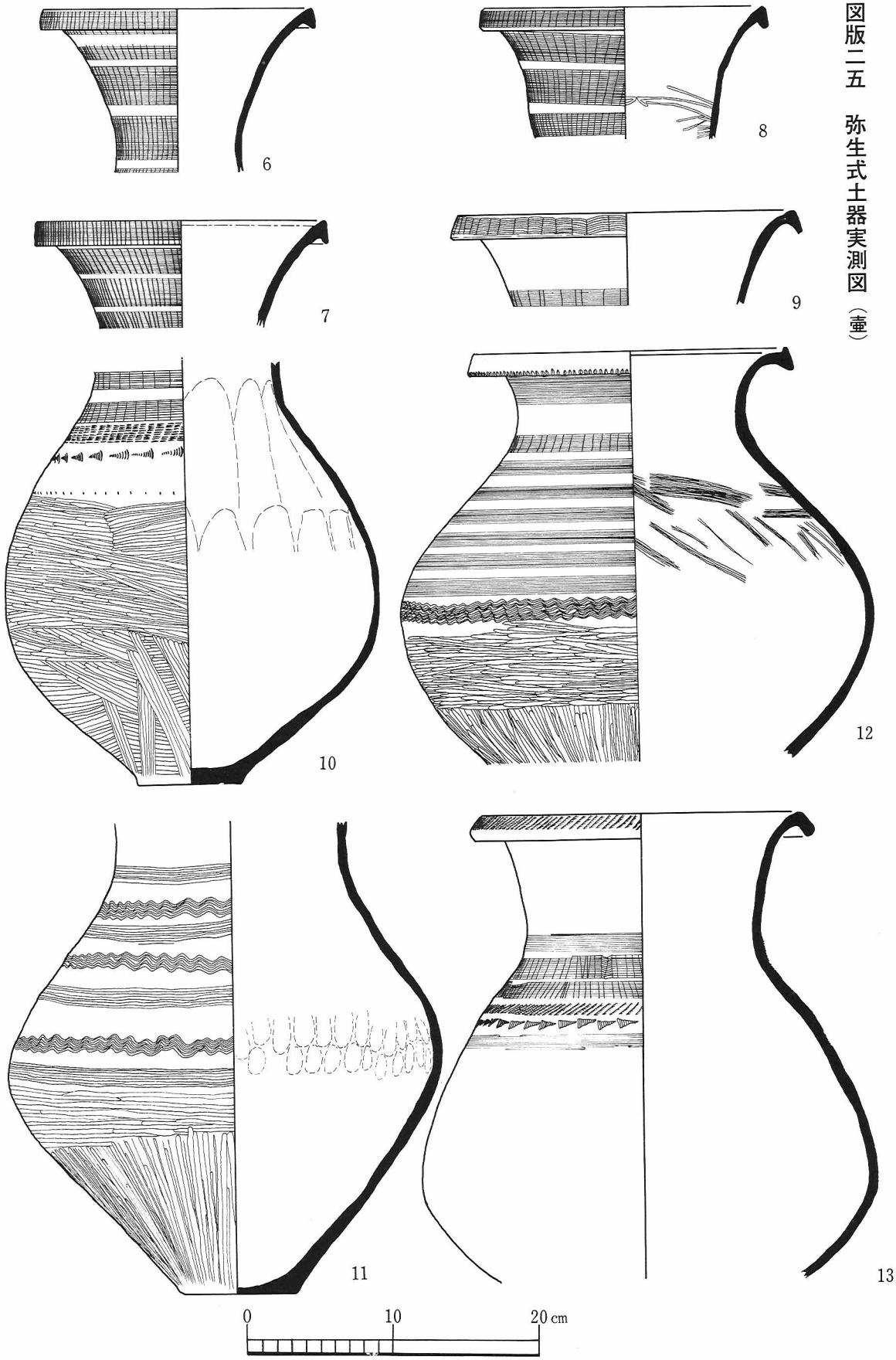
14

15

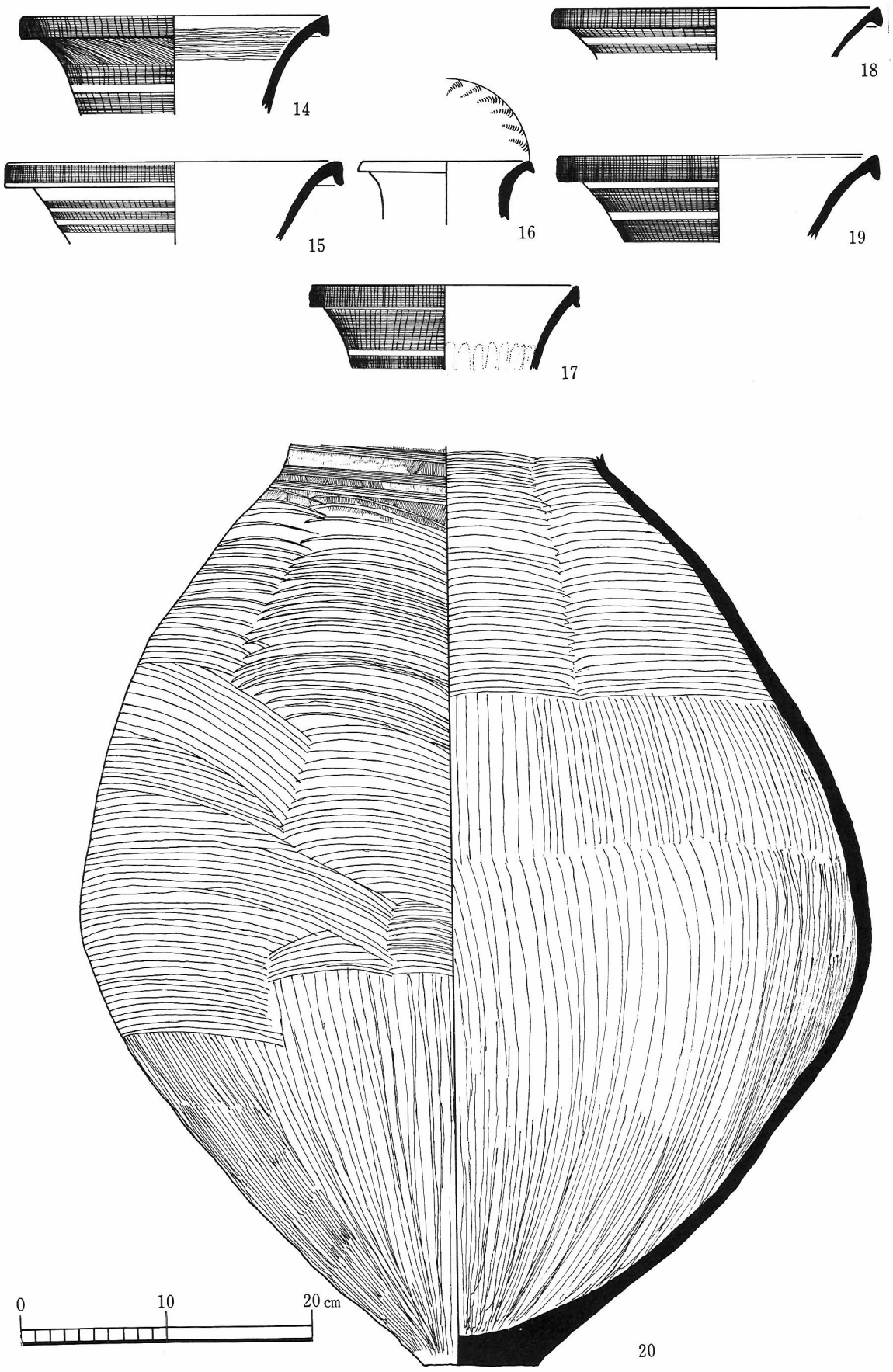
図版二四　弥生式土器実測図（壷）



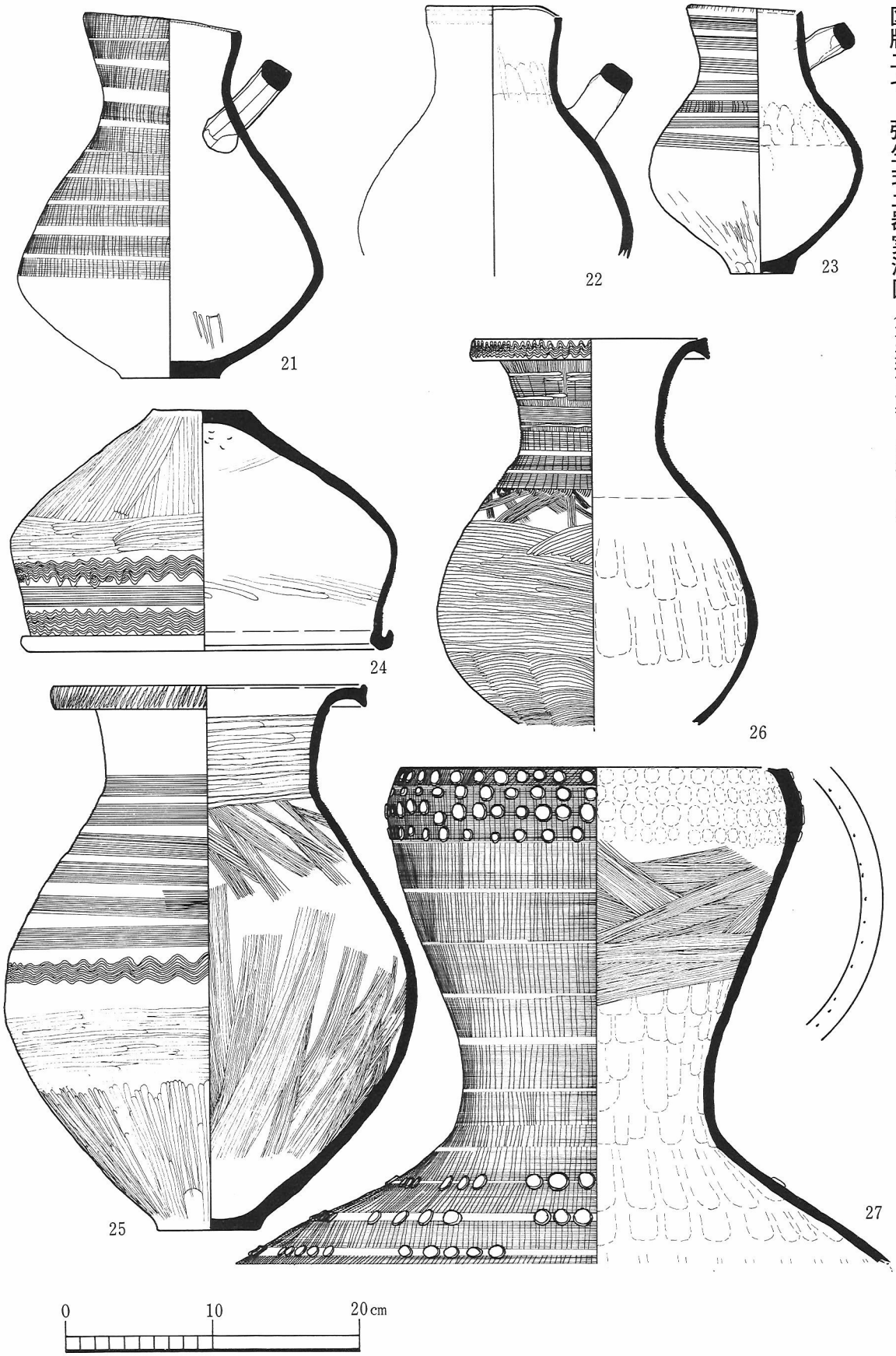
図版二五　弥生式土器実測図（壷）



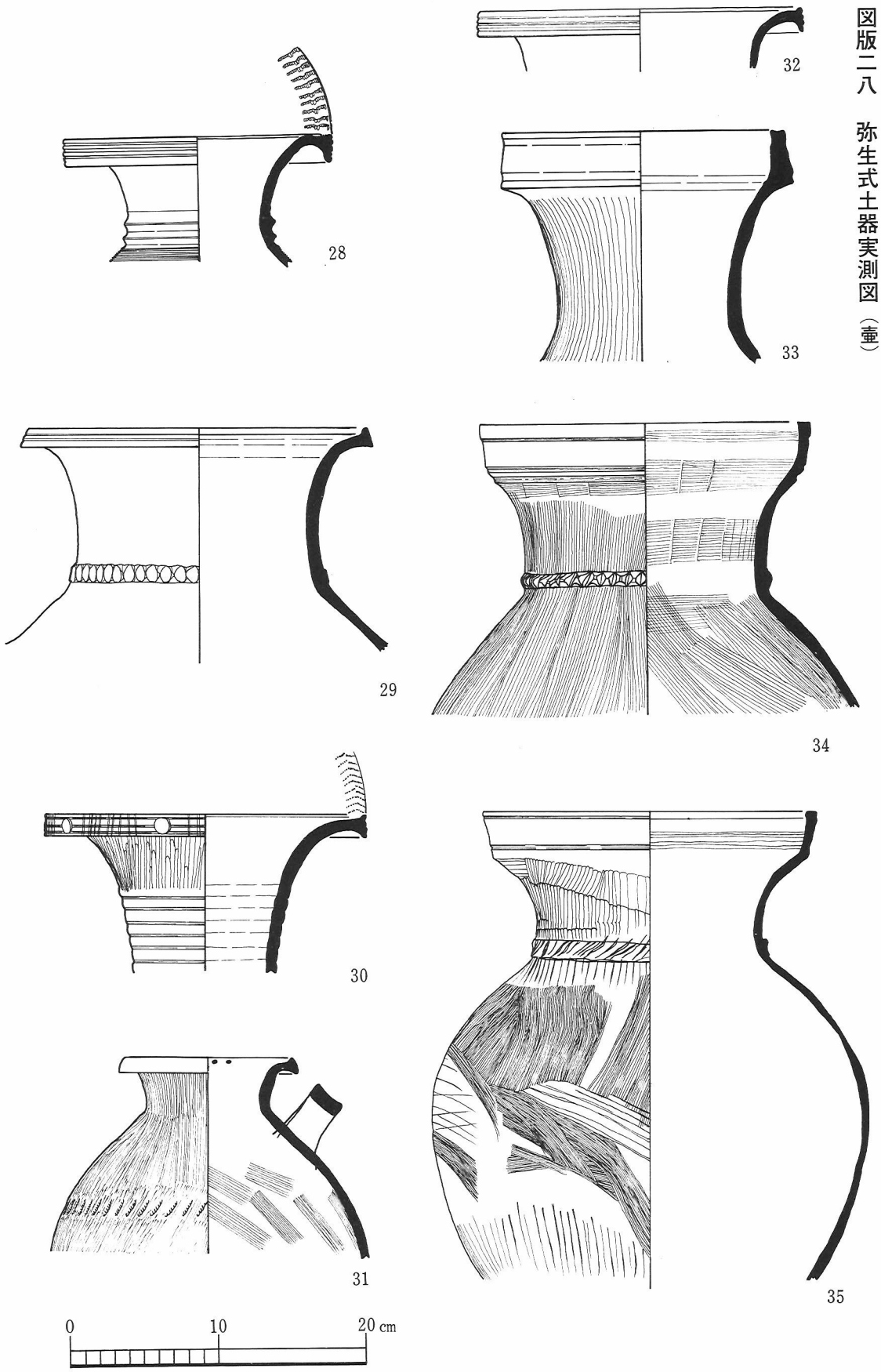
図版二六　弥生式土器実測図（壷）



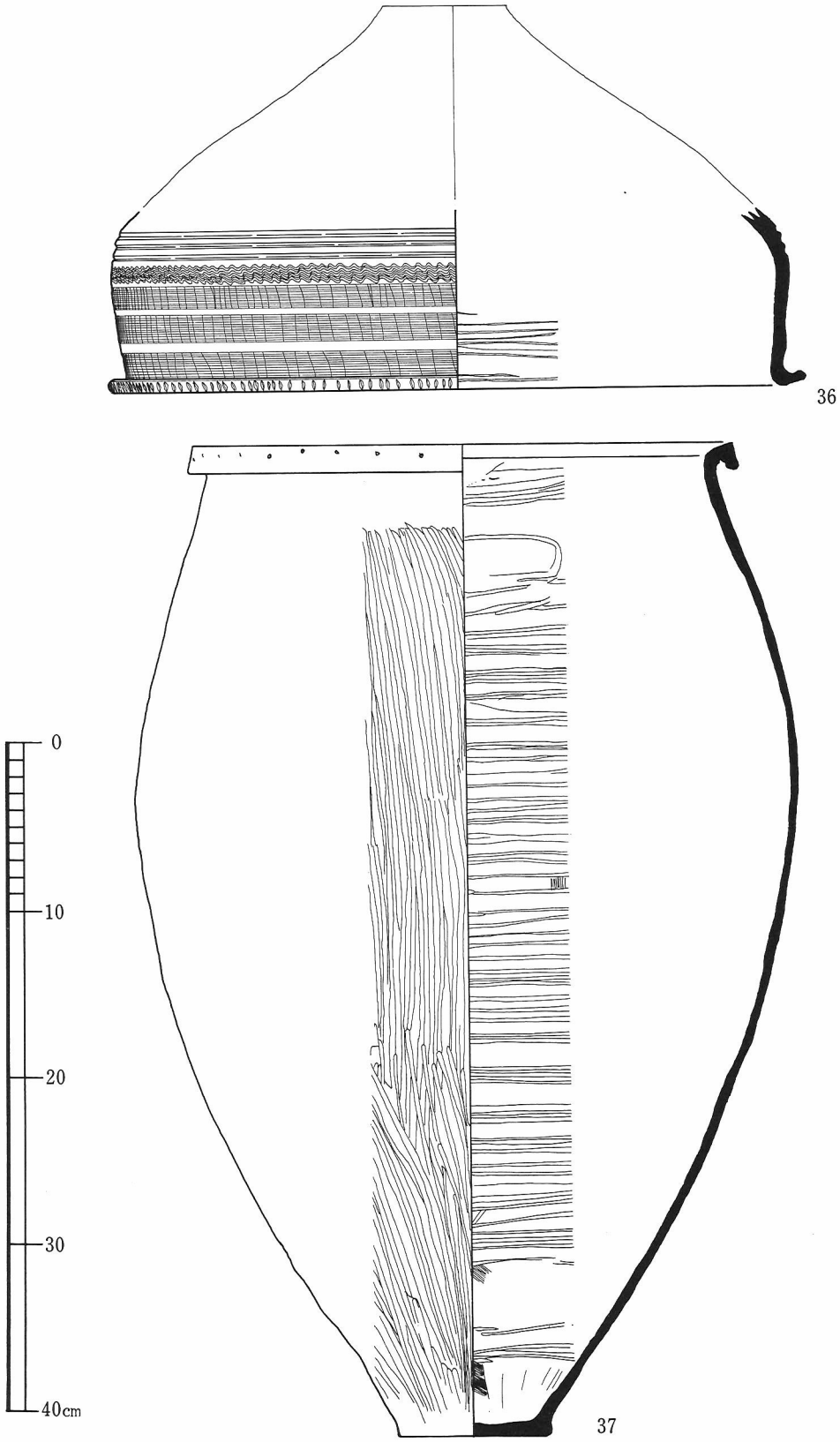
図版二七　弥生式土器実測図（水差形土器・壷棺・壷）



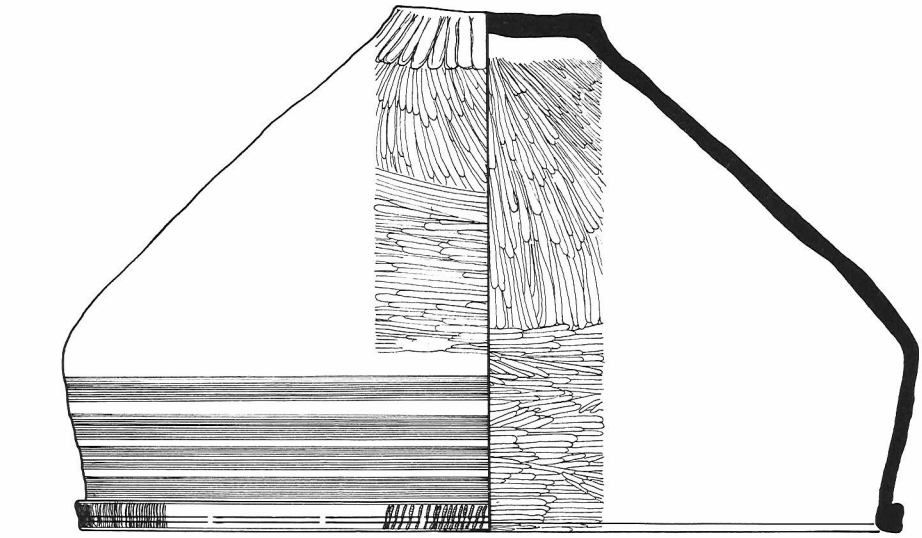
図版二八　弥生式土器実測図（壷）



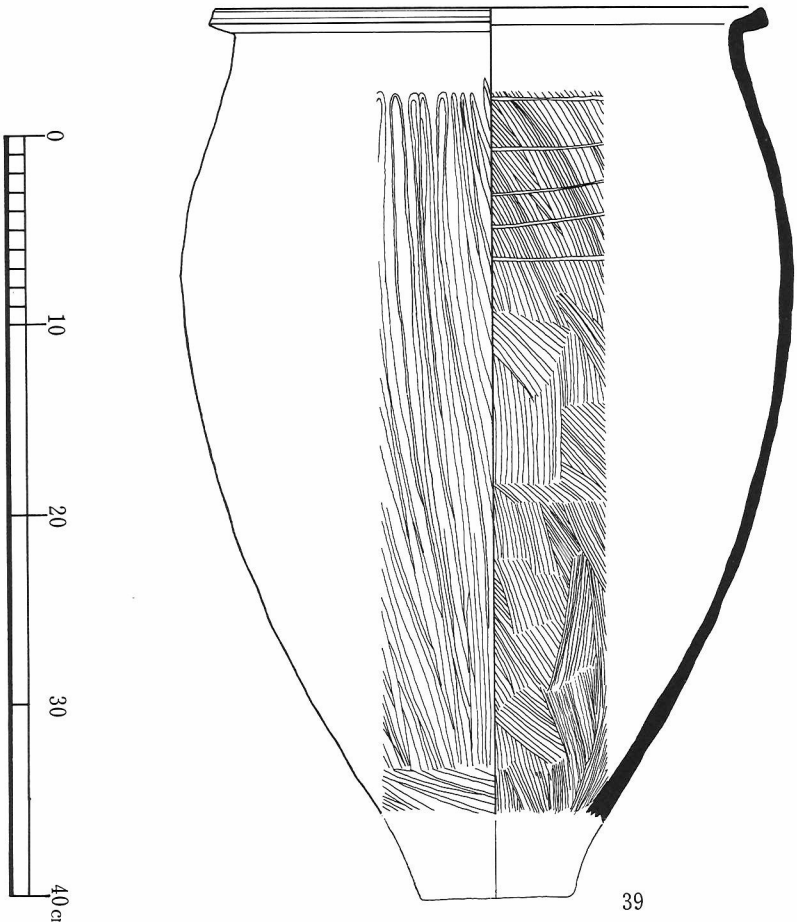
図版二九　第二号方形周溝墓第三号甕棺



図版三〇　第二号方形周溝墓第二号甕棺

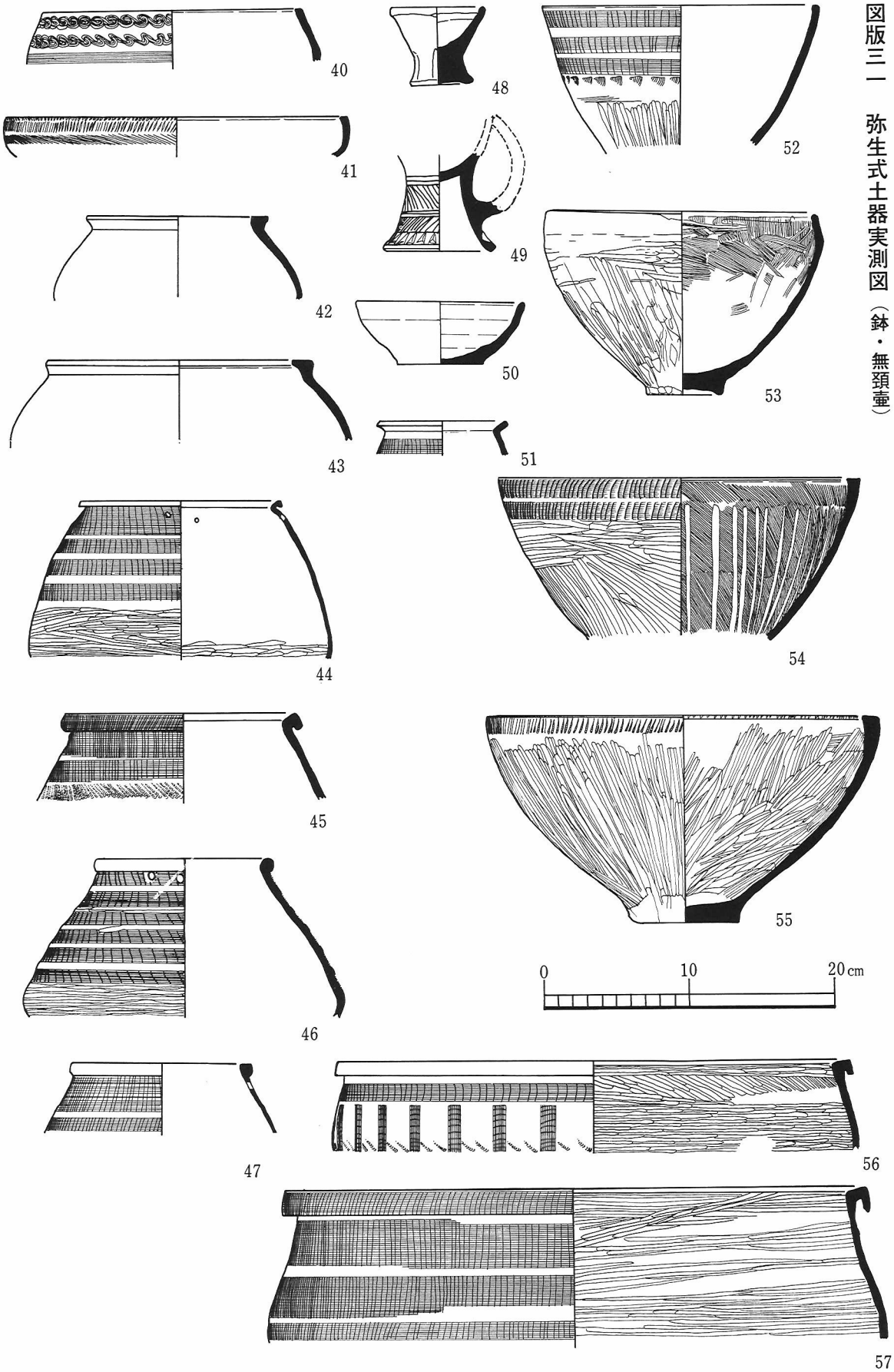


38

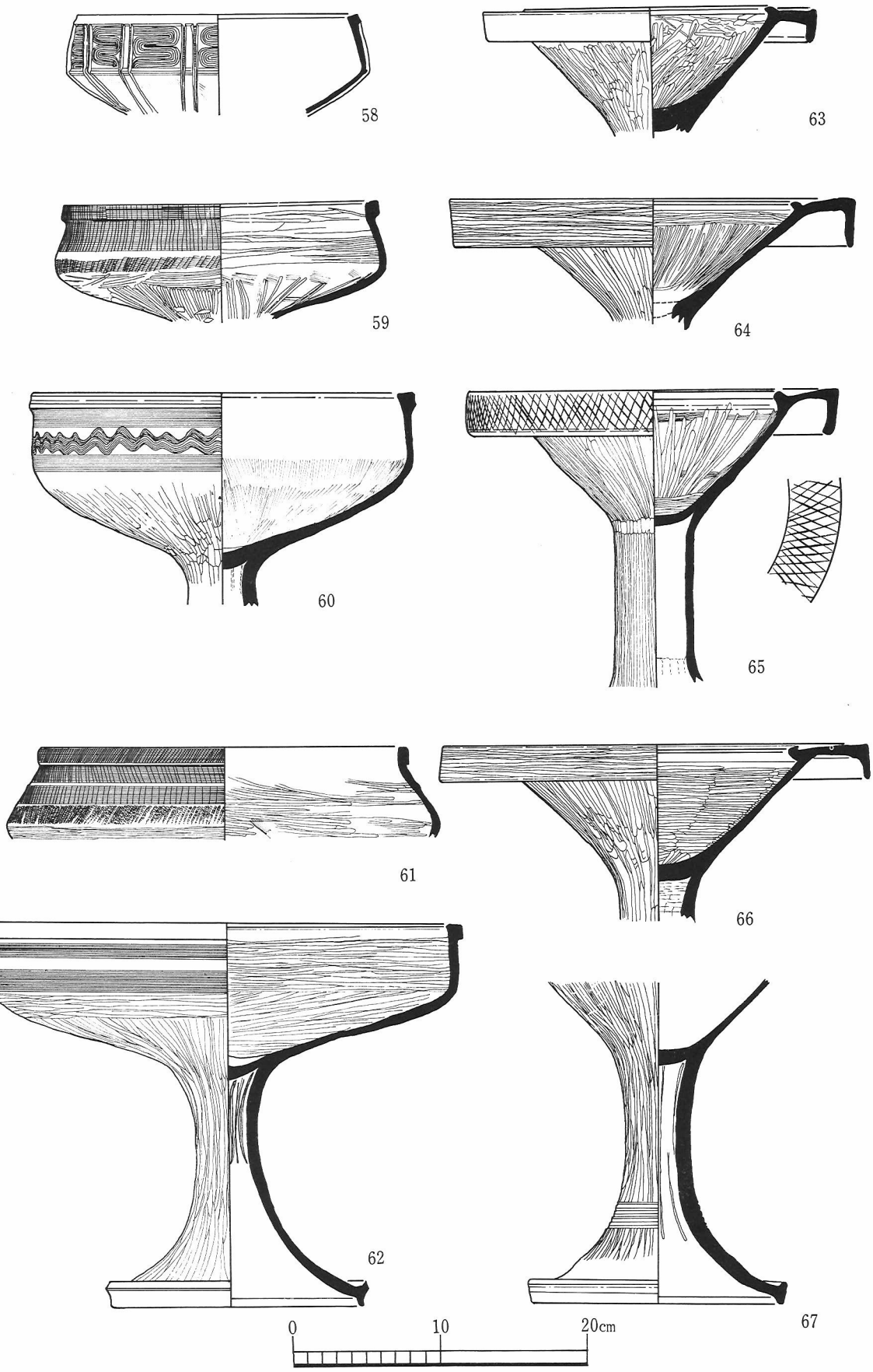


39

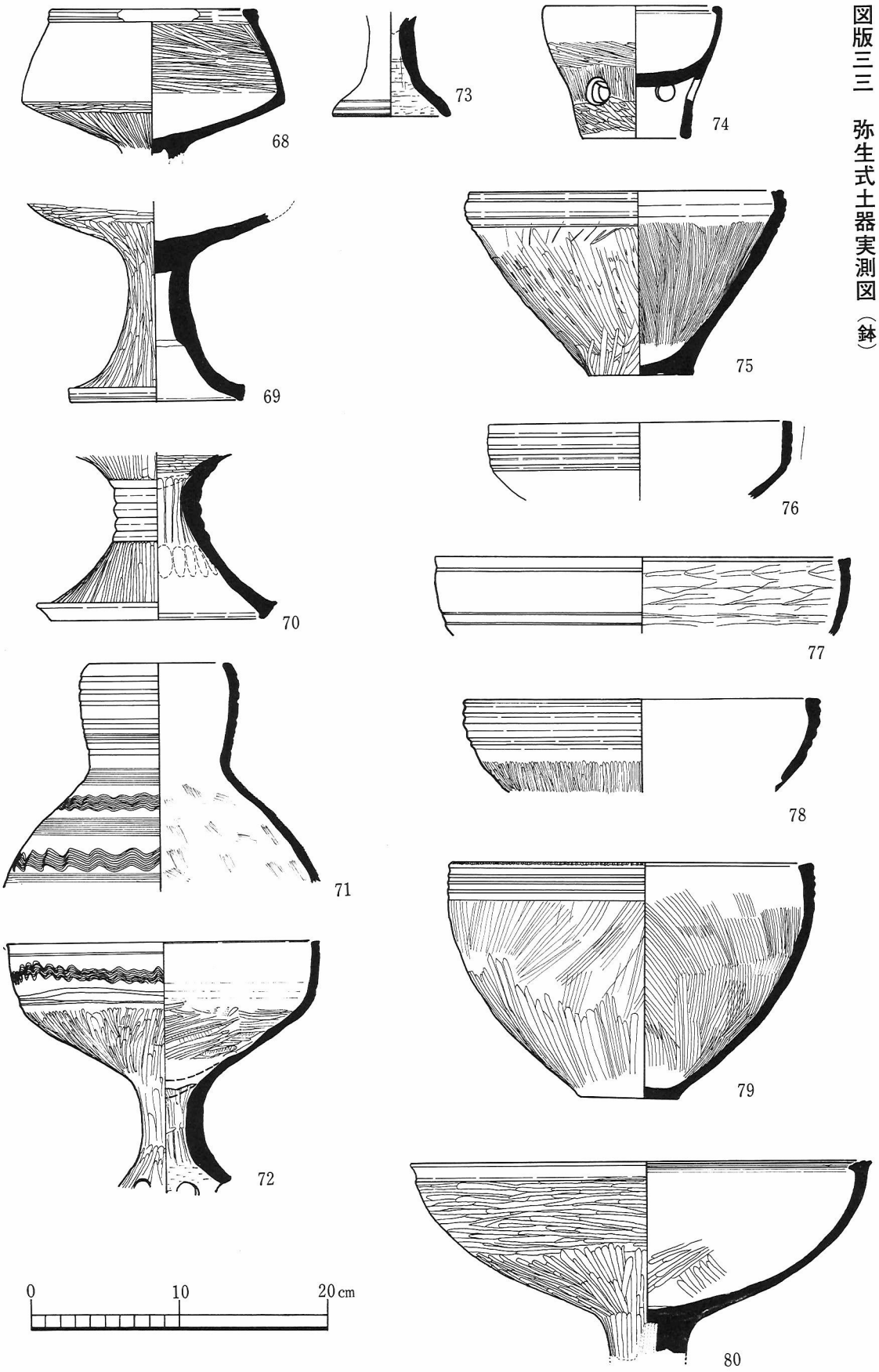
図版三一　弥生式土器実測図（鉢・無頸壺）



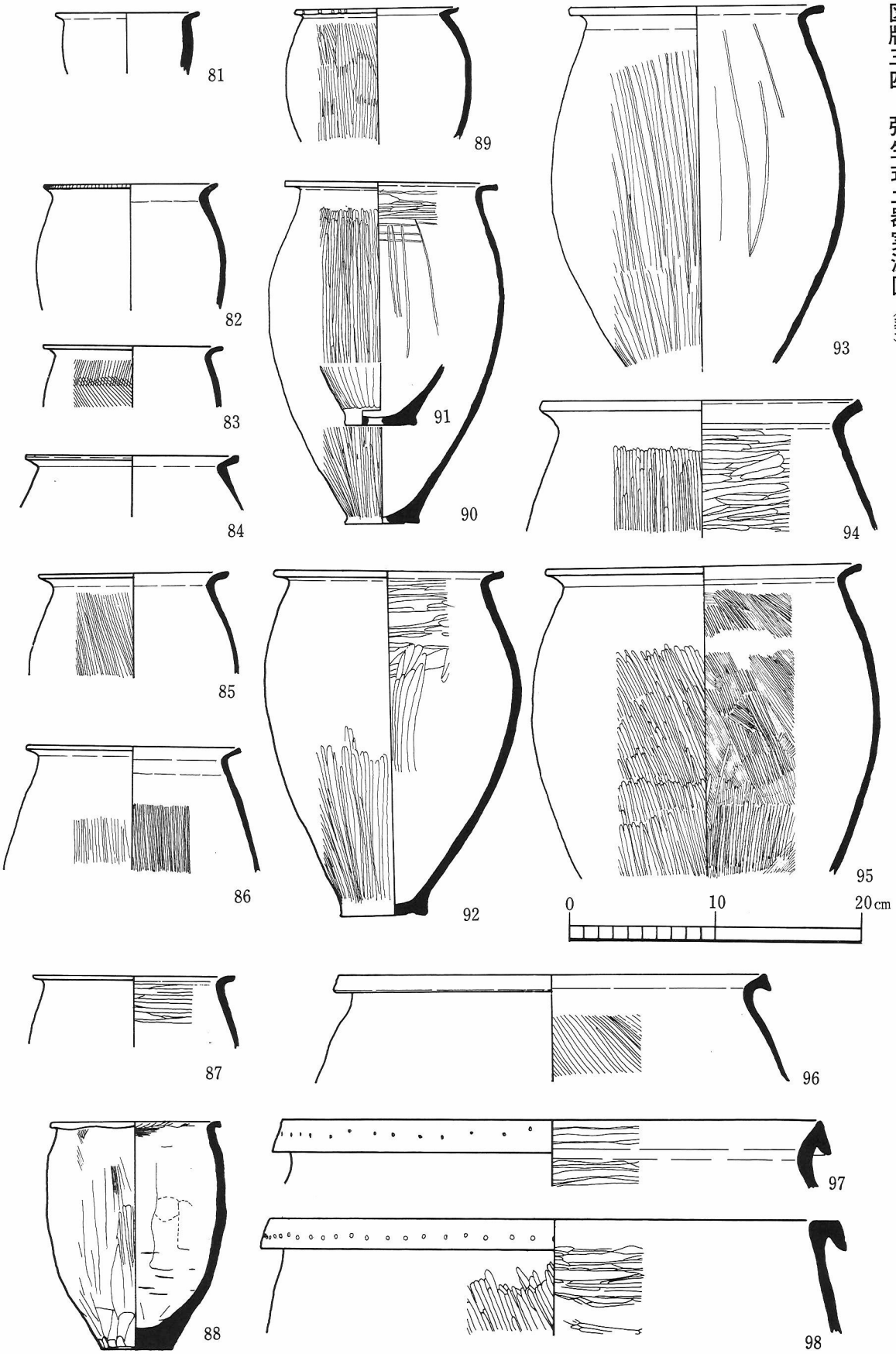
図版三二　弥生式土器実測図（高杯）



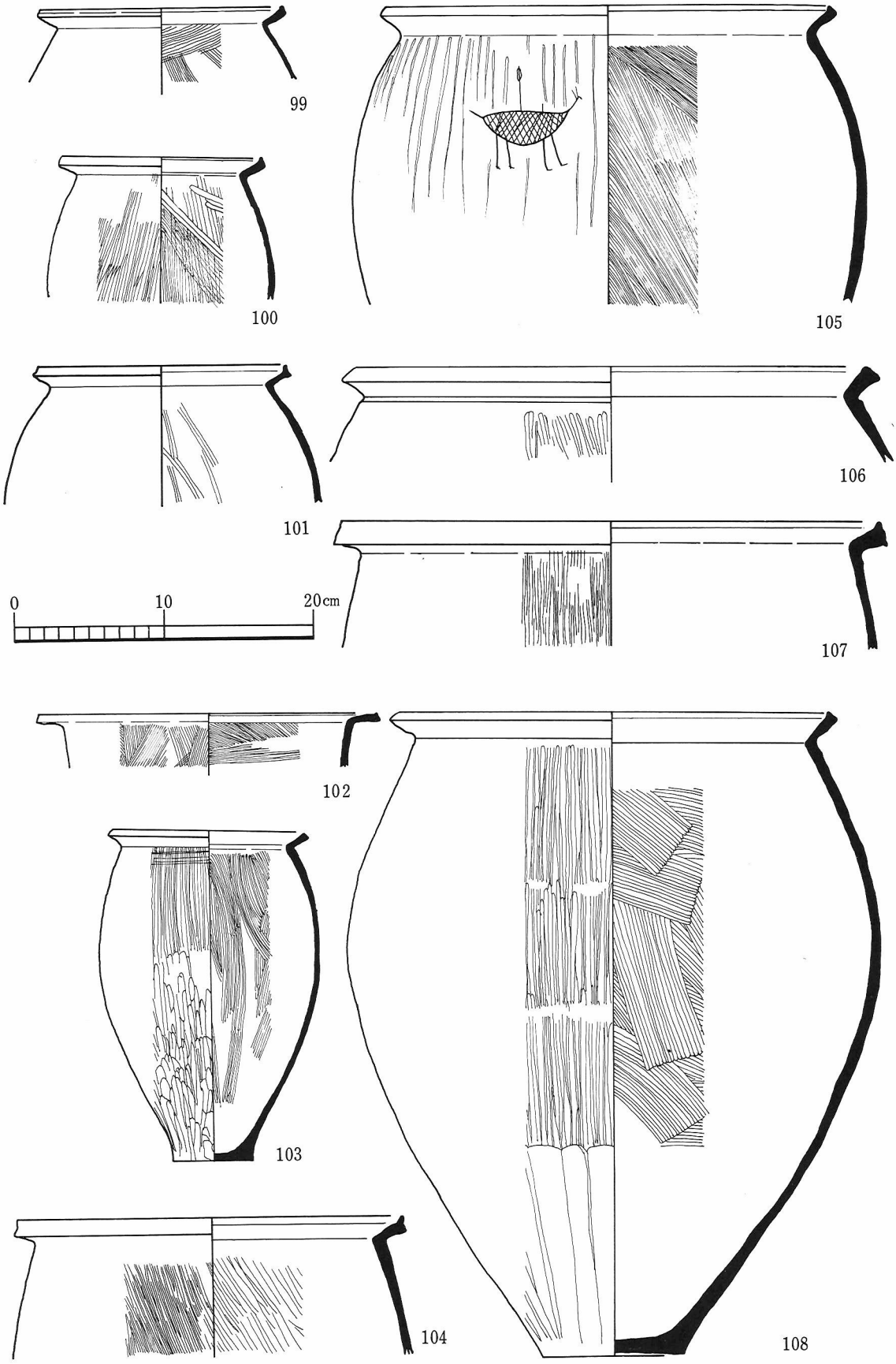
図版三三　弥生式土器実測図（鉢）



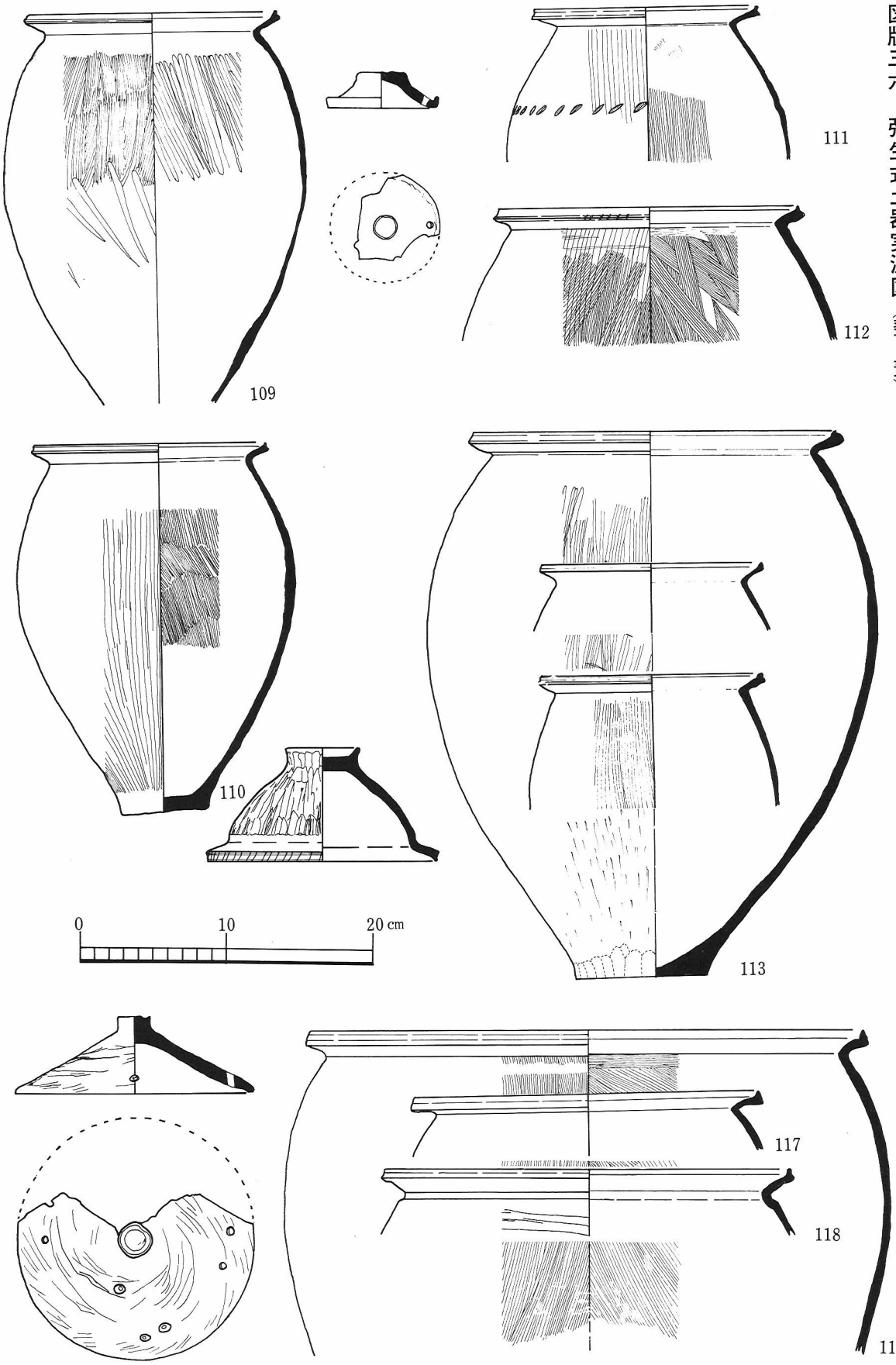
図版三四　弥生式土器実測図（甕）



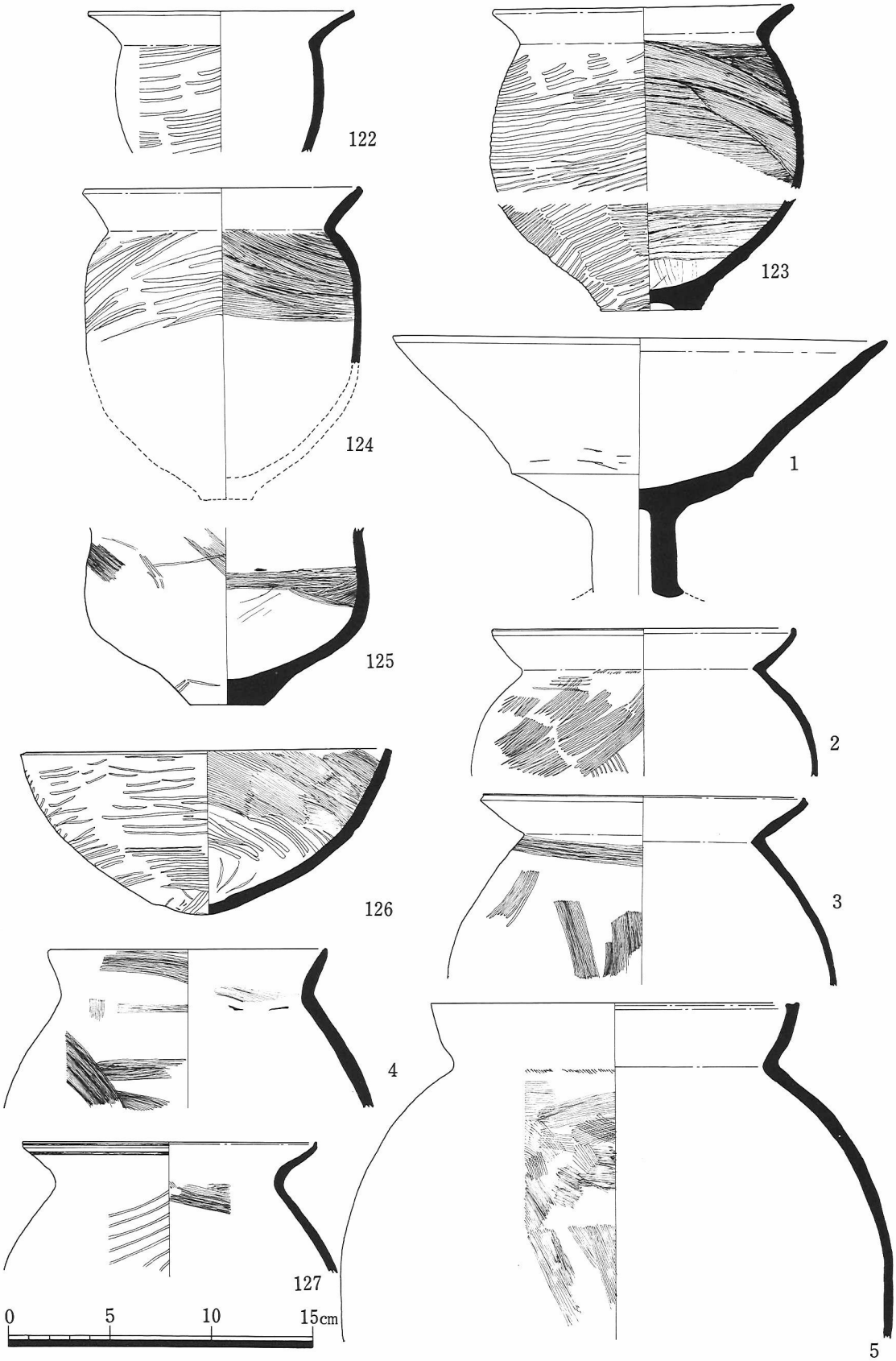
図版三五　弥生式土器実測図（甕）



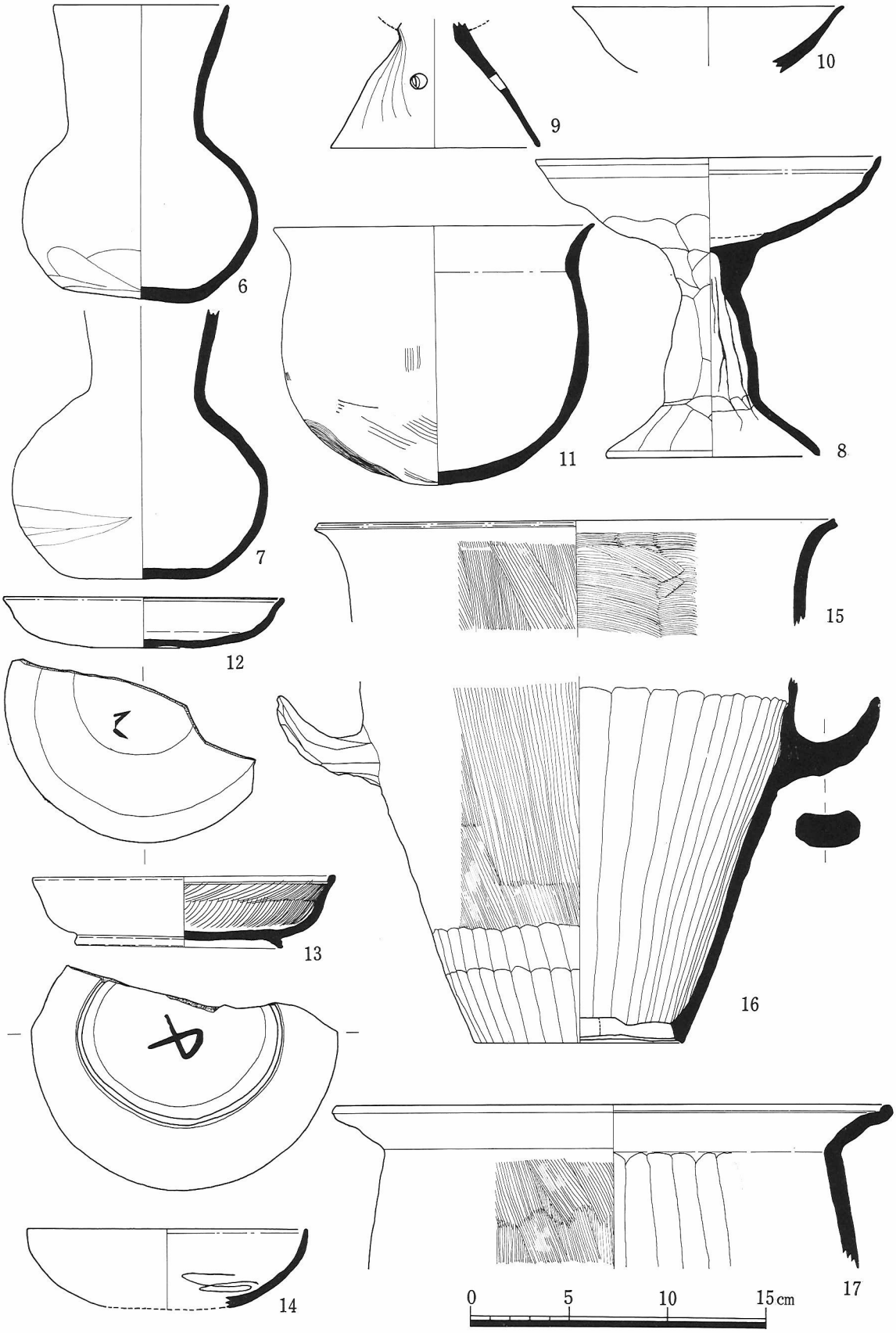
図版三六　弥生式土器実測図（甕・蓋）



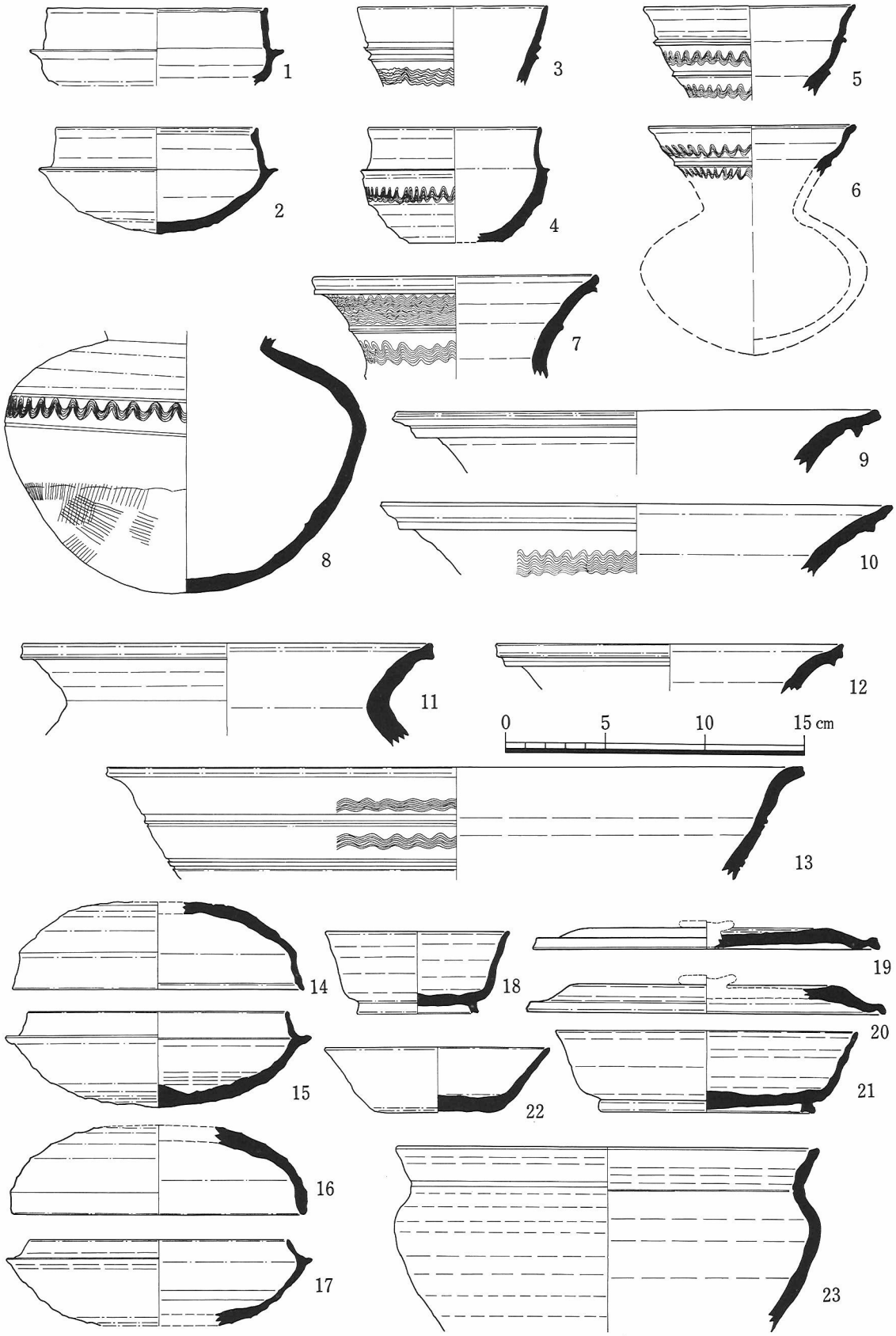
図版三七　弥生式土器・土師器実測図



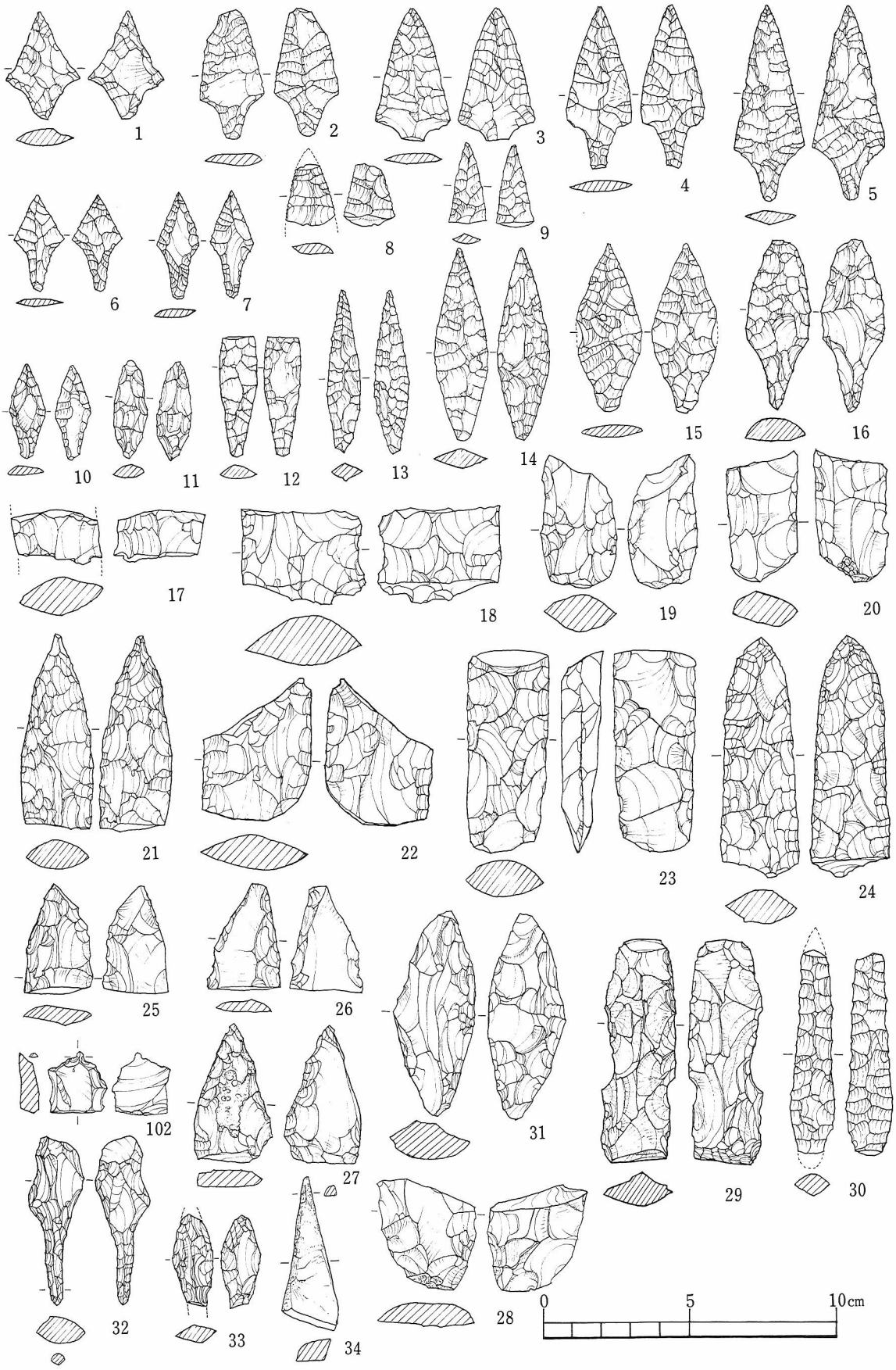
図版三八　土師器実測図



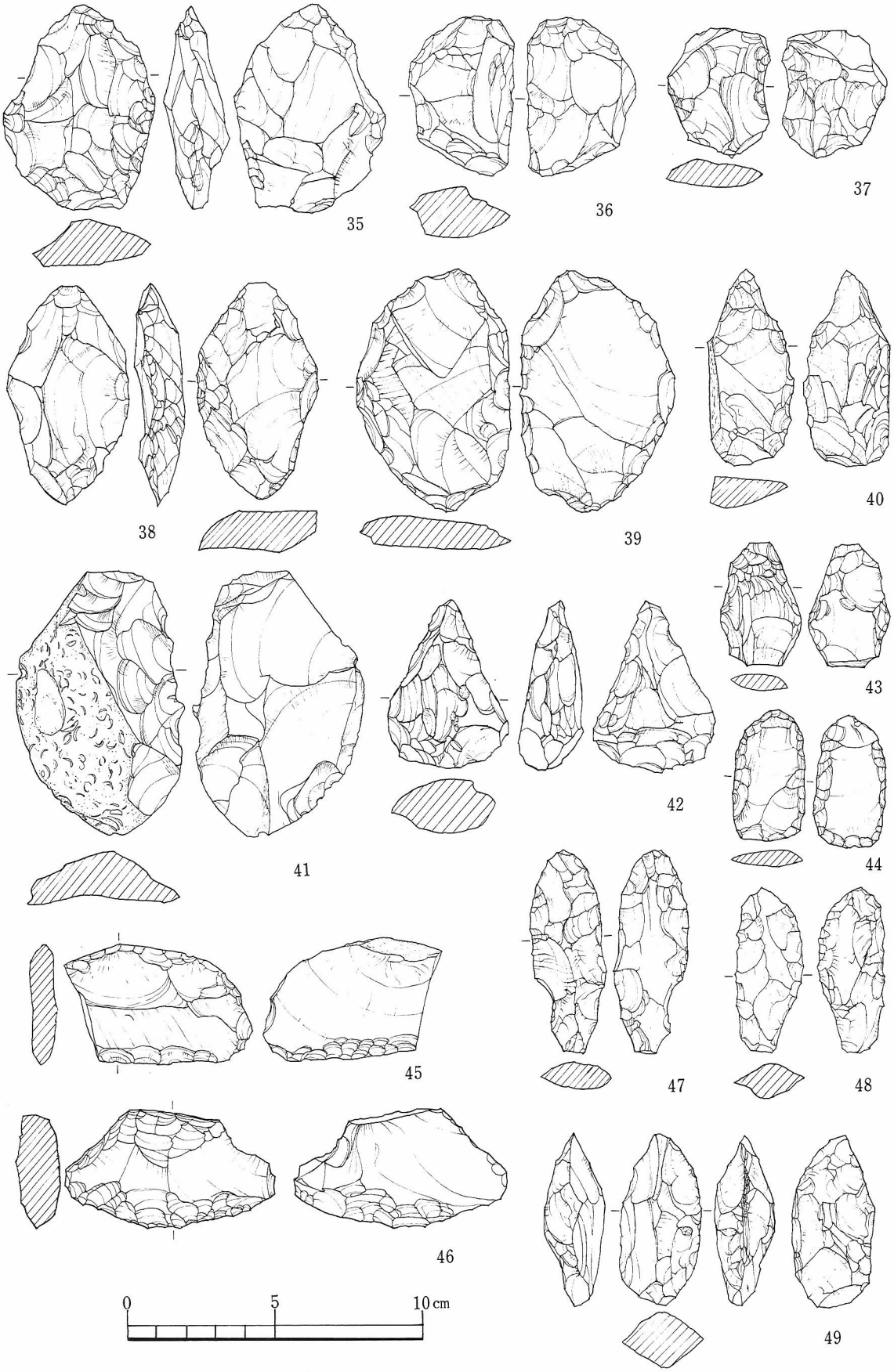
図版三九　須恵器実測図



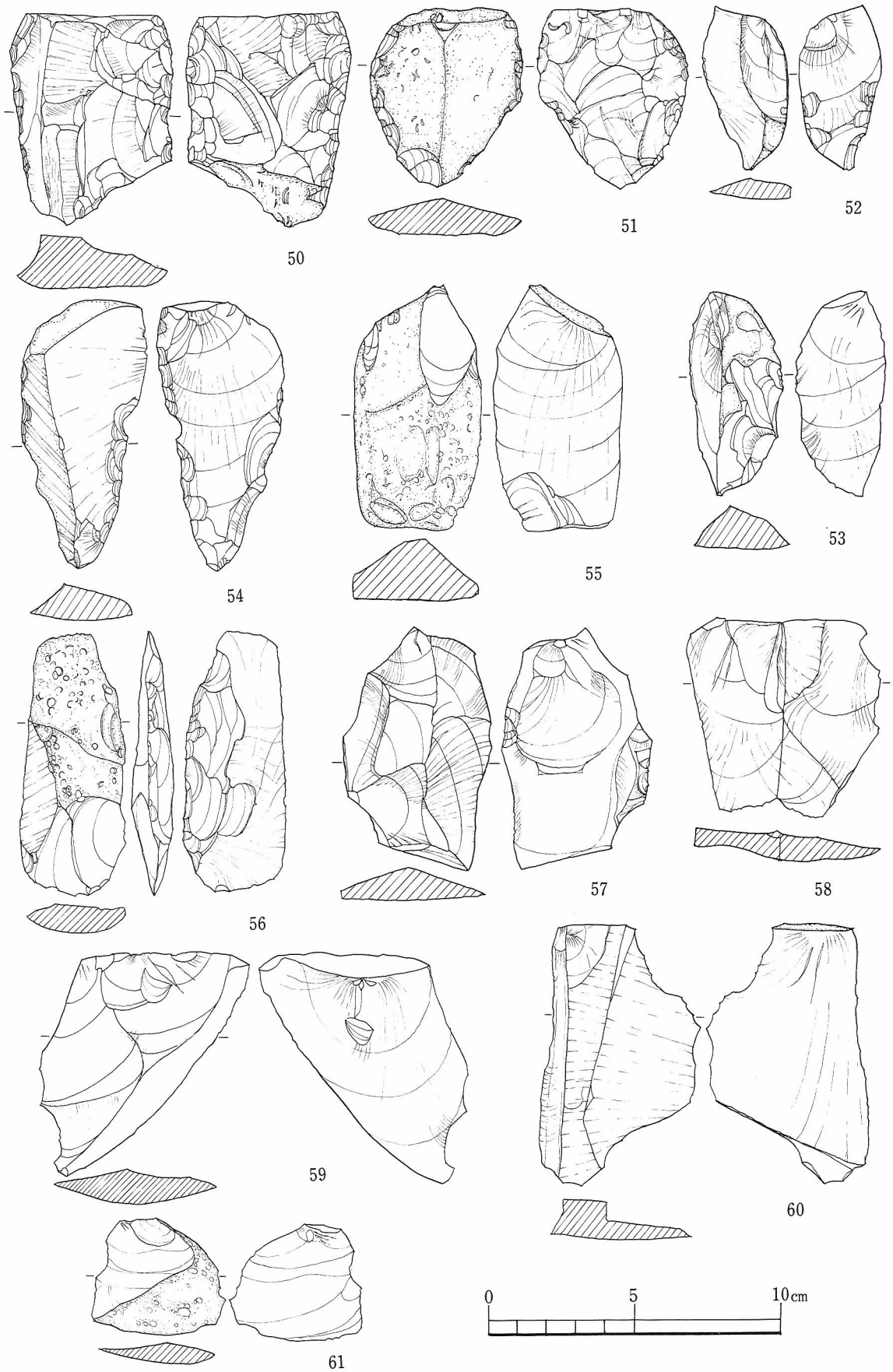
図版四〇　石器実測図（石鏃・石槍・石錘）



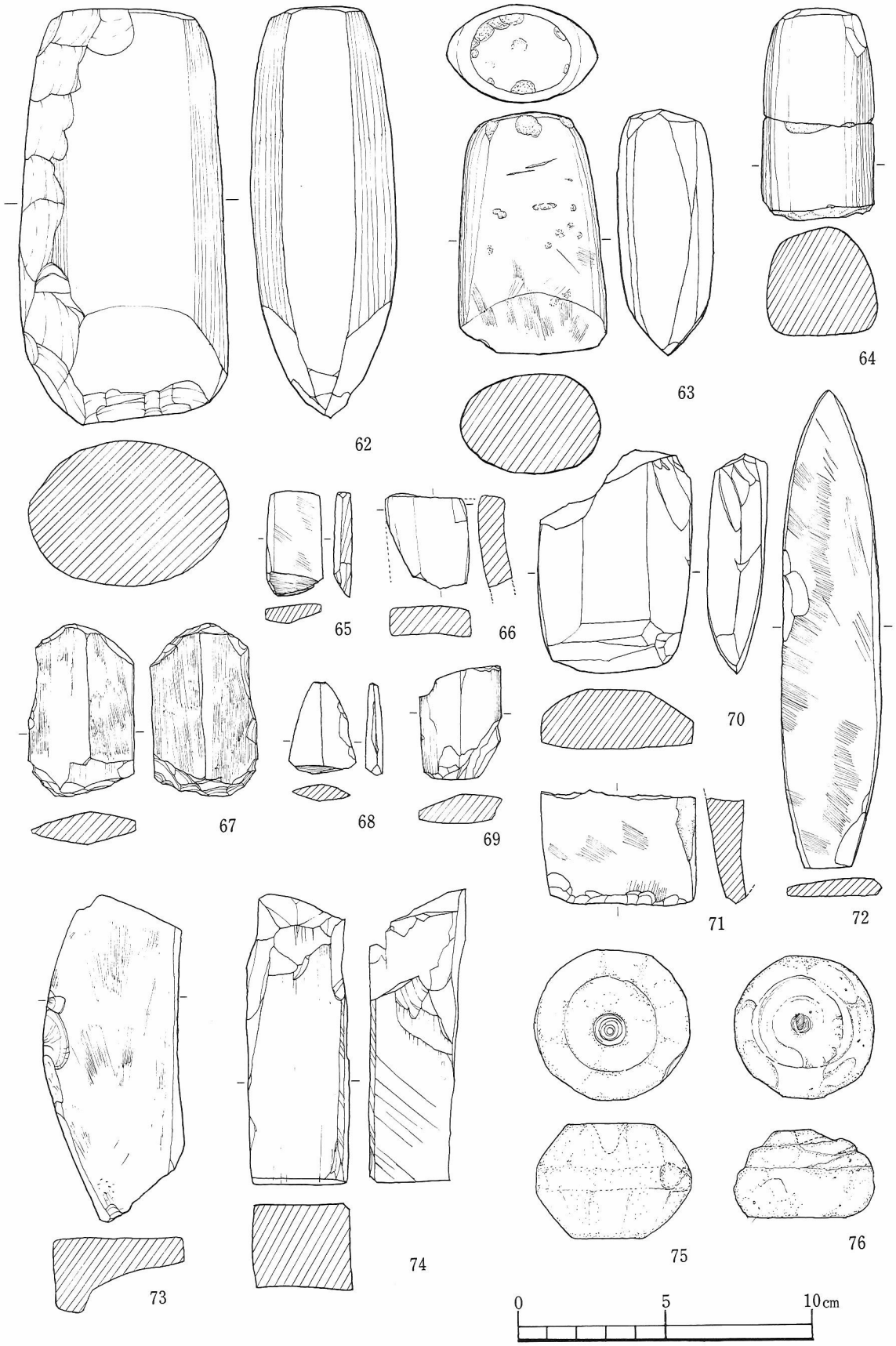
図版四一　石器実測図（不定形石器）



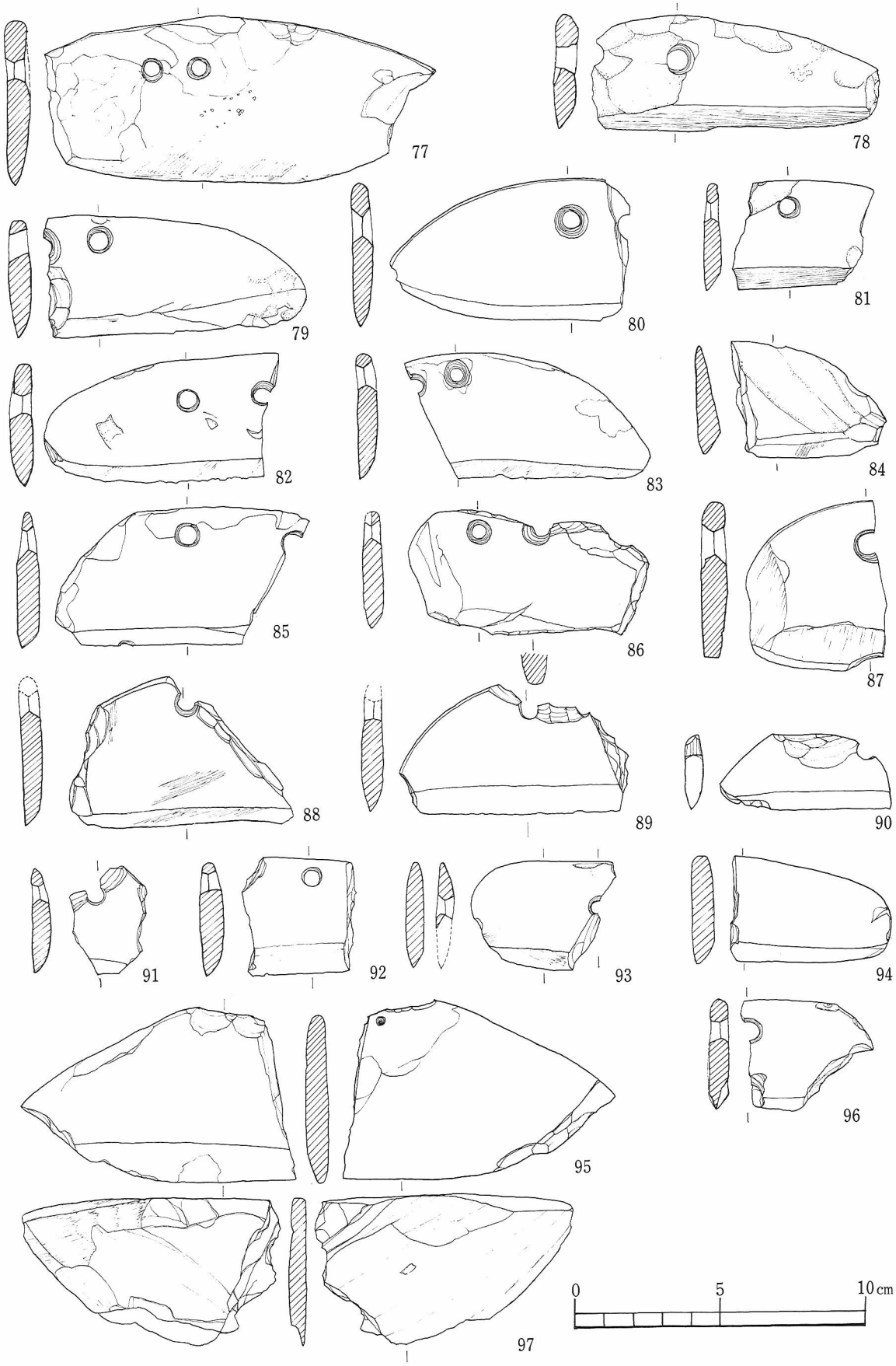
図版四二　石器実測図（剥片）

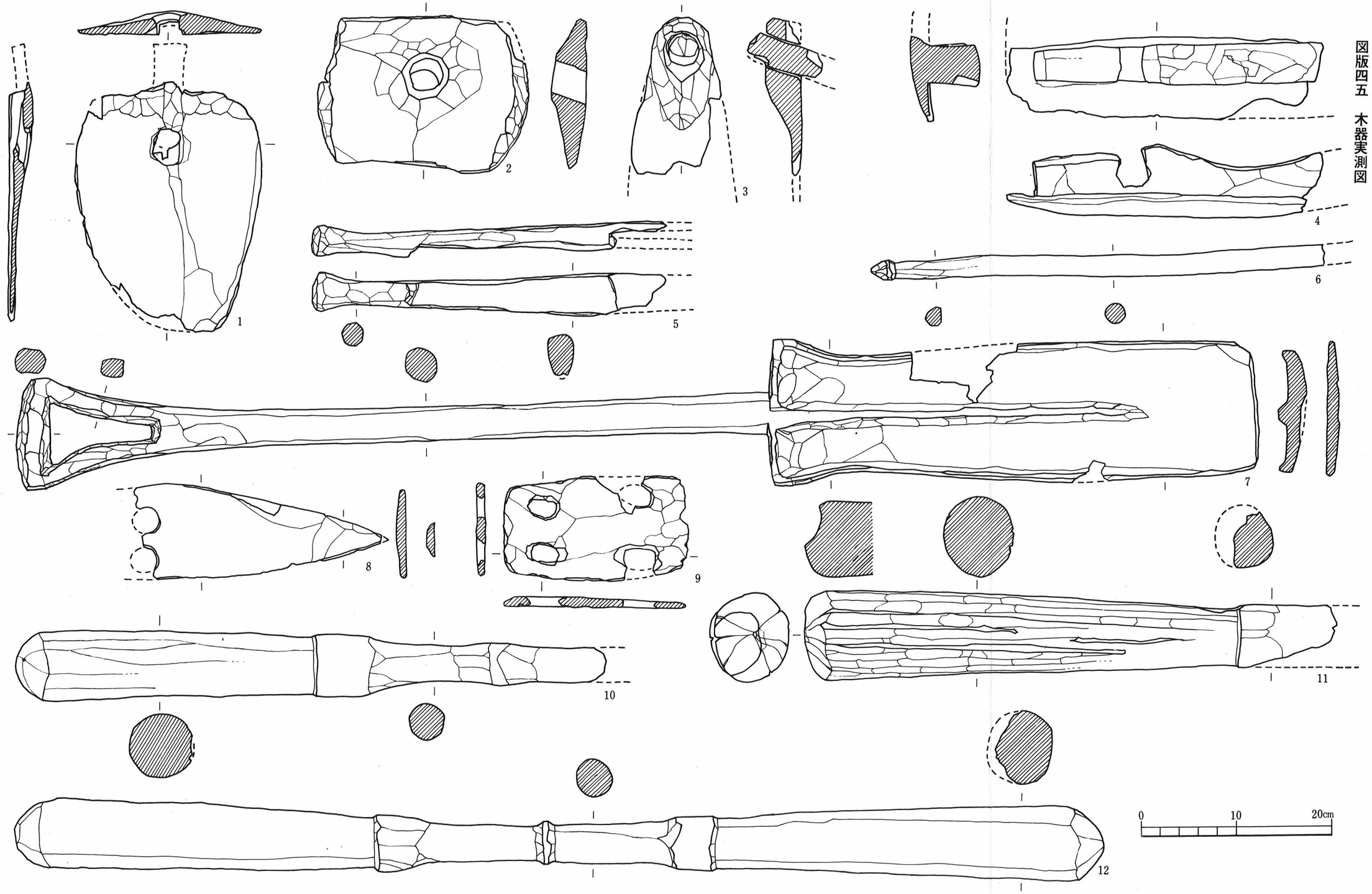


図版四三　石器実測図（磨製石器）



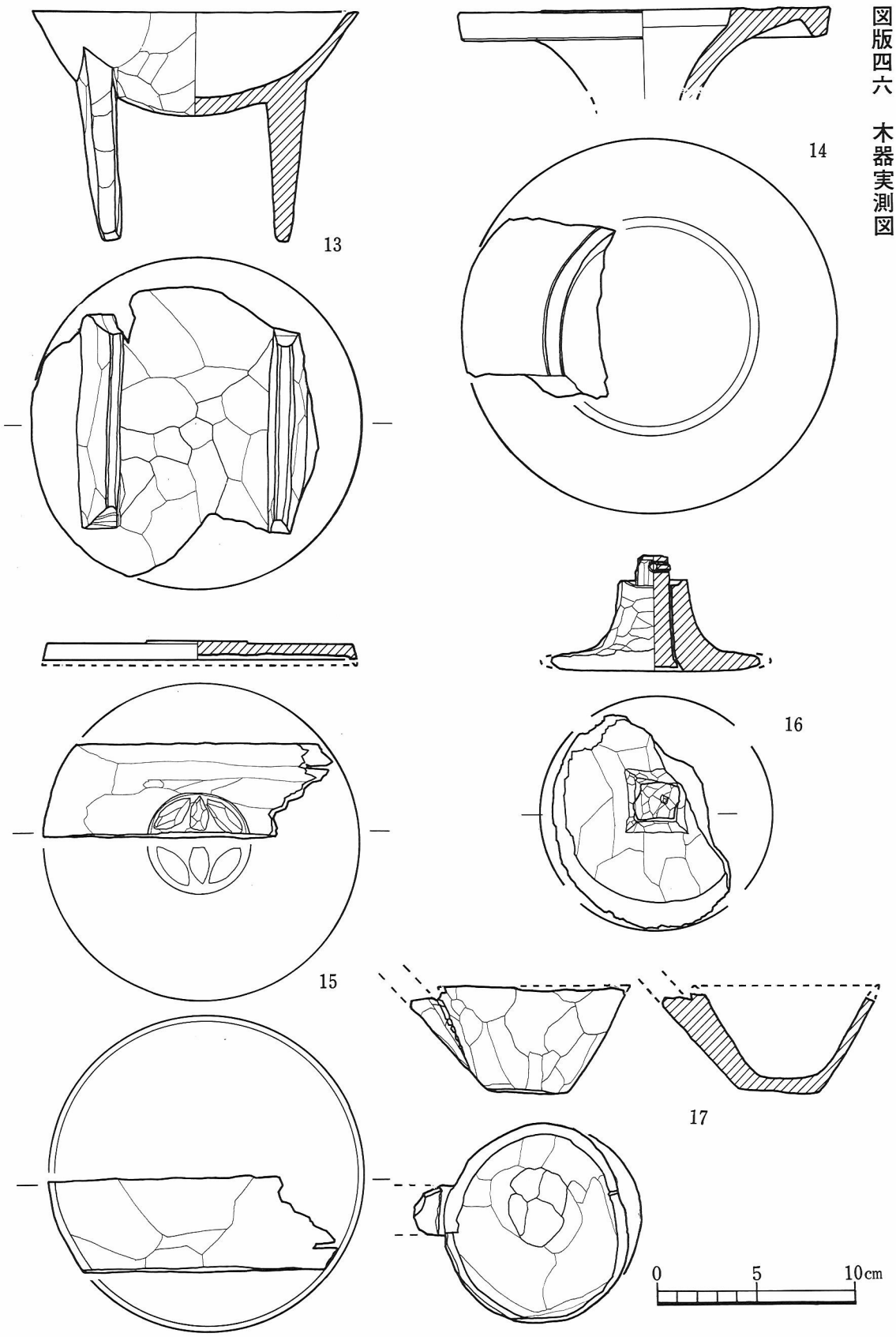
図版四四　石器実測図（石包丁）





図版四五　木器実測図

図版四六　木器実測図



瓜生堂遺跡《資料編》正誤表

ページ	行（欄）	誤	正
3	表目次の表２	３ＯＣ24Ｃ溝	３ＯＣ24溝
8	9	施している、	施している。
8	19	い、	い。
11	11	(128)	(131)
11	13	(129)	(130)
11	15	(128, 129)	(131, 130)
11	上から11行目	内面にも叩目が	内面にはハケ目が
15	摘　要	胎　工	胎　土
15	土器番号２の出土地区	方形周溝基	方形周溝墓
15	土器番号２の口頸部整形（外）	刷毛目以	刷毛目以外
17	土器番号10の出土地区	方形周溝基	方形周溝墓
19	土器番号17の胎土	徴砂粒	微砂粒
45	摘　要	胎　工	胎　土
46～47	土器番号122、124、123、127	壅	甕
46	土器番号125の種類	小形壺形土器	鉢形土器
46	土器番号126肩胴部	○内・外面とも叩き目が	○外面には叩き目が
48	摘　要	胎　工	胎　土
48	土器番号131口頸部	思われる叩き目が	思われるハケ目が
48	土器番号132の種類	小形甕形土器	鉢形土器
53	土器番号１、２の種類	林　身	杯　身
55	土器番号11の胎土	（若干の砂粘を含む）	（若干の砂粒を含む）
59	16	他は5.2gが２個であり	他は5.2gが２個、３gが１個、2.5gが１個、8.9gが１個で、
60	16	側縁も	側縁を
60	18	剝ぎ方を方を	剝ぎ方を
61	34	ガブロ岩。（斑砺岩）	ガブロ岩（斑砺岩）。
62	27	頁岩。	頁岩、
69	3	不明でるあ。	不明である。
69	20	ところ、に削り	ところに削り
69	22	木取りは１、とは	木取りは、１とは
図版18	見出し	否定形石器	不定形石器
図版20	見出し	紡　鐘	紡錘車

正誤表

	誤	正
P10 表8	Na (ナトリウム)	Na. feldspar (ナトリウム長石)